

特別企画・座談会

第24回日本歯科医学会学術大会から みえてきたこれからの歯科界

第24回
日本歯科医学会学術大会
報告



日本歯科医学会
<https://www.jads.jp>

JJADS

日歯医学会誌

ISSN 0286-164X

ここから全てが始まる



Step 1 CT撮影

Aadva® GX-100 3D

多彩な領域が撮影可能なCBCT。(最大φ23×24cm※)

- 最短7.7秒高速スキャン ※仕様により異なります。
- DICOM形式での顎骨データ出力が可能

Aadva X-Ray 3D シリーズ
管理医療機器 特定保守管理医療機器 302AMBZX00002Z00



画像はイメージです。

Step 2 インプラント埋入シミュレーション

イデアランド

IDEALand

シミュレーション、サージカルガイド製作、
専用の外科キットを用いた
インプラント治療をサポート。

イデアランド
管理医療機器 227AHBZX00029A02



Aadva® Total Integration

アドバ
トータル
インテグレーション

Step 3 オペレーション

サイトランス

Implant & Cytrans

長期安定性を実現した表面性状の
“Anchor surface®”インプラント。

+

世界初の炭酸アパタイトを主成分とする骨補填材。

Step 4 ファイナルレストレーション

CAD/CAM

オーダーメイド※のインプラント補綴装置の
製作に対応。

※オーラルヘルスケアサービスセンター(ジーシー加工センター)対応



ジーシー サイトランス グラニューール
高度管理医療機器 22900BZX00406000



ジーシー インプラント Aadva
高度管理医療機器 22600BZX00155000

発売元 株式会社 ジーシー / 製造販売元 株式会社 ジーシー
東京都文京区本郷3丁目2番14号 東京都板橋区蓮沼町76番1号

カスタマーサービスセンター お客様窓口 ☎ 0120-416480 受付時間 9:00a.m.~5:00p.m. (土曜日、日曜日、祝日を除く)
www.gcdental.co.jp/

支店 ●東京 (03)3813-5751 ●大阪 (06)4790-7333 営業所 ●北海道 (011)729-2130 ●東北 (022)207-3370 ●名古屋 (052)757-5722 ●九州 (092)441-1286

※掲載の内容は2022年1月現在のものです。※色調は印刷のため現品と若干異なることがあります。※会社名・製品名等は各社の登録商標または商標です。

読者アンケート票 (第41巻)

本誌 (第41巻) をお読みになり、ご意見ご感想をお寄せください。表紙デザインの感想、臨床に役立った論文、記事等について□の中に✓印を付けてください。皆様の声を今後の会誌の企画・編集に反映させたいと思いますので、ご協力をお願いします。ご回答は日本歯科医学会事務局 (FAX: 03-3262-9885) へ令和4年10月31日までにご返信ください。

日本歯科医師会のオンデマンドまたは日本歯科医学会ホームページ (<https://www.jads.jp/>) では、本誌をフルカラー版で公開中です。ぜひご覧ください。



webアンケートは
こちらから

ご所属の 歯科医師会・ 分科会名	アンケートの集計のため、ご所属は必ずご記入ください。	氏名	
送付先	〒 都道府県	電話番号	
職種	開業歯科医師	勤務歯科医師	大学及び研究者 その他 []

1. 第42巻の冊子送付をご希望の場合は下記に✓印をお付けください。なお、発送物は所属先の歯科医師会・分科会に登録された住所に送付いたします。

第42巻の冊子送付を希望する (令和4年10月31日締切)

※冊子数には限りがありますので、回答はお早めにご返信ください。

2. 会誌の表紙デザイン

良い 悪い どちらともいえない その他 []

3. 論文、記事等

■巻頭言

歯科界のターニングポイント

■第24回日本歯科医学会学術大会報告

会頭報告/準備委員長報告

■特別企画

座談会 第24回日本歯科医学会学術大会からみえてきたこれからの歯科界

■学術研究

【平成31年度 (令和元年度) 採択プロジェクト研究】

A. 人生100年時代を見据えた歯科治療指針に関する研究

フレイルおよび認知症と口腔健康の關係に焦点化した
人生100年時代を見据えた歯科治療指針作成に関する研究

B. オンラインシステム等を用いた新規診断法の確立

AI活用によるオンライン口腔健康管理システムの構築に関する研究

■その他

学際交流

会務報告/専門・認定分科会会務報告/関連団体報告

4. 会誌の構成

今のままでよい わからない 変えたほうがよい []

5. 読みたい学会誌に育てるためにアイデア、テーマなどのご意見をお書きください。

ご協力ありがとうございました。

日本歯科医学会誌編集委員会

日本歯科医学会から “日本歯科医師会入会”のご案内

国民の歯科保健の普及向上に寄与することを目的に設立された日本歯科医師会は、歯科医師を代表する公益社団法人で、政府と協議しながら国民の健康に大きく寄与しています。専門分科会および認定分科会から構成される日本歯科医学会は、この日本歯科医師会と連携し、歯科医学・医術ならびに歯科医療の向上に努め活動を行っています。

ご存知のとおり、日本歯科医学会の年間事業をはじめ、4年に1回開催の日本歯科医学会学術大会等は、日本歯科医師会の予算で運営されています。

そのため、日本歯科医学会に所属し活動する専門分科会および認定分科会の会員は、日本歯科医師会の会員であることが望まれます。会員には、正会員と準会員があります。

正 会 員

- 専門分科会および認定分科会の会員で、歯科診療所を開設若しくは歯科診療所に勤務されている歯科医師が対象です。
- 歯科診療所の所在地の郡市区歯科医師会ならびに都道府県歯科医師会に入会の上、日本歯科医師会に入会することができます。

準 会 員

- 医育機関に勤務する歯科医師、または公務員である歯科医師が対象です。また、平成25年4月より準会員の対象は、病院や介護老人保健施設等に勤務し開業していない歯科医師、および研究機関に勤務し診療に従事しない歯科医師まで拡大されています。
- 準会員は日歯直轄として入会することができるほか、都道府県歯科医師会に所属しながら入会することもできます。また、正会員と比較した場合、日本歯科医師会役員等の選挙権・被選挙権はありませんが、正会員と同等に刊行物の頒布を受けられ、また同会主催の学術集会への出席もできます。さらに、加入年齢制限等はありませんが、日歯福祉共済保険や日歯年金保険に加入することができます。
- 平成25年度より臨床研修歯科医を対象とした第6種会員ができました。第6種会員の入会機会は歯科医師法に基づく臨床研修期間中のみが対象となり、翌々年度まで会員籍を継続することができます。

この正会員、準会員の入会のご案内は、歯科界の将来のために、組織基盤の確立・強化が急務であるとの日本歯科医師会からの協力要請に応えるものです。

《問い合わせ先》

公益社団法人日本歯科医師会総務部会計・厚生会員課（厚生会員部門）

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-20

TEL：03-3262-9323 / FAX：03-3262-9885

<https://www.jda.or.jp>

会員区分	入会金	年会費
正会員*	10,000 円	38,000 円
準会員	第3種会員*	12,500 円
	第6種会員**	—

※一診療所に所属する正会員のうち、その責任者（管理者を含む）のほかは、会費を減額することができます。詳しくは日本歯科医師会若しくは診療所所在地の都道府県歯科医師会にお問い合わせください。

* 第3種会員は、公務員である歯科医師、医育機関・病院・介護老人保健施設等に勤務し開業していない歯科医師、研究機関に勤務し診療に従事しない歯科医師が対象です。

** 第6種会員は、歯科医師法に基づく臨床研修歯科医が対象で年会費は不要です。

目次

読者アンケート票（第41巻）

巻頭言

歯科界のターニングポイント	住友雅人	3
第24回日本歯科医学会学術大会報告		4
インフォメーション		8

特別企画

〔座談会〕第24回日本歯科医学会学術大会からみえてきたこれからの歯科界	住友雅人, 松村英雄, 小林隆太郎 松野智宣, 大久保力廣	9
-------------------------------------	----------------------------------	---

学術研究

令和3年度プロジェクト研究	解説・尾松素樹	25
平成31年度(令和元年度)採択プロジェクト研究		
A. 人生100年時代を見据えた歯科治療指針に関する研究		
フレイルおよび認知症と口腔健康の関係に焦点化した 人生100年時代を見据えた歯科治療指針作成に関する研究	平野浩彦ほか	27
B. オンラインシステム等を用いた新規診断法の確立		
AI活用によるオンライン口腔健康管理システムの構築に関する研究	藤澤政紀ほか	32

学際交流

第37回歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い	解説・尾松素樹	37
-----------------------------	---------	----

会務報告

日本歯科医学会, 専門分科会, 認定分科会		48
-----------------------	--	----

関連団体報告

日本学術会議・歯学委員会, 国際歯科研究学会日本部会(JADR) スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム(SCRP)		99
---	--	----

編集後記

	浅野 正岳	102
--	-------	-----

CONTENTS

Questionnaire to Readers

Compass	A turning point for the dental community	Masahito SUMITOMO	3
	Report from the 24th Scientific Meeting of the Japanese Association for Dental Science		4
	Information		8
Trend	Symposium Future perspectives of the dental community from the 24th Scientific Meeting of the Japanese Association for Dental Science Masahito SUMITOMO, Hideo MATSUMURA, Ryutaro KOBAYASHI, Tomonori MATSUNO, Chikahiro OHKUBO		9
Research	Project Research for 2021	Introduction / Motoki OMATSU	25
	Research and Study Project for 2019 A. Research on the guidelines for dental treatment in the era of 100-year lifespan A Study on Oral Functional Management of the Older People in the Super-aged Society ; Focusing on Frailty and Cognitive Decline	Hirohiko HIRANO et al.	27
	B. Establishment of new diagnostic methods with online system Development of a Novel Oral Health Management System Utilizing AI	Masanori FUJISAWA et al.	32
Forum	Group Promotion Overall Research on Dentistry	Introduction / Motoki OMATSU	37
Activity Report	JADS, Specialized Subcommittee, Official Subcommittee		48
Related Group Report	SCJ, JADR, SCRIP		99
Editor's Column	Masatake ASANO	102

巻頭言

歯科界のターニングポイント

日本歯科医学会 会長
住友 雅人



第41巻には昨年開催しました第24回日本歯科医学会学術大会の報告が多く掲載されます。5年ぶりのこの大会は、みなさま方にも新しい時代の学術大会の認識をいただいたことでしょうか。3日間のライブ配信と1か月間のオンデマンド配信ではもちろんのこと、この会誌においても新たな発見があるでしょう。公募で選考した多くのプログラムは実に充実した内容でした。学術大会の準備委員会はあくまでも参加者をおもてなしする立場ですが、はじめてづくしの作業をよく頑張って遂行していただいたと感謝しています。その気持ちはもちろん参加してくださった方々に十分に届いていることでしょうか。主催した日本歯科医学会会長として、準備委員会をはじめ参加者、協力者、支援者のすべての方々に厚くお礼を申し上げます。

現在、今大会を検証するために参加者を対象にアンケート調査を行っています。この調査結果は2025年開催の第25回日本歯科医学会学術大会に役立てることに主眼をおいていますが、各分科会や歯科医師会の学術の催し物でご活用いただけます。改めて情報提供をさせていただきます。

さて、今大会を記念して制作しました記念誌についてお伝えします。従来、大会記念誌は会場受付においてコンgresバッグに入れて参加者に配付していましたが、全面オンライン開催になりましたので、ホームページの大会サイトで公開しました。制作にあたっては大会の準備委員会に「大会記念誌担当チーム」を設置しました。チームの構成員は日本歯科医史学会の渋谷 鑽理事長を中心にした4名の方々です。中身は2部構成になっています。第1部は「日本歯科医学会のあゆみ」として、明治の時代に遡っての「歯科医学会」から今日の日本歯科医学会学術大会までの歴史を、収集した多くの情報から、実に詳細に紹介しています。日本歯科医学会のあゆみについても最高の資料となりました。これまで学会のHPの沿革では、日本歯科医学会の設立を1949年（昭和24年）としていましたが、これは戦後新しく発足した社団法人日本歯科医師会の学術会議組織として定款に明文化された年で、この時に、第1回日本歯科医学会総会が開催されたことから設立年とされてきたとのこと。これからは、本誌で提言された、大日本歯科医会（日本歯科医師会の前身）から日本歯科医学会として独立した1903年（明治36年）を「日本歯科医学会」発祥の年とさせていただきます。ちなみに日本歯科医師会の設立も沿革において、1903年（明治36年）となっています。第2部の「学術大会のニューノーマル」では、これからの日本歯科医学会学術大会をはじめ、分科会や歯科医師会の学術大会の方向性について、座談会を開催して示しています。この大会記念誌を学会のホームページのバナーからぜひご覧ください。

私たちは、コロナ禍の影響による学術大会の開催様式の対応にとどまらず、大会テーマの「逆転の発想 歯科界2040年への挑戦」の通り、2021年を歯科界のターニングポイントと捉え、世に発出した歯科イノベーションを2022年は具現化への準備の年と位置付け、2040年の健康寿命の延伸に向けて邁進してまいりましょう。

ニューノーマル 第24回 日本歯科医学会学術大会に携わって



会頭 住友 雅人

第24回日本歯科医学会学術大会は2021年10月31日17時をもって終了しました。ここに至るまでには、実に多くの方々の、ご努力がありました。加えて、多くの方々から、ご協力とご支援をいただきました。学術大会は、参加者、講演者、発表者、運営者などがあって、初めて成り立ちます。おかげさまで、たくさんの演題もいただきました。

実は学術大会の終わりは次の学術大会の始まりでもあります。ここで発信したものは社会に対する約束事ですので具現化をしていかなければなりません。その成果は次の学術大会で披露するものもあるでしょうし、継続的な事柄として次々期の学術大会につなげていくものもあります。とにかく持続可能な開発目標を示しましたので、人がかわっても歯科界の目標として続いていきます。そこで大切なことは、新しい様式で開催された今大会の検証作業です。日本歯科医師会、地区歯科医師会、そして学会加盟と登録の分科会から情報をいただき、整理し、分析します。検証作業からの多くの情報は、今後の学術大会のあり方を構築する上で、もっと言えば歯科界の方向性を見定める上でとても重要です。

今大会の三役企画のプログラムについてアクセス数から簡単に振り返ってみます。開会講演の小泉進次郎先生と松村真宏先生の講演はライブ配信もオンデマンド配信においても、高いアクセス回数が記録されていました。学術講演の中では渡部 茂先生の企画講演は高い回数を示していました。公開講演の池上 彰氏の回数は一般の方々も視聴可能であったことから、全プログラムの中、最高回数となりました。従来とは異質の企画の公開フォーラムにも多くの視聴がありました。このプログラムは、歯科大学・歯学部を選択する若者を増やすという趣意での企画です。歯科医師免許を獲得するというは当たり前として、自分の持っている能力をもう一つのプロフェッショナルに育てていく場として活用していただきたいと、そのモデルとなる方々を紹介しました。目的は、多様性のある歯科界を構築することでの活性化です。

今大会中で特記すべきことは、多くの場面で大会テーマの「逆転の発想」や「イノベーション」、そして「SDGs」のキーワードが取り上げられ、しっかりと大会の柱となったことです。

ここで示された課題や仕掛けは、これからの本番です。発信したものを社会実装し、歯科医学・医療を通して健康寿命延伸への貢献を社会に示すという、歯科界活性化への挑戦の始まりです。歯科イノベーションロードマップには、マイルストーンとともに少なくとも2040年までの目標が明示されています。終わりは始まりであり始まりは具現化して終わりを迎えるなければなりません。これも逆転の発想なのでしょう。

今大会にご協力いただきました多くの方々に改めて心からお礼申し上げます。

第24回 日本歯科医学会学術大会 報告

準備委員長 松村 英雄



第24回日本歯科医学会学術大会は、令和3（2021）年9月23日（木：祝日）から25日（土）までの3日間、主会場の催事、プログラムを除いてオンラインで開催された。このたびの大会については、住友学会長から学会のあり方検討協議会と第24回学会総会のあり方検討協議会に対して諮問が発出され、平成29（2017）年12月までに、両協議会から以下を骨子とした答申が提出されていた。

1. 第24回日本歯科医学会学術大会を2021年9月23日から25日までの会期で、パシフィコ横浜（横浜市）を会場として開催する。
2. 日本歯科医学会会長が学術大会の会頭を務める。
3. 日本歯科医師会および日本歯科医学会分科会プログラムの充実を図る。

この答申をふまえ、大会は主幹校なしでの企画運営となり、住友会長を会頭として準備が進められてきた。大会は会場開催される予定であったが、感染症の拡大のみならず、緊急事態宣言延長期間が大会会期に含まれるという事態となり、オンライン開催へと変更された。その結果、多くの会員が集い、活発な討論が交わされる大会とはならなかったが、オンデマンドの採用により、会場以外で重複プログラムを後日視聴できるという、参加者にとっては新たな形式の大会となった。今大会のオンデマンドシステムは、オンラインによるライブ配信終了の翌日から録画を聴取できる方式であり、参加登録者数は9月25日閉会の時点で17,000余名、オンデマンド配信最終日の10月31日には20,298名に達した。

今大会は、逆転の発想、歯科界2040年への挑戦、というテーマが設定されたが、開催が会場からオンラインへと変換されたこと自体が逆転の発想となった。また、会期が木、金、土の3日間となった点は大きな変更点であった。さらに、過去には例のないプログラム担当チームも編成され、学会本体が歯科医師会と共同で企画運営を担当した。

今大会のもう一つの逆転の発想は、地区歯科医師会および学会分科会の学術大会との共催を実現したことである。こうしたさまざまな逆転の発想に基づく大会であったが、登録者＝そのまま参加者とみなせる今大会は、実際の参加者数が多い大会であったと総括できる。逆転また逆転という展開は、今年の両リーグペナントレースにも通じるものがあるが、何事もシメが肝要と文字通り肝に銘じた大会であった。このたびの学術大会に関係されたすべての団体各位に心よりお礼を申し上げる次第である。



第24回日本歯科医学会学術大会

逆転の発想 歯科界2040年への挑戦

A Brand New Take : Dentistry's Challenge in the Lead-up to 2040

LIVE 配信期間：2021年9月23日(木)、24日(金)、25日(土)

オンデマンド配信期間：2021年9月26日(日)～10月31日(日)17時

開会式

日時：令和3年9月23日(木)午後2時
会場：パシフィコ横浜
会議センター 301, 302



開式の辞
柳川 忠廣 副会頭



式 辞
住友 雅人 会頭



挨拶
堀 憲郎 日本歯科医師会会長

● 開会講演 1



講師：小泉 進次郎
環境大臣(気候変動担当)
内閣府特命担当大臣(原子力防災)
衆議院議員



座長：小林 隆太郎
日本歯科大学東京短期大学 学長

● 開会講演 2



講師：松村 真宏
大阪大学大学院経済学研究科 教授
(経営学系専攻)



座長：天野 敦雄
大阪大学大学院歯学研究科 教授
(予防歯科学教室)

● 会頭講演

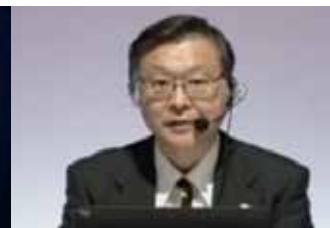


住友 雅人
日本歯科医学会 会長
一般社団法人日本歯科医学会連合 理事長

● 企画講演



講師：渡部 茂
明海大学保健医療学部 教授(口腔保健学科)



座長：松村 英雄
日本大学歯学部 教授(歯科補綴学第Ⅲ講座)

● 祝 辞



萩生田 光一
文部科学大臣



田村 憲久
厚生労働大臣



黒岩 祐治
神奈川県知事



山中 竹春
横浜市長



山中 一剛
日本デンタルショー2021 準備委員長



松井 克之
神奈川県歯科医師会 会長

● 公開講演



池上 彰
ジャーナリスト

座長：川口 陽子
日本歯科医学会 副会長

併催
学術大会

- 関東地区歯科医師会学術大会
- 2021年日本口腔衛生学会特別学術大会
- 日本歯科放射線学会第2回秋季学術大会
- 第49回日本歯科歴史学会学術大会
- 日本歯科医療管理学会特別大会
- 第41回日本歯科薬物療法学会学術大会
- 第38回日本障害者歯科学会学術大会
- 第40回日本接着歯科学会学術大会
- 第42回日本歯内療法学会学術大会
- 日本スポーツ歯科医学会第32回学術大会
- 第39回日本歯科東洋医学会学術大会
- 第31回日本磁気歯科学会学術大会
- 第21回日本外傷歯学会学術大会

● 公開フォーラム

ダブルキャリアのすゝめ ～より楽しい歯科の世界を目指そう～



第1部：GReeeeNからのメッセージ



第2部：個別出演



第3部：パネルディスカッション



講演



シンポジウム



日歯企画シンポジウム1



日歯企画シンポジウム2



eポスターセッション

閉
会
式



松村 英雄 準備委員長



川口 陽子 学術部会長



閉式の辞
小林隆太郎 事務局長



感謝状贈呈

● インフォメーション ●

日本歯科医学会誌構成の解説

本誌第41巻では巻頭言の次に、特別企画（P.9～24）、学術研究（プロジェクト研究，P.27～36）、学際交流（P.37～47）、学会活動報告（P.48～100）等の構成となっています。

本巻の特別企画の座談会は「第24回日本歯科医学会学術大会からみえてきたこれからの歯科界」をテーマとしております。今回の参加者は、第24回日本歯科医学会学術大会 会頭 住友雅人先生（日本歯科医学会 会長）、同 準備委員長 松村英雄先生（日本歯科医学会 副会長）、同 事務局長 小林隆太郎先生（日本歯科医学会 総務理事）です。「終わりは次の始まり」という住友会頭の挨拶から始まった座談会。オンライン開催にもかかわらず2万人超えの参加があった第24回学術大会を振り返り、開催に至る経緯、演者の選定、オンライン開催の大変さや有益さ、開催日程の理由、さらにはSDGsとの関連について話があり、後半は「歯科界をさらなる高みへ」と題して、歯科界の活性化について話し合われました。講演、シンポジウム、一般演題も含め556の演題を擁した大会終了して間もない余韻が残る中での座談です。

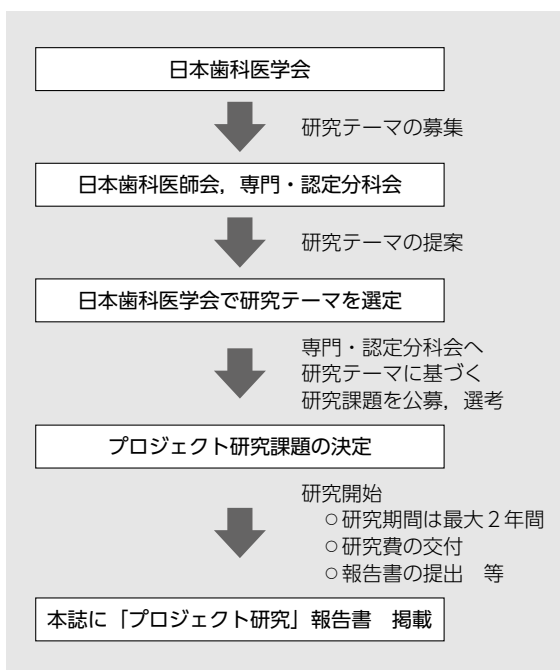
「学術研究」では、平成31年度（令和元年度）に採択されたプロジェクト研究（A. 人生100年時代を見据えた歯科治療指針に関する研究， B. オンラインシステム等を用いた新規診断法の確立）の報告が2編掲載されています。

また、本学会では、毎年、新たに構想された斬新な研究を促進することを目的に「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」を開催しております。この「集い」では8件の演題について口演および質疑応答が行われ、活発な論議が展開されます。本誌の「学際交流」には、令和3年度の第37回「集い」の事後抄録が8編掲載されています（P.37～47）。

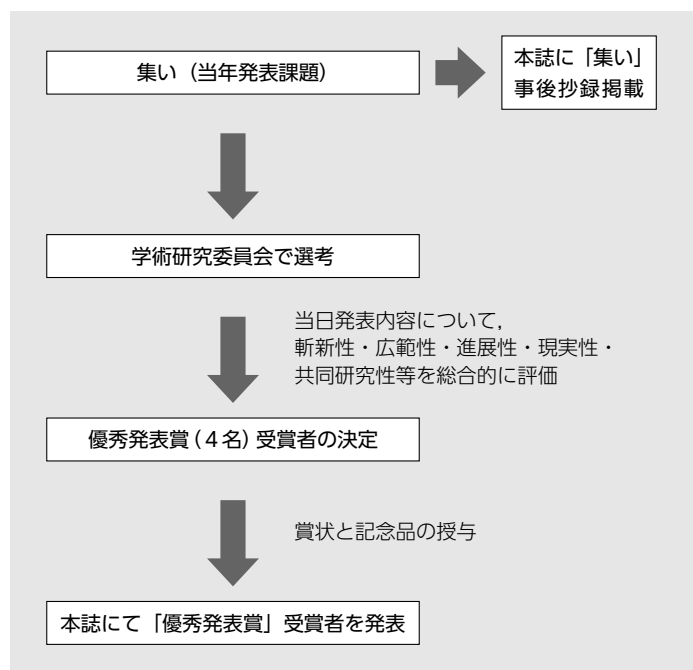
そのほか、「学会活動報告」では日本歯科医学会に属する専門分科会ならびに認定分科会について、この1年間の活動報告の概要を知ることができます（P.48～100）。また、巻末には、令和4年度の各分科会総会一覧もありますのでご活用ください。

（日本歯科医学会 理事 野本たかと）

プロジェクト研究



「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」と「優秀発表賞」



特別企画

(参加者と松野委員長。オブザーバーの大久保副委員長はオンラインでの参加のため写真撮影は不参加)



● 座談会 ●

第24回日本歯科医学会 学術大会からみえてきた これからの歯科界

とき ● 令和3年11月9日(火) ところ ● 歯科医師会館 8階 801・802会議室 / オンライン 併用開催

参加者

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 住友 雅人 | 日本歯科医学会 会長 / 第24回日本歯科医学会学術大会 会頭 |
| 松村 英雄 | 日本歯科医学会 副会長 / 第24回日本歯科医学会学術大会 準備委員長 |
| 小林隆太郎 | 日本歯科医学会 総務理事 / 第24回日本歯科医学会学術大会 事務局長 |
| 松野 智宣 | 日本歯科医学会誌編集委員会 委員長 / 司会 |
| 大久保力廣 | 日本歯科医学会誌編集委員会 副委員長 / オブザーバー (オンライン参加) |

新型コロナウイルス感染の状況を踏まえ、当日は十分な感染予防対策を行ったうえで、座談会を開催いたしました。

松野 本日はご多忙の中、また足元の悪い中、2021年度日本歯科医学会誌特別企画の座談会にご参集いただき、まことにありがとうございます。

私は、日本歯科医学会誌編集委員長として本日の座談会の司会進行を務めさせていただきます、日本歯科大学附属病院の松野智宣です。どうぞよろしく願いいたします。

なお、本座談会の開催が急遽決まりましたことで、先生方のタイトなスケジュールを調整いただきご迷惑をおかけしましたこと、おわび申し上げます。

さて、ウィズコロナという状況下で、第24回日本歯科医学会学術大会が本年9月23日から25日までの3日間オンラインでライブ配信され、さらにその後の1カ月間はオンデマンドで配信され、10月31日に無事閉会しました。まずは、住友会長をはじめ、本日ご参加いただきました大会役員および大会関係者の方々、本当にお疲れさまでした。大会終了後まだ10日も経っておらず、本来であれば一息つきたいところかと存じますが、その余韻が残っている中、本日の座談会にご参集いただきました。そして、「歯科界2040年への挑戦」というテーマの24回大会を振り返って、それぞれのお立場からご感想やコメントをいただき、今後につなげていきたいと思っております。また、後半は、「第

24回日本歯科医学会学術大会からみえてきたこれからの歯科界」、そして「歯科界をさらなる高みへ」というテーマで、活発にご討議いただく予定です。限られた時間内ですが、実りある座談会となるよう努力いたしますので、ご協力のほどよろしく願いいたします。

本日のご出席者をご紹介します。

日本歯科医学会会長で第24回大会会頭の住友雅人先生、日本歯科医学会副会長で第24回大会準備委員長を務められました日本大学歯学部歯科補綴学第Ⅲ講座、松村英雄教授です。よろしく願いいたします。そして、日本歯科医学会総務理事で第24回大会事務局長の日本歯科大学短期大学学長、小林隆太郎教授です。よろしく願いいたします。

また、オブザーバーとして、日本歯科医学会誌編集委員会副委員長の鶴見大学歯学部有床義歯補綴学講座、大久保力廣教授がオンライン参加されています。よろしく願いいたします。

さらに、日本歯科医学会誌編集委員会の先生方にも加わっていただき、随時ご感想などを頂戴する予定です。

では、初めに住友会長からご挨拶いただきたいと思っております。住友先生、よろしく願いいたします。

終わりは次の始まり

住友 今日のタイトルは「終わりは次の始まり」という話で挨拶をさせていただきます。

この大会の「終わり」は、それぞれの立場で違いますね。もう9月25日で終わったと思う人もいるし、オンデマンド配信の10月31日で終わったという人もいますし、来年の3月31日の準備委員会の解散で終わったという人もいますでしょう。私の場合は、「終わりは次の始まり」です。一旦そういう区切りはありますが、終わっていないということです。とにかく、多くの方々のご協力によりましてここまで来れました。お礼を申し上げます。私の「始まり」と「終わり」の想いを説明します。

今回は、日本歯科医師会と日本歯科医学会が主体で開催しました。最大の歯科団体と組織が社会に歯科の方向性を示したわけで、これを社会実装

というか、具現化する必要があります。ここからがスタートです。今回のテーマから言えば、2040年という20年後の貢献を約束したことになります。2025年に開催される次の第25回大会までに、歯科イノベーションロードマップで示した第Ⅰ期の項目を成し遂げなければなりません。「始まり」は目標達成という「終わり」を成さねばいけないので、このことが今回の会頭講演のポイントでもありました。

今回注目いただきたいのは、大会記念誌です(図1)。ホームページからオンライン配信していますので、皆さん方、すでにご覧になられたかもしれません。従来は、冊子をコンgresバッグに入れて当日お渡ししていましたが、オンライン開催ですので、参加者に学会ホームページにアクセスし



図1 第24回日本歯科医学会学術大会 記念誌（表紙／第1部とびら）
学会ホームページ(QRコード)からダウンロードが可能。ぜひご一読いただきたい

ていただくことになりました。日本歯科医学会学術大会のターニングポイントというタイトルで私が前書きをしております。第1部は、日本歯科医学会の歩みについて、専門分科会である日本歯科医史学会の方々に作成をお願いしました。実に詳細な内容から、改めて先達の努力を知ることができました。そして、第2部は、座談会を開催し、学術大会のニューノーマルというテーマで、これからの学術大会の方向性を示しました。今大会がターニングポイントという位置づけです。

この記念誌の温故知新のコンセプトはとても重要で、開会のプロモーション動画でも表現しています。今回手をあげられた地区歯科医師会と分科会には、それぞれの年次学術大会として開催していただきました。この歴史を振り返ってみると、過去には分科会が総出で学術大会を、そのときは総会と呼んでいましたが、開催していたこともありました。このことは、意外と皆さんご存じないことなのかもしれません。

1987年の第16回大会から、学会会長から主幹校に委嘱する形が採用されました。第16回大会は、日本大学歯学部の佐藤三樹雄先生が会頭です。このときは、東京医科歯科大学歯学部の砂田今男先生が会長代行を務めておられたようです。

第23回大会まではこのように主幹校という形で開催されてきました。日本歯科医学会規定の第6

節「学術大会の目的、開催時期等 第22条」には以下のような記載がございます。ちょっとご紹介しておきます。『第22条「学会は、歯科医学の科学及び技術の研究成果を総合的に普及開発する目的をもって学術大会を開催する。2 学術大会は4年に1回開催する。』』

今回は東京にオリンピック・パラリンピックの誘致があった関係で、会場が確保できませんでした。また、ホテル代や色々なものの値上がりもあって、1年遅らせて5年後の開催になりました。第18回から第19回の間も2000年の第22回アジア太平洋歯科大会の同時開催のために5年空けたため、前例はあります。学術大会は規定で4年に1回開催するということになっていますので、次は2025年ということになりました。

「3 学術大会に会頭を置く。ただし、学会会長が会頭となることができる。」ここですね。これで今回、私が日本歯科医学会会長として会頭を務めさせていただきました。

「4 会頭は、学会理事会の議を経て学会会長が委嘱する。」ですね。

「5 会頭は、学術大会会務を統括する。6 この規程に定めるもののほか学術大会に関し必要な事柄は、別に決める。」これに基づきまして、今回の第24回学術大会の大会規程をつくり、今回のような形で開催いたしました。



主幹校には、今日これほど大きな大会を開催する負担を、かけられないということはもちろんですが、過去の歴史からも、学会と日本歯科医師会で開催するのが本来の姿だと言えます。このことは、再確認する必要があるかと思えます。主幹校は東京と大阪で持ち回りでやっていた時代があります。大阪は旧6校では、大阪歯科大学ですね。東京は日本歯科大学、東京歯科大学、日本大学が持ち回りで担当していました。その後、東京医科歯科大学や福岡歯科大学にお願いをしました。今、どの大学も、これだけの大規模な催しに人手を出すということは大変厳しいのではないかと思います。そこで今回は過去にならない、学会と日本歯科医師会が主体的に開催いたしました。

今大会の準備委員会は、2018年5月9日に立ち上がりました。従来との開催様式の変更、規模の拡充もあり、準備委員会設置前の2016年10月23日の第23回日本歯科医学会総会の閉幕直後から検討を開始しました。準備は順調に進んでいましたが、新型コロナウイルス感染拡大により現地に大勢が集まるのは難しいとの判断で、2020年8月に、ご存じのように全面オンライン開催へと変更されました。

学術大会の中身等については後ほどお話しいたします。

松野 住友先生、ありがとうございます。これまでの日本歯科医学会総会のあゆみと、どのような体制で第24回学術大会を実施されたかということがよく理解できました。また、今回はコロナ禍でのオンライン開催ということで、大変ご苦労されたというお話でした。

続きまして、小林事務局長から本大会の報告概要をお願いしたいと思います。よろしくお話しいたします。

小林 それでは私から、第24回学術大会の概要を数字で見えていただきたいと思えます。

まず、今回、オンラインでの全面開催でした。これは先生方もご存じのとおり、9チャンネルを使用しました。9チャンネルということは、多分、当日オンサイトでは同時にすべて見られないということになりますので、この9チャンネルをいかに今後有効利用するかというのが一つの今回の特徴かなと思えました。私も色々な学会に所属しておりますが、さすがに9チャンネルを同時にやるということはこの業界ではありませんので、いい意味でこの9チャンネルを利用できたらなという感想を持っております。

セッションの演題数ですが、開会講演2、会頭講演1、講演14、企画講演1、シンポジウム23、日歯企画のシンポジウム2、国際セッション講演2、国際セッションシンポジウム2、歯科技工士講演2、歯科衛生士講演2、歯科衛生士シンポジウム1、公開フォーラム1、公開講演1、e-テールクリニック35、e-ポスターセッション452、e-ランチョンセミナー15、計556の演題です。これが9チャンネルを使って行われたというのが、数字からのご報告になります。

また、参加登録者数は、2万298名となりました。正直なところ、2万を超えたらいいな、本当は目標を3万、会員数の3分の1である3万人以上が登録して参加してくれたらいいなという希望がありました。当初の2万人は一応クリアできたので、よかったとは思っています。

ここに関しましては、この1年半で私どもが、いわゆるオンラインという今まであまり経験していなかったものを利用したわけですが、私も含めて、個々の先生方のオンラインへの成熟度がやはりどうもまだ違うようです。これは組織としてオンラインに関して成熟していくことで、その利用価値を上げるというのが私たちの目標だと今回は思いました。

それから、9チャンネルあったことによって、隣の畑といいますか、今まで参加したことのない他の学会をのぞくのは、やはりタイトルがもの言うなと思えました。プログラムを見て、人に見てもらおう、自分が発表する際タイトルをうまくつけることによって人は見てくれるな、個々の演題の登録者数もいろいろ見たのですが、タイトルづけも大切だなと。556題全部を見るのはなかなか厳しかったのですが、人はやはり先にタイトルに目が行くなという気もしました。でも、「隣の畑を

見る」という今回の大きな、特殊な、今までに味わったことのないこのような学会をいかに有効利用していくかという、前向きな形でこの9チャンネル、556の演題というものを今後どうつなげていくかというのが私たちの課題であると思いました。興味のない方は全く登録もしませんし、同じ歯科界でありながら別の世界と感じ、興味のない方もいたのは当然だと感じました。

それから、参加人数の内訳では日本歯科医師会の会員が7,620人、専門分科会が6,807人、認定分科会が1,068人でした。その他を含めて2万を超えました。あと特徴的だったのが、歯科関連学生が2,000人を超えたことです。ここに関しましては、興味を示さなければ参加しませんので、今回のタイトル「2040年への挑戦」に、学生たちが、自身がメインで働く時代に向けて興味を持っているという一つの表れで、私はここは大きな価値があったなと。若い人たちが10年後、20年後、自分たちが歯科界で一番最先端で頑張っているときの未来を予想するという、この歯科イノベーションロードマップも含めて興味を示してくれて、多分学生たちはみんな国家試験を目標としています。歯科の目的のほうに目を向けてくれた。先に進む、歯科界のその目的に関して目を向けてくださったというのはとてもありがたい。

だめな部分だとか反省すべきところも沢山あるのですが、いい部分をいかに展開して、日本歯科医学会が特別なものではなく、学術大会を歯科界全員が参加するような歯科界の一番大きなイベントに持っていけること——これは個人的なことですが、私も日本歯科医学会の役員をさせていただくまで日本歯科医学会と全く無縁でした。日本歯科医学会の仕事についていろいろなことがわかり、勉強させていただきましたので、やはり歯科界にかかわる人たちがみんな興味を持って、オールデンタルとして何かやれることをつくるのが日本歯科医学会の仕事なのかなというのを、今回の学術大会で感じました。

数も含めての報告となりましたが、以上です。

松野 小林先生、ありがとうございました。最後にお話されました、学生の参加、これは非常に大きな成果だったと思います。住友会長もお話されたように、これまでの歯科医学大会は各大学主体で行われてきましたが、そうなるとうちも他人行儀のようなどころも多かったのではないかと

と思います。そこを日本歯科医学会、日本歯科医師会がメインになって運営・実施されたこの第24回大会、これは今後の歯科界にとってもかなり大きなターニングポイントになった大会であると思います。今回の学生参加数の増加も、このような運営体系が関与したと考えられますね。実際の参加数は2万を超えたということですが、従来はデンタルショー等も含んでの数字なので比較はできませんが、オンラインでの新しい形での開催、そして9チャンネルを利用してオンデマンドで見られるという新しい学会のスタイルの礎になったのではないかなと感じました。私の手元には、それぞれの講演あるいはシンポジウムでオンデマンドの視聴回数等の合計がありますが、これを詳細に見ていくと、どういった内容に興味を示されていたかなども把握できるので、とても有用なデータにもなると感じました。小林先生、どうもありがとうございました。

続きまして、松村先生、本学術大会を振り返って、ご感想をいただきたいと思います。

松村 準備委員長を拝命しました日本大学の松村でございます。よろしく願いいたします。

学術大会を振り返って準備段階から大会のオンデマンド終了まで、総括的なことを幾つか申し上げたいと思います。

この第24回大会は、過去の5大会と大きく運営形態等が変わって現在に至っております。

会頭、事務局長からもご説明がございましたが、まず会期です。ここしばらくは3日間の会期で、金曜・土曜・日曜という設定が多かったと思います。このたびの大会は木曜・金曜・土曜ということで、その初日の木曜日が秋分の日（9月23日）の休日に当たるという会期の設定でした。これは当初からの予定でございまして、今までの大会ですと日曜日が最終日で、地元にお帰りになって月曜にはすぐ仕事を始めないといけないというハードスケジュールでした。

また、歯科医師会の先生方は木曜は診療がお休みという先生も多いものですから、たまたまその木曜日である9月23日が休日になっているということも1つのキーポイントとして捉えて、初日の午前中からプログラムを組みました。しかも休日なので、その木曜日いっぱい学術講演を視聴できる機会を設けるという企画です。

これは最初から予定されておりましたので、開

催形式がオンラインか否かというのは全く無関係でございました。それが最近の大会との違いの第1点目ですね。

もう1点は、前回大会に対して5年後であったことです。これも感染症の拡大とは無関係で、東京オリンピック開催のために1年先送りして予定をしていました。ところが、オリンピック開催も1年先送りになったので、結果的に同じ年に開催されました。そのオリンピックイヤーというのは、今まで閏年で同じ閏年に日本歯科医学会学術大会も開催されていました。

そのように予定されていた中で、2年ほど前から感染症の拡大が社会問題となってまいりまして、今度は開催形態が会場開催からオンライン開催に変更となりました。これは予想外のことで、かなり後で決まりました。ただし、オンライン開催を、開催直前とかあるいは近くなってから決めますと、非常に混乱を生じる可能性が多いことが懸念されておりました。そこで、学会としてはあらゆる場面を想定して、かなり早い時期からほとんどの催し物は初めからオンラインで開催するという大きな決断をいたしました。この決断によって、その後の準備状況が大きく混乱することなく、今に至って開催もされ、オンラインのオンデマンド配信までされて10月末日を迎えたということです。

プログラムを掲載した日本歯科医師会雑誌7月号は、開催のかなり前の段階から各種文面を用意いたします。抄録は研究成果発表ですからほとんど変更はないのですが、日本歯科医師会の堀会長や、会頭の住友先生、あるいは準備委員会が書く挨拶文は、開催形式等が変更になりますとその文面も変更を迫られることとなります。経過報告も、印刷前に内容を変更させていただきました。

大きな変更点は、開催直前に併催の日本デンタルショーを学術大会の会期中には開催しないという決断がなされたことでした。今はまだ開催されてはおりませんが、年度内の3月上旬に同じ横浜パシフィコで開催するということです。覚えやすい日付で、3月の4・5・6の3日間、パシフィコでデンタルショー開催予定です。いわば延期となったということですね。

以上のようなことを含めて、ほぼ全面オンラインへの変更、それに加えて併催学会学術大会、そして地区歯科医師会と日本歯科医学会の共同開催・主催という変更も含めて開かれた大会でございま

す。そういった点をこれから検証して、次の大会に向けて準備が進められていくと思いますが、よい点をなるべくピックアップしながら進めていただければと考えております。

松野 松村先生、どうもありがとうございました。大会日の設定、なぜこの日にしたのかといったご説明から、完全オンラインへの大幅な変更、それに伴うさまざまなご苦労話をいただきました。また、デンタルショーの予定としては3月4～6日の年度内に開催されるということで、是非、現地に行き、見て、触ってといった本来のデンタルショーが開催できることを願っております。一方で、今回の大幅な準備変更等をスムーズに実施して開催にこぎ着けたといったところは、次、またその次の学術大会等にも大きく反映できるものではないかと思いました。

それでは、開催準備にご尽力されました松村準備委員長にお話しいただきましたので、住友会長から本大会の会頭としての振り返りをお願いしたいと思います。

住友 第21回総会はパシフィコ横浜で開催され、松村先生は事務局長でした。このときは、デンタルショーに6万2,000人ぐらいの方が参加しております。事前の登録が約1万9,000人で、実際に大会に参加した人が約1万5,000人ということです。第22回総会の大阪は約3万1,000人の方がデンタルショーに参加されました。事前登録が2万1,000人、大会の参加者が約1万2,000人ですね。第23回大会の福岡はデンタルショーは約2万人の方が参加されて、事前登録が約1万1,000人、大会の参加者が約9,200人です。今回は、先ほど小林事務局長からお話があったように、2万2,988名の登録です。実際に参加された方は1万5,360名です。参加というのは、サイトに入って何らかのプログラムを視聴されているということです。この9月25日の段階で、いわゆる参加登録者は1万7,000余人だったんですね。その後、26日からオンデマンド配信になりました。最終的に2万2,988人ということは、オンデマンド配信の期間に参加登録した人が約3,000人プラスされたということだと思います。やはり大会までに大勢の方が参加登録をされているのは、従前と同じだということです。参考までに。

それから、三役企画のプログラムについてお話をさせていただきます。開会講演1・2と、それ

から特別企画の講演1です。

開会講演1の小泉進次郎先生、開会講演2をお務めいただいた松村真宏先生の講演は、ライブ配信もオンデマンド配信においても大変多くのアクセス回数が記録されていました。それから、三役が提案した企画講演である明海大学の渡部茂先生の講演も、学術講演の中では高いアクセス回数を示していました。公開講演の池上彰氏のアクセス回数は、一般の方々も視聴可能であったところから、全プログラムのうち最高のアクセス数を示しておりました。

今回の公開フォーラムは、従来のものとは異質です。その目的は歯科大学・歯学部を選択する若者を増やしたいということです。もちろん生涯ライセンスの歯科医師免許を獲得することは当たり前として、自分の持っている能力を、もう1つのプロフェッショナルに育てていく場として活用していただきたいと、そのモデルになる方々を紹介しました。多様性のある歯科界を見据えての企画です。目指すは、歯科界活性化です。現にダブルキャリアで活躍されているすばらしい方々をご紹介しますことができました。

今回特記すべきことは、多くの場面で大会テーマの「逆転の発想」というキーワードが取り上げられておりました。小泉進次郎先生、松村真宏先生の開会講演でも、また、池上彰氏の公開講演でも、渡部茂先生の公開講演においても、その言葉は出てまいりましたし、公募で選んだ一般の講演の中にもたくさん「逆転の発想」という言葉が出てきました。

今回のテーマ、すなわち「逆転の発想 歯科界2040年への挑戦」が決定した段階で、私の中で開会講演をお願いすることに決めていましたのは、大阪大学経済学部の工学博士、松村真宏先生。この方の発想は、まさに逆転そのものです。日常、何気なく存在しているものに注目して、人の心理を読んで、さりげなくヒントを示すことを、「仕掛学」というオリジナルの学問体系にしているところにぜひ気づいていただきたいということでもございました。この方のお話を聞いて、ものの見方が違ってくるのではないかと思います。

松村先生は、実はAIの研究者なんですね。この仕掛学は、ある意味、AIが気づかないところを補っているように私には見えます。逆に言えば、そのところをAI技術にしていけば、AIがより社会の



役に立つものに進化するという、まことに逆転の発想です。

今後ますます期待できる若手科学者と思います。一つ、大阪人の発想のところ、最初にゴミをたくさん捨てたところがありましたでしょう。こんなところに捨ててはいけないというようなことが書いてある看板があって、結論は、正論で言ってもみんな守らないよということなんだけれども、あの1枚のスライドが長い時間出ていました。彼は、意識的にどうすればいいかということを一言も言わない。その間にみなさんには、私ならこのようにするなど、対応を考える場にしている。その間が憎い仕掛けです。そして、次の場面ですっきりと事例を示していた。

海外の公園の音が出るゴミ箱だったり、バスケットゴールネットから捨てられるゴミ箱などを紹介していました。この1枚のスライドからいろいろなことを考えてみましょうということです。そこが逆転の発想なんです。あそこにこのような捨てたくなるようなゴミ箱を置けば、皆さんがしっかりとゴミ箱の中にゴミを捨てるわけですよ。正論で行こうとする看板なんかあっても何の役にも立たなかったところを、彼は気づいてもらいたかったのだと私は理解しました。松村先生は饒舌ではないが、人間の心理を見つめて具体的な対応を提示する素晴らしい研究者だと実感しました。

小泉先生はいつものように切れ味の鋭い、たいへん理解できるお話だったし、池上先生は広いものの見方ができている方で、アクセス回数の多さからも好評であったことが分かります。

渡部先生に「イグ・ノーベル賞からノーベル賞へ」という話をさせていただきました。歯科界からノーベル賞が出るとすると、唾液の研究に関するものではないかという期待感を持ちました。特に今回、こういうコロナの状況のときに、唾液とい



こばやしりゅうたろう
小林 隆太郎

日本歯科医学会 総務理事
第24回日本歯科医学会学術大会
事務局長

うものの、我々が関与するところの重要性というものを、私は渡部先生の講演から感じさせていただきました。

皆さん方はどのような形でご理解されたか、それは多様性でございますので、別に私のように思えという話ではございません。参考までに、私の思いをお伝えさせていただきました。ありがとうございました。

松野 住友先生、ありがとうございます。三役企画のプログラムの中でも、開会講演2の松村先生の仕掛学に関しては、昨年の座談会でも取り上げさせていただきました。これは今大会の隠し球ともいうべき目玉企画だったかと思いますが、予想通り非常に面白い内容だったと感じました。また、オープニングの小泉進次郎先生の講演は Sustainable Development Goals (SDGs) に大きくかかわってくる内容で、17の取り組みのうちの13の気候変動対策を中心に歯科にかかわる項目についてもお話されていました。歯科とSDGsの関わりについては、改めて注目しなくてはならないと強く感じました。

それでは、小林先生からも簡単にお振り返りいただければと思います。

小林 実は、会頭、そして準備委員長、私、思いが一緒だったと思います。方向性がはっきりしていたので、すべての決断がうまくいったのだなということがありました。そういう意味で、先ほど準備委員長の松村先生がいろいろお話しされたことに追加して、これは私の思いという意味での振り返りなのですが、今回の学術大会はやはり、このコロナ禍、世の中のこの状況において、4年間の準備をしてきた中で、どうやって進めるかという大きな意味のある学術大会だなと思います。「学術大会」という名前を変えたこと自体も大きなことですし、日本歯科医学会、日本歯科医師会が、

大学に頼らずみんなでやっという1つのスタート、ここからが本当のスタートだなという意識で始まりました。

コロナ禍に関してちょっとお話をしたいのは、私が所属している色々なところでも、感染の状況に応じて、どう判断していこうかという議論が多くされてきました。実は、私個人ではこれが全く間違っていると思っていました。その感染の状況に応じて判断を変えていくということは全く無意味だろうと。これは決断をするしかないだろうという意味で、住友会頭の色々な「逆転の発想」という意味からしても、要は、これは「オンラインへの挑戦」ということだと感じました。実際に私が所属しているほかの団体では、コロナ禍の状況で、行事等を中止、延期する等があったのですが、2年も経ってまだオンラインに移行できず、この2年間全く中止している組織もあります。これでは団体の意味がないということで、今回の大会は、やはり「オンラインへの挑戦」ということが1つの大きな目標だったのではないかなと思います。

それに加えて、私は専門ではなかったのですが、たまたまコロナ感染症に関する役をいただいて、コロナに関して色々と研究をさせていただきました。そこでパンデミックをしっかりと理解しようと、分析をしました。パンデミックが起これば、2年間は当然、状況は最悪なことが起きるわけですから、この2年間のうちに開催する行事はすべて、どこまでオンラインでできるかを考え、実施するというに意義があるのだろうなと考えております。今後もこのようなことは起きていくでしょう。

これは振り返ってというよりも、振り返りながらの、未来、先を見るという意味なのですが、小泉環境大臣のお話にもありましたように、森林破壊、それから温暖化による自然凍土の融解等々、新たなウイルスが出てくることが予想されるわけです。私たちが今の生活を維持するために、今回の「オンラインへの挑戦」というのは、私たちの医療界、医学的にも意味のあることで、「たまたまオンラインを利用した」ではなく、「いざ何か起きたときに全面的にオンラインで私たちがつながっている」ということの挑戦かなと、私はこのコロナ禍で色々な仕事をさせていただいたので、そういう印象を持っています。何かあればすぐにみんなでスイッチをオンラインにかえて、自分たちの行っている活動を継続する。中止とか延期を

しないという1つの挑戦かなと思いましたが、先ほど松村準備委員長がおっしゃったとおり、私たちの意思の中では、もう今年の3月から、8月にハイブリッドにしよう、それからもう全面オンラインにするという、かなり固い決断がしっかりとした意思の下に決定できたと思います。

デンタルショーは、同じ会場内で、集まって、直接対話できる状態で実施するのが主催者の希望なので、延期になりました。業界としても今後について、主催者の方々も、次の時代でのデンタルショーのあり方を模索されています。これもやはり今後のためのいい機会かなと思えました。

それから、私はオンラインに100%針を傾けるという意思ではおりましたが、やはりデジタルでは十分でない部分があり、アナログ的な抄録集がとても活躍しました。

同じ気持ちを持つ先生がいて、紙のプログラムを見て、後でオンデマンドで参加する、日本歯科医師会の先生方には日本歯科医師会雑誌7月号として抄録集が配られました。学会の会員等にはこの抄録

集は送られていません。

こういう抄録集が来るということで、気分はオンラインで参加している、少し足を踏み込める感じもあって、抄録集があったらいいなという声もありました。

住友会頭もこの後また考えられているのですが、色々なアンケートをとって、第25回に向けてどのようなことが必要なのか、反省点も含めて、新たな日本歯科医学会の学術大会のあり方を考えていく、たくさんの意見が出てきたらいいなという意味で振り返ってみました。以上です。

松野 小林先生、ありがとうございます。事務局長として100%オンライン開催へ舵を取られ、そして今回、“フルオンライン学会への挑戦”として開催された経緯などをお話いただきました。小林先生もお話しされていましたが、すべてがデジタルで済むわけではなく、例えば抄録集、このアナログ的なものはどうしてもまだ必要だと感じてしまいます。そういったところで次回大会ではどのように変化していくのか見守りたいと思います。

2 SDGsと歯科イノベーションロードマップ

松野 さて、本編集委員会ではこれまでの2年間に歯科イノベーションロードマップに関する座談会を行い、日本歯科医学会として社会に発出してきました。一方、先ほどもお話いたしました、現在さまざまなシチュエーションでSDGsが注目されています。そこで、この第24回大会で企画された講演、シンポジウムなど50程度のプログラムに対してSDGsの17のゴール（目標）と歯科イノベーションロードマップの3つの分類、1つは新規検査技術・治療法、2つめは新規材料・機器、そして3つめの健康長寿社会の実現・フレイル対策を今回の企画講演・シンポジウムに当てはめて振り返ることができないのかと考えました。

例えば小泉進次郎先生の開会講演、「命と健康を脅かす気候変動をくい止めよう」であれば、SDGs

の13番目の「気候変動」や7の「エネルギーをみんなに」に該当する等ですね。あとは、海や陸などいろいろ該当してくると思うんです。さらに「すべての人に健康と福祉を」等にも該当するのではないのでしょうか。このように1つの講演やシンポジウムに対して17のどのゴールに当てはまるかを割り当てていただく。さらに、歯科イノベーションロードマップは、先ほどの3つの分類のどれに該当するかを当てはめていただき、座談会の紙面に一覧表にして掲載したいと考えています*。住友先生、いかがですか。

住友 ちょっと別の方向からお話をさせていただきますが、実際、こういう学術大会の抄録集というのは、常にお話することですが宝の山なんです。これをどう活用するかということはとても

*後日、6名の編集委員にSDGsの17のゴール（目標）への割り当てを依頼した結果を図3に示しました。なお、イノベーションロードマップでは、Ⅰの**新規検査・技術・治療法**に関する講演が多く、次いでⅡの**健康長寿社会の実現・フレイル対策**でした。

2040年への歯科イノベーションロードマップ 〈健康寿命の延伸〉

第1期
2019年～2025年

第2期
2026年～2032年

第3期
2033年～2039年

I 新規検査・技術・治療法 (口腔歯科治療のイノベーション, 口腔検査技術のイノベーション)

- ◆歯周病で失われた歯ぐきの再生が可能に。
- ◆善玉歯垢細菌群と悪玉歯垢細菌群との判定が可能になる。
- ◆幹細胞と iPS 細胞を使って唾液腺の再生が可能に。
- ◆むし歯と歯周病を発症させる歯垢細菌叢が判明。
- ◆レーザー照射による削らないむし歯予防が実用化。
- ◆悪玉歯垢細菌群を善玉歯垢細菌群に置き換えられる。
- ◆歯や歯ぐきの中を見ることができる光センサー技術が実用化。
- ◆幹細胞と iPS 細胞を使った歯の再生が可能になる。
- ◆子どもたちの口の中に理想的な善玉歯垢細菌叢を創る技術が開発される。
- ◆スマートフォンによる舌・口腔粘膜の検査が実用化。
- ◆口の病気の発症リスクのゲノム予測診断が実用化される。
- ◆血液検査に代わる唾液検査が実用化される。
- ◆オンラインとオンサイトが創造するワンデートリートメント。
- ◆歯の神経や歯ぐきを修復する薬剤が開発。
- ◆遠隔診断による早期がん塗り薬治療が実用化される。
- ◆血液検査に代わる新たな唾液検査が開発。
- ◆AI 診断により最適治療法が確立する。
- ◆口腔がんを発生させる遺伝子異常が判明。

II 新規材料・機器 (Novel materials・Instrument・Device)

- ◆むし歯抑制, 歯を強くする機能性材料が実用化される。
- ◆歯と一体化する修復機能材料が開発される。
- ◆歯と一体化する修復治療が一般化する。
- ◆歯の神経と歯周組織の再生技術が開発される。
- ◆歯の神経と歯周組織の再生技術が実用化される。
- ◆歯の神経と歯周組織の再生治療が一般化する。
- ◆天然歯に近い機能をもつ次世代バイオインプラントが開発。
- ◆ヴァーチャルリアリティ技術による遠隔歯科診療支援システムが実用化。
- ◆天然歯に近い機能をもつ次世代バイオインプラント治療が一般化する。
- ◆デジタル歯科医院が登場する。
- ◆AI ロボットによる遠隔歯科支援システムが実用化される。
- ◆デジタル高次歯科医院の登場。

III 健康長寿社会の実現・フレイル対策

- ◆オーラルフレイルの診断法と管理法が開発される。
- ◆口腔機能と認知症との関連についての解明が進む。
- ◆オーラルフレイル対策の充実により, 健康寿命の延伸。
- ◆オーラルヘルスのための画期的新材料(歯磨剤, 含嗽剤, 歯のコーティング, 義歯用材料)が開発される。
- ◆善玉菌の移植によるむし歯と歯周病の撲滅が始まる。
- ◆あらゆる世代においてむし歯, 歯周病の撲滅が進行する。
- ◆はめたらきれいになる歯磨き用のマウスピースが開発される。
- ◆身体に優しい嚥下機能診断機器が開発される。
- ◆歯科医療の革新的進歩により, 健康長寿社会が達成される。

図2 2040年への歯科イノベーションロードマップ(2020年10月28日更新)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



図 3A SDGsの17のゴール



図 3B 49の各企画講演の内容に該当するSDGsの中で上位5つのゴール

3の『すべての人に健康と福祉を』に該当する講演が圧倒的に多かった（6名の本誌編集委員による選考）

重要ですので、今、委員長からお話があったようなことも必要なのではないかという想いがあります。

何でSDGsが出てくるかという、このメビウスの輪、ご存じのように2021年から始まって2040年に向かって進めていく。ここにイノベーションロードマップが存在している。これがいわゆるSDGsの持続可能な開発目標ということなんです。例えばスタートを2040年とし、目標達成を2060年とすれば、また持続していく。そこでメビウスの輪というのは、このSDGsのシンボルマークという位置づけと捉えています。

このイノベーションロードマップはさまざまな分野の方々がどう料理するかが、オープンイノベー

ションなんですね。オープンイノベーションは、どなたがこれを活用してもいいですよと言っているわけで、どこかの企業がこれを見て、これはうちが開発できると言ったら、どうぞやってくださいと答える。

各分科会からいただいたものを整理しておりますので、これが必要であるということは歯科界の合意と思っております。例えば歯科基礎医学会は、自分のところで開発にかかわれるものを、各項目から抽出して進めようとしていると伺いました。各分科会がそれぞれ提案してくださったものも活用可能です。例えば第I期の歯や歯茎の中を見ることができる光センサー技術の実用化。これを日



本レーザー歯学会での開発テーマとしたならば、まず、なぜそれが必要であるかということを含めて検討し、しっかりしたその工程表をつくって社会実装というか具現化に向ける。そういう意味で、このイノベーションテーマを提案した各分科会がもう一回自分のところに戻して、それから一つ一つこの流れで展開していけばいいのではないか。そこではもちろん、分科会だけではなくてさまざまな企業と協力して進めていくことになりませぬ。

今、日本歯科医学会連合で医療ニーズオンラインマッチング会というものをやっています。そういうところにも提案して、色々な企業に手を挙げていただくということが今後できるのではないか。これをもとにして具現化する。例えば、「再生治療が可能に」とロードマップで示しても、具体的にどうするんですかと言われたらここでは明示されていないのです。ここで話したような過程を踏んで、さまざまな臨床現場で役に立つものが開発されてくるということです。

ロードマップの見方ですが、第Ⅰ期、2025年までには一応この目標に到達したいということですから、例えば2021年に目標が達成されてもいいわけだし、同じテーマをもっと先までやっていくこともあるでしょう。7年ごとのマイルストーンは目安としています。1つのテーマに、3つ、4つ、5つの色々なイノベーションができてくることもあるでしょう。それはそれでいいということです。

このイノベーションロードマップをいかに料理するか、活かすかというところが、これから歯科界に求められることです。社会に発信して行って、さまざまな分野と創造するというストラテジーです。2025年大阪・関西万博での「共創パートナー」というさまざまな分野からなる集まりが設けられました。日本歯科医学会も手を挙げて、登録をさ

れました。今後これをベースにイノベーションを推進して行くこともよいですね。

松野 住友先生、ありがとうございます。今お話がありましたように、この歯科イノベーションロードマップはいかようにも応用できる、発展性があるものだと思います。

今回は、この第24回大会の講演・シンポジウムに当てはめてみる。こういったことも歯科イノベーションロードマップを見つめ直すきっかけになるのかなと思います。また、時代的にSDGsと絡めると、違った発展性が見いだせるかと思いました。住友先生が最初にお話しされた今回の大会ポスターのメビウスの輪ですけれども、これもサステナブル、要は、永遠に続くというものです。2040年がひとつのピリオドになっていますが、さらにどんどん広がっていくということなのかもしれません。

こういったところからも、歯科イノベーションロードマップを検証できるいい機会なのかなとも思っております。編集委員の先生方にはちょっとお手数をおかけいたしますが、大会で企画された講演内容を検証して、SDGsとともに仕分けできたらと思います。

住友 今回の学術大会の抄録の多くは今後論文になるとは思いますが、論文になればこういう開発のための根拠になるから、例えば開発したものを公的医療保険の中に導入するというときに、根拠がとても重要なんですね。そういう意味で、まだ論文の前段階かもしれませんが、そういう可能性のあるものを、先ほど松野先生が言われたようにロードマップと突き合わせるというのは、大変意味のあることだと思います。それは、松村先生からコメントがあるかもしれない。

松村 抄録の活用というのはSDGs、それからイノベーションロードマップの各キーワードの到達目標、それを実現する上におけるの原点になると思います。

今、住友会長がおっしゃいましたように、抄録が論文になっていくであろうと予想されます。その論文の幾つかの蓄積が成果として、第Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期における各項目の具現化、そういう流れは間違いのないところだと思います。

法的にも、歯科臨床系の学科目あるいは歯科治療行為は、保存における修復の治療と、補綴の治療全般と、あとは歯科矯正治療などで、それ以外

の治療行為は医師でも担当し得る診療行為であるとされています。そこで、単独の歯学の分野から離れたところにこの研究開発目標がございます。

それから、医療機器であるとか薬品が出てきますと、医学というよりもむしろ、ノーベル賞の分類でもございます化学、物理学、それを総括した工学にもかかわってまいります。抄録から色々なものが具現化してくるというのは、歯学単独ではなかなか成し得ない項目が多いと思います。そこにICTとかがかかわってきますので、そういったことも含めて色々な人たちがチームを組んで、色々な職種の人、あるいは色々な学部の出身の人たちをがっちりチームの中に組み込んでいただいて研究開発を行っていくと、このロードマップの具現化の内容が増えてくるのではないかというような印象を持ちました。

松野 松村先生、ありがとうございます。

大会が終わると抄録を見直すことというのは本当に限られてくると思いますが、改めてこの第24回大会の抄録を見直していただいて、ロードマップに当てはめていただければと思います。こういったことの積み重ねが、将来的な歯科のさらなる高みへつながっていく1つのステップなのかもしれません。

それでは、ここまでをオブザーバーの大久保先生からコメントをいただきたいと思います。大久保先生、よろしいでしょうか。

大久保 住友会頭の陣頭指揮のもとに、「逆転の発想 歯科界2040年への挑戦」と銘打ち、超豪華な講師とシンポジストで構成された今回の日本歯科医学会学術大会が、4年に1度の大会にふさわしい、本当に素晴らしい内容であったと私個人も思っています。歯科イノベーションロードマップで掲げていた各種のキーワードが講演やシンポジウムの随所に散りばめられていて、本学会の方向性が

しっかり会員に伝わったと思いますし、会員はその方向性を確認することができたのではないかなと思います。

それから、気候変動、女性支援、教育ですとか、今世界で問われているSDGsの目標にも合致していた学術大会ではないかなと思います。特に、小林先生もおっしゃっていましたように、学生の参加が2,000人を超えたというのは、歯科界の将来をとっても期待できる数字でありますし、これは専門分科会や認定分科会の各学会も見習うべきことだなと思いました。

また、松村先生は、この運営に向けてさまざまなご苦労や大変な決断をされていたと状況をご報告してくださいましたけれども、結果的に2万人以上の参加者があったわけですから、準備委員会の先生方のご努力の甲斐もあったのではないかなと思っています。

いずれにしても、この厳しいコロナ禍にあって、9チャンネルで556演題を配信した、完全オンラインで行われた本学術大会は、小林先生はオンライン学会のあり方に挑戦したと話されていましたけれども、きわめて大きな成果を上げたのではないのでしょうか。

冒頭、住友先生が、「終わりは次の始まり」とおっしゃっておりましたけれども、これから各種の専門分科会、認定分科会、そして企業が、このイノベーションロードマップを活用して歯科の未来を創造していくべきだというふうに私は感じましたし、さらにこのイノベーションロードマップを拡充していかなければならないと痛感しました。

松野 大久保先生、いつもながら的確なおまとめ、ありがとうございます。ここで座談会が終わってしまってもいいのではないかなというくらいきれいにまとめていただきました。

3 歯科界をさらなる高みへ～人材育成の重要性～

松野 続いては、第24回大会の住友会頭講演のタイトルの「歯科界をさらなる高みへ」をテーマに進めていきたいと思っております。第24回大会で見えてきたものをいかに社会実装できるか、つまり第24

回大会の終わりは、「歯科を通じた社会貢献」を社会実装するスタートになり、歯科界の活性化につながっていくものだと信じております。この「歯科界をさらなる高みへ」について、住友先生から

コメントをいただければと思います。

住友 日本歯科医師会も「歯科界の活性化」と言っておられますが、今回、私はやはり人材だと思っているところがあります。歯科の世界にできるだけ多くの若者が、色々な能力を持った若者が来てほしいという思いがあって、公開フォーラムを企画しました。

あそこに登場された方々は、歯科というものがコアになって、そしてダブルキャリア、プロフェッションを別に持つ。そのときに言っておられたのは、歯科医師というものと、自分のもう1つのプロフェSSIONナルが支え合っているということ。それが自信につながっているし、別分野に支持者といますか、サポーター、ファンもいるわけですね。歯科医師としての患者さんというファンがいる先生もいる。それを2つ持っているということ。

それから、自分が子供のころから色々養ってきた能力を、歯科大学に入ることによって終わりにするのではなく、その能力を伸ばせる場所がある。すなわち、多様性のある学生を採りたいという思いがあります。私は大学を離れていますけれども、色々な、さまざまな能力のある人たちにぜひ歯科大学・歯学部に来ていただきたい。そういう思いがあって企画しました。

高校生はもちろんですが、小学生とか中学生とか若い人たちと、その保護者の方をも対象にしたプログラムでした。ある大学受験の予備校が協力してくれて、浪人生に歯科界が呼んでいるよと紹介していただいたんです。あくまでも想像ですが、小学生・中学生自身で登録して視聴されたのは稀有だったでしょう。ご家族で見ている人はいたかもしれない。対象とした保護者は別に一般の方でなくて歯科の関係者でもいいわけです。今回の企画によって、できるだけ多くの若い人材に歯科に来ていただきたいということです。

そしてもう1つ、とても重要なことなんですけれども、システム化ということですね。システムというものがしっかりしていないと、何をやっていいかがよくわからない。

建物を建てるにしても、歯科の治療にしても、すべて工程表があるんです。歯科の場合は、クリニックパスといいますね。行き当たりばったりではなくて、そういう工程表にのっとって物事をやるという、システムとして考えるもの。あるものとあるものをくっつけるという、これが「新結合」

という日本語になっている。それもイノベーションなんですね。そういうものをこれから歯科界が考えていかないといけない。もう縦の線というか関係だけではなくて、横の線が特に必要なのではないか。横の線というのは歯科だけではなくて、歯科の分野においてももちろん横のつながりがありますが、もっと違う世界の、そこにダブルキャリアを持っている人がいると、その世界はもっともっと広がるという、そういう想いもございます。

それから、やっぱりスピード化が必要。時間がかかってしまうものもあるでしょうけれども、やはり早く何らかの形にしていかなければいけないということ。

無駄もあってもいいように思う反面、やっぱり効率的なシステム化と有効活用も考えていかなければいけないでしょうね。

例えば、私は趣味を通して、こちらの機械とこちらの機械とこの機械をどういうふうに組み合わせて1つのシステムにしていくかということに、とても力を入れています。適当に持ってくればいいというわけではない。

SDGsの中のサステイナブルというのは「もったいない」という考えがあるんですね。ですから、生かしてあげなければいけない。人的・物的資源をどういうふうに活かすかという、個々の組み合わせもまた必要になってくるということです。すべて高い能力を持った人ばかりではないけれども、その人材をうまく組み合わせて物事をつくっていくとか、進めていくということも必要ですね。若者たちにそのような手法を身に付けてもらうとすれば、小・中・高校は、直接的には関与できないけれども、少なくとも大学教育で、そういう手法を身につけてもらうチャンスがある。多様な人が活躍できる歯科界をつくるのが、活性化において最も重要なことでしょう。改めて言えば、多様な能力を持った学生に選んでもらえる受け皿を構築する必要があります。

松野 住友先生から大変わかりやすいコメントをいただけたと思います。

まず、人材ですね。多様性のある学生、その人材をいかに動かすか。これは、大学入学前の中・高の段階から始まっているのかもしれませんが、歯科大学に入ってからその個性・多様性を押し殺してしまうことのないような教育をしていかなければいけないと感じました。

また、スピードと効率といった点、これはこの活性化には欠かせないものであり、それが様々なシステム化につながっていくものと思います。

松村先生、いかがでしょうか。この歯科界の活性化、いかに歯科を通じた社会貢献を実装させるかに関して、何かコメント、ご発言いただけますでしょうか。

松村 活性化という点に関してですが、やはり教育とか、いかに歯科の中に人材が入ってくるかが大元の検討すべき内容だと思います。

今現在、歯科医師という職業をなりわいとしていらっしゃる先生方のご家庭には、4代目の方は明らかにもういらっしゃいますね。歯科医師と名付かない時代も含めて5代目の方がいらっしゃるとしたら、初代から2代、3代、4代、5代と、恐らく受けた教育が全く違うでしょう。科目の名前も違うだろうし、臨床系の科目においては技術も違うであろうし、使う材料、器械も違う。そういったことで、1代ごとに、例えば親の世代に対して子の世代が受ける教育とか、かなりの相違を持った歯学教育を受けることになりそうです。

それとともに、患者層の変化であるとか、具体的に申しますと幼少のころから高齢者になるまでの間の口腔内の状態が非常に変遷をしているような気がいたします。患者さんの状況の変化と、養成課程の変化ということを鑑みますと、どのような歯科医師を養成するか。そういったことを、今、29校、歯学部・歯科大学の先生方が常日ごろ考えて行動されていると思います。そういう流れの中に、いかに受験者の世代の人が入ってくるのか。入ってくるには、その職種に対してはやはり魅力がないといけませんよね。魅力とはどういう魅力なのか。歯科医師になることにどういう魅力があるか。諸外国では入学者における学部の人気は歯科が最上位という国もあります。そこと今現状の日本との違いは何なのかといったことを、学会あるいは歯科医師会の先生方がともに考えて行動・活動していくことによって、なるべく有為な人材に、たくさんこの世界に入ってもらえると良いと思います。

このSDGsの5番目のところのジェンダーに関しましては、今、歯学部は女性もかなり比率が増えてまいりました。そういった変遷がございますので、色々なことを総括的に鑑みつつ、歯科界全体でこれからの入学者の増強に努めるといった活

動を行っていくのがどうかなという気がいたしております。

松野 松村先生、ありがとうございます。人材については大学教育も色々変遷してきたわけですが、今後、さらなる歯科界の活性化、つまり歯科の魅力をいかに伝えていくか。それは、日本歯科医学会の関連学会からもさまざまな発信をしていかなければいけない。そのまとめ役がこの日本歯科医学会であり、そしてこの歯科イノベーションロードマップなのかと思います。今後、患者層や社会も変わってくる中で多様性を示していかななくてはならないと思います。

そして、SDGsの中の4番目、「質の高い教育をみんなに」に関しては、「魅力ある歯科を」にすることを考えると、「魅力ある大学教育」をしていく努力をしなければならないと痛感しました。

それでは、小林先生にも歯科界の活性化についてご意見、コメントをいただきたいと思います。

小林 歯科界の活性化、歯科を通じた社会的貢献につながると思うのですが、歯科イノベーションロードマップは、歯学のすべての学会から未来予想図として募ったものと考えます。このイノベーションマップは、住友会長が今までずっと色々なところで発言されていますが、マイルストーンなわけですね。このマイルストーンとともに、少なくとも2040年までの歯科の挑戦が明示された。それが、ちょうど今回、2021年のこの学会にもマッチして、各学会から「2040年への挑戦」というタイトルが出たのだなと感じております。

その中で、具体的な内容で言いますと、歯科界の活性化というのは、1つは、私もそうですが、各学会で発表をしたり論文を書いてきました。そこで終わっていた自分がいるのですが、住友会長と仕事をして、色々な委員会で検討する際に、具体的には一体何を検討するんだ、検討して何をするんだと言われました。何かというと、具現化しなさいという意味です。私は歯科医療協議会を担当させていただきましたが、それこそ歯科医療協議会は具現化そのものでして、いわゆる公的保険への収載、これが目的です。私たちの発表・論文等の先にあるものは、国民の健康への寄与ということで、必ず具現化を目的としていく、それが保険収載でありました。

もう1つは、今、オーラルフレイルに関して、日本歯科医師会、8020財団とも連携して事業を進

めています。このオーラルフレイル、口腔健康管理ですが、保険には出てこない部分、いわゆる生活の中で国民の健康を守るというところで、歯科が絶対重要だと。健康寿命延伸のため重要な要素4つの中のひとつが口腔健康管理であろうと、皆さんが声を上げてくださっています。

数年前、日本老年歯科医学会が「生きること、食べること、老いること」ということをテーマにされた、あの題名そのもので、やはり生きること、それは食べることであり、しゃべることです。「老いていくこと」というのをテーマに、社会にどれだけ歯科医療が色々なことを提案、そして具現化したものを医療として提案できるか。医療だけではなく、生活の中でいかに皆さんに生きる力を与えるヒントを歯科界が提案するかということ自体が社会貢献だなど。だから、歯科でやっている医療行為、その他私たちの提案がすべて社会貢献として健康寿命延伸のためにつながる。生きる、その機能の継続という意味で歯科医療が大切。「口腔健康管理」という言葉を中心に今後進めていくこと自体が歯科界の活性化であり、歯科を通じた社会貢献だなどと思っております。

松野 小林先生、ありがとうございます。確かに研究をやって論文を書いて終わり、色々な検討会議をやってそれでおしまいといったところはちょっと耳の痛いところでもあります。やはり、住友先生がよく口にされている、いかに具現化していくかが重要であり、歯科が国民の健康へいかに寄与できているか、つまり社会貢献できているかなのだと思います。

歯科イノベーションロードマップは歯科をさらなる高みへ導く指南書とも言うべきもので、この内容をどのように社会実装していくのが歯科界の活性化につながるのだと思います。

他にもまだまだたくさんアイデアや話し足りないところもあるかと思いますが、このあたりでオブザーバーの大久保先生に最後のまとめのコメントをお願いしたいと思います。



大久保 すばらしい座談会を聞かせていただきまして、本当にありがとうございます。歯科界をさらなる高みへといいますか、要するに歯科界の活性化のためには、住友先生がおっしゃいました、「基本的には人材」だというご意見は、そのとおりだと思います。色々な能力を持った多様性のある若者をたくさん集めて、そして歯学教育でそれを潰すのではなく、どんどん能力を引き伸ばしていき、人間的に魅力ある歯科医師を育成することができれば、歯科界も小さく閉じこもらずに、さらに拡大していくのではないかなと思いました。これからは本当に歯科界全体ですばらしい人材の確保に努めることが大切ですし、そのためには歯科の魅力や可能性といったことを存分にアピールしていくべきだなど、今日の座談会を聞いて感じました。以上でございます。

松野 大久保先生、どうもありがとうございます。今回の座談会の出席者は全員歯科医師です。我々は歯科の魅力を存分に伝えて歯科界の未来を担う人材を育て、「歯科界をさらなる高みへ」と誘わなければいけません。そのことをあらためて確認できた有意義な座談会になったのではないかと思います。

本日は2時間にわたりさまざまなご意見をいただきありがとうございます。これをもちまして、2021年度日本歯科医学会誌の特別企画座談会を閉じさせていただきたいと思っております。ご協力どうもありがとうございました。

学術研究

『令和3年度プロジェクト研究』

解説／日本歯科医学会常任理事 尾松素樹

本学会事業計画において「歯科医療への学術的根拠の提供」を重点的に取り組むべき事業と位置づけ、歯科医学・医術の進歩発展によって得られた学術的根拠を歯科医療現場に迅速に導入することを目的に、本学会が競争的資金として研究費を提供する事業が「プロジェクト研究」である。この事業は、平成19年（2007年）度から研究の募集を開始し、令和3年度の募集で15回目となる。令和3年度では、本事業に2,000万円の予算を計上している。

この「プロジェクト研究」は学術的かつ高度な研究結果を診療報酬改定時の新技術導入のための一助とすることを主眼とし、平成26年（2014年）度からは歯科医医療を変える cutting-edge（最先端）の研究についても選考対象としている。

令和3年度プロジェクト研究公募テーマは、テーマA）「歯科界のニューノーマル（各種感染症対策、高齢者の歯科治療体制の確立）」、テーマB）「これからの歯科医療のDX（AI・デジタルテクノロジーの応用）」、テーマC）「New for Old, 疾病構造の変化を見据えた歯科ストックの確保を目指して」で、テーマA）は6題、テーマB）は10題、テーマC）は6題、計22題の応募があった。

学会執行部と学術研究委員会の委員長および副委員長が協議し、テーマA）からは①「微量唾液を検体としたSARS-CoV-2迅速スクリーニング検査法の確立と mobile 型 qPCR 装置 (PCR1100) の有用性の検討」（申請学会：日本口腔外科学会、研究代表者：里村一人 鶴見大学歯学部口腔内科学講座）の1題、テーマB）からは②「デジタルフェノタイピングデータと生体データの組み合わせを活用した歯科治療恐怖症の新しい診断法の開発」（申請学会：日本歯科麻酔学会、研究代表者：鮎瀬卓郎 長崎大学歯学部歯科麻酔学）および③「Extended Reality 技術を応用し sustainable な歯科教育を確立する」（申請学会：日本歯科医学教育学会・日本口腔診断学会・日本口腔外科学会、研究代表者：片倉 朗 東京歯科大学口腔病態外科学講座）の2題、テーマC）からは④「高齢者の医療・地域連携に貢献する高齢者対応型病院歯科の普及に向けた調査・研究」（申請学会：日本老年歯科医学会、研究代表者：大野友久 浜松市リハビリテーション病院歯科）の1題、計4題が採択された。

研究期間は最大で2年間までで、中間報告書、総括成果報告書および収支報告書の提出がなされ、その研究成果は本誌に掲載される予定である。

現在遂行中の令和3年度プロジェクト研究課題

■公募テーマA「歯科界のニューノーマル（各種感染症対策、高齢者の歯科治療体制の確立）」

ニューノーマル（New Normal）とは、社会に大きな変化が起こり、変化が起こる以前とは同じ姿に戻ることができず、新たな常識が定着することを指す。

2020年年初から本格的に始まったCOVID-19の感染は瞬く間に世界的大流行となった。

COVID-19の感染拡大に伴い、医療機関はこれまで以上に感染防止対策に取り組んでいるところであるが、これまで通院されていた方、生活様式が大きく変化し不調を来した方が感染リスクを恐れて、医療機関への受診を控えたり、先延ばしするといった現状が顕著である。COVID-19は唾液中にも存在し、この唾液に暴露する機会の多い歯科診療では特段の感染対策を講じ、必要がある。このような状況下、歯科医療を担う私たち医療人にとって、これまでに蓄積したデータを基に、安全かつ安心な歯科医療を提供できるシステム構築が急務である。また、現時点で歯科界では大規模なクラスターが発生していないことが報告されており、歯科界から独自のCOVID-19に対する感染対策を提言をすることは、歯科界全体が総力を上げて取り組むべき重要な課題である。

一方、超高齢社会である我が国において、高齢者に対して訪問診療・摂食嚥下障害およびオーラルフレイルの予防を行うことは、健康長寿を実現させるためには極めて重要なことである。今後ますます進行するであろう超高齢社会において、さらに適切な医療を提供すること、また、それに加えて得られる副次的効果としての医療費削減を目指すことは、我々が取り組むべき重要な課題である。

本プロジェクトでは、これから求められる歯科界のニューノーマル（新たな常識）を想定したCOVID-19をはじめとする各種感染症対策、および高齢者に対する歯科治療体制確立を中心課題とした研究を公募する。

■公募テーマB「これからの歯科医療のDX（AI・デジタルテクノロジーの応用）」

DX（Digital Transformation, デジタルトランスフォーメーション）は、2018年に経済産業省が、有識者による「デジタルトランスフォーメーションに向けた研究会」を設置した以降、急速に広がった用語であり、その注目度は拡大している。

DXの意味は、デジタル技術を浸透させることで人々の生活をより良いものへと変革すること、既存の価値観

や枠組みを根底から覆すような革新的なイノベーションをもたらすものとされている。また、経済産業省が平成30年に発表した「DX推進ガイドライン Ver.1.0」では、企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立することと定義している。

現在、歯科の多くの分野でデジタル化が進んでいるが、遠隔診療、診断におけるAI導入、診療・教育におけるVR（仮想現実）、AR（拡張現実）、MR（複合現実）の導入等で、患者・社会のニーズの意識変化とともに、歯科医療の提供サービス、ビジネスモデルの変革、即ち、業界文化の変革が期待される。さらに、歯科医学界へのAIやデジタルテクノロジーの導入は、提供する歯科医療の改善のみならず、医療費の削減にも影響するので、歯科医学界にも極めて重要な課題である。

本プロジェクトでは、前述のDXの概念に基づいた歯科医療のDXにつながる、AI導入、デジタルテクノロジーの開発・応用等、これらに関係する幅広い研究を公募する。

■公募テーマC「New for Old, 疾病構造の変化を見据えた歯科ストックの確保を目指して」

昨今、歯科医療における疾病構造の変化は目覚ましいものがある。また、それを取り巻く歯科医療環境も大きく変化している。また、歯科点数表においても、検査、画像診断、処置、手術、麻酔、歯冠修復および欠損補綴等で、現状に不一致な項目や算定頻度の低い項目は削除されるようになった。

「削る」、「詰める」、「被せる」に代表された歯科治療は、硬組織疾患に対するものであるが、前述のように疾病構造の変化にともない、今が正しく、大きな変曲点を迎えており、歯科医療に対する現在のニーズに合致した新たな価値観で、さまざまな検査や治療法を導入すべき時期に直面している。

本プロジェクトでは、既存検査の再考、保険収載に向けた新しい各種治療、多様化する歯科治療に対する新規検査、また、ますます進む超高齢社会における高齢患者および有病者の歯科治療体系構築について、比較的早期に具現化可能と思われるもの、先を見越した長期的に視野に立ったものについて、大局的なものから近視眼的ものまで幅広い研究を公募する。

フレイルおよび認知症と口腔健康の関係に焦点化した 人生100年時代を見据えた歯科治療指針作成に関する研究

平野浩彦^{1,*}，佐藤裕二²⁾，飯島勝矢³⁾，小玉 剛⁴⁾，古屋純一²⁾，上田貴之⁵⁾，
恒石美登里⁶⁾，渡邊 裕⁷⁾，岩崎正則⁸⁾，小原由紀⁸⁾，枝広あや子⁸⁾

抄 録 本研究は口腔健康を阻害する因子としてのフレイル・認知症の位置付けを明確にすることを目的に、地域在住高齢者(1,819人)を対象に検討した。本研究から得られた知見は、口腔機能評価項目の特性(加齢、現在歯数の影響など)、さらには現在歯数別の対象者の特性(身体機能、認知機能など)を視野に入れ、個々の状況に応じた口腔機能管理の必要性を示すものであった。つまり、高齢期口腔機能管理を実施する上で、現在歯数は可逆性が無く(一度失った自身の歯は回復できない)それに大きく影響される口腔機能の特性を再認識すること、さらに、健康寿命延伸施策で注目されている、フレイルと認知機能も包含した対応の必要性が示唆された。

キーワード 現在歯数、フレイル、高齢者、口腔機能、栄養

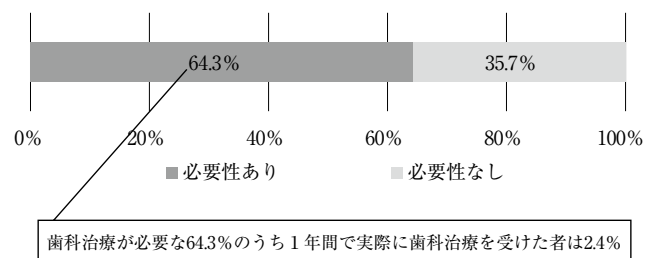
1. はじめに：

人生100年時代に向けて口腔健康を支えるための視点とは

在宅歯科医療対象者である在宅療養高齢者の介護が必要となった原因は、1位：認知症(18.7%)、2位：脳血管疾患(15.1%)、3位：高齢による衰弱(フレイル)(13.8%)、さらにフレイルが主原因で生じる転倒・骨折(12.5%)が4位である(平成30年内閣府)。要介護の原因の約3割を占める「認知症」および「フレイル」のリスクを有する高齢者に対する包括的な歯科専門職の対応方法は標準化されておらず、検討する上での知見も十分とは言えない。本研究の別調査結果においても、要介護高齢者において歯科治療の必要性を認めた者は64.3%いたにもかかわらず、そのうち1年間で実際に歯科治療を受けた者は2.4%に留まっていた

(図1)。

現在の高齢者の口腔に目を転じると、8020運動の奏功により高齢者の現在歯数は増加の一途をたどり、う蝕や歯周病への対応も求められる。さらに欠損補綴としてインプラント治療経験を有する高齢者の数も増加しており、今後はこういった多



対象：要介護高齢者 290名(平均年齢 86.9±6.6歳)
特定地域の、在宅療養、認知症グループホーム、通所サービス、療養病棟、老人保健施設、特別養護老人ホームの入所、利用者など
歯科治療(義歯・う蝕・歯周疾患・粘膜疾患・保湿)の必要性の有無を歯科医師が判定

図1 要介護者の口腔状態と歯科治療の必要性と治療実施状況

受付：2021年12月19日

(*：研究代表者)

- 1) 東京都健康長寿医療センター 歯科口腔外科
- 2) 昭和大学歯学部 高齢者歯科学講座
- 3) 東京大学 高齢社会総合研究機構
- 4) 日本歯科医師会

- 5) 東京歯科大学 老年歯科補綴学講座
- 6) 日本歯科総合研究機構
- 7) 北海道大学 大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室
- 8) 東京都健康長寿医療センター研究所

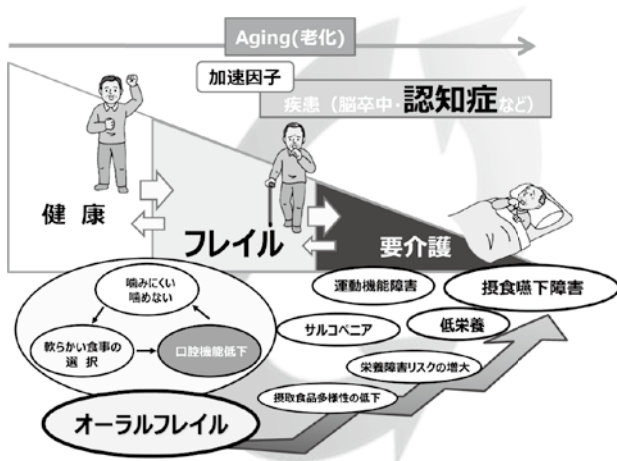


図2 口腔健康を阻害する因子としてのフレイル・認知症の位置付け (イメージ)

要介護の原因として脳卒中などの疾患だけではなく「フレイル」が注目され、フレイル予防が国家戦略として位置付けられた。口腔機能低下（オーラルフレイル）さらにフレイルの重度化にともない、様々な社会的および身体的な課題（サルコペニア、運動機能障害、低栄養など）が生じる。またその加速因子として「認知症」が大きな問題となっている。これらの過程での歯科的課題等を把握することにより、要介護高齢者などに対する在宅歯科医療に至る継続的な歯科医療提供を円滑に実施する上での基礎的知見作成を実施した。

様化した高齢者の口腔環境に応じた適切な口腔管理を行うことが求められている。しかしながら、認知症およびフレイルに焦点を当てた歯科的ニーズに関する知見の集積はなされていない。人生100年時代を見据え、高齢者が住み慣れた地域でその心身状態に応じた適時適切な歯科医療を享受するためには、通院が可能な時期からの予防的かつ予知性を持った対応を標準化することが必要である。以上の現状を踏まえ、本研究の目的は、要介護となり歯科通院が困難となった高齢者の口腔の健康を維持・回復するための具体的な歯科治療指針の作成に資する基礎的知見を、健康寿命延伸プラン¹⁾の基本的方向性と目標に示される、「認知症」および「フレイル」に焦点化し蓄積することと設定した（図2）。

2. 研究の概要

8020運動達成者の割合が5割を越え、高齢期歯科口腔保健活動の目途の一つにオーラルフレイル管理²⁾が加わった。高齢者の口腔環境（現在歯数、機能歯数など）は多様化しており、その多様性に応じた口腔機能管理に資する疫学データ作成は重要と考える。特に現在歯数は不可逆で回復することが無い項目であるため統計学的処理を行う場合、

年齢、性別と同様に調整変数（影響を除外する項目）として扱われることが多い。本研究では、現在歯数を、0本、1～9本、10～19本さらに20本以上の4群に分け各群の特性を検討した（結果の表示は現在歯数0本群、20本以上群とした）。現行の口腔機能低下症のアウトカムが栄養状態（簡易栄養状態評価表 [Mini Nutritional Assessment[®] Short-Form : MNA[®]-SF]³⁾）であることから、栄養状態（MNA[®]-SF）に影響する因子を現在歯数群別に解析した。

1) 目的

多様化した高齢者の口腔環境を視野に入れた高齢期口腔機能管理に向けた基礎的資料の作成を目的とした。

2) 方法

本研究は、65歳以上の高齢者を対象として実施しているコホート研究（主催：東京都健康長寿医療センター）参加者の統合データを用いた。草津研究は群馬県草津町の、お達者研究および高島平スタディは東京都板橋区の地域在住高齢者を対象として継続的に実施されている。参加者のうち、すべての調査項目の実施に協力を得られた1,819名（女性1,110名、男性709名、平均年齢76.1 ± 6.3歳）を解析対象者とした。本研究では、現在歯数、機能歯数、Tongue coating index (TCI)、口腔粘膜湿度（口腔湿度計）、咬合力（咬合力測定システム用フィルム）、Oral diadochokinesis (ODK) /ta/, 咀嚼機能（咀嚼能力測定用グミゼリー）、嚥下機能（基本チェックリスト）、日本語版フレイル基準（Japanese version of the Cardiovascular Health Study : J-CHS）、握力、歩行速度（5m通常歩行速度）、MNA[®]-SF、Body mass index (BMI)、血清アルブミン値 (Alb)、骨格筋量指数 (Skeletal Muscle Mass Index : SMI)、精神状態短時間検査 - 改訂日本版 (Mini Mental State Examination - Japanese : MMSE-J) を評価した。また、J-CHS基準に従ってプレフレイルとフレイルの判定を、Asian Working Group for Sarcopenia : 2019のアルゴリズムに従ってサルコペニアと重症サルコペニアの判定を行った。群間の連続変数に関する解析にはMann-WhitneyのU検定、あるいは対応のないt検定を、カテゴリ変数にはカイ二乗検定を用いた。また、加齢との関連を評価するため、

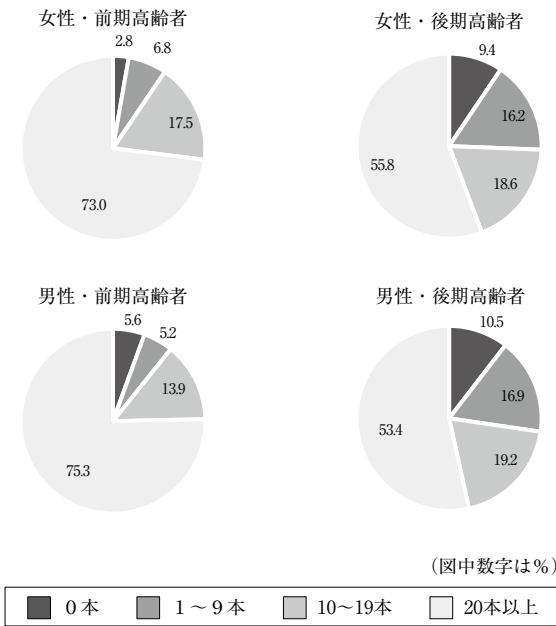


図3 現在歯数4群の前後期高齢者別割合(男女別)

年齢と各項目の相関係数を算出し、さらに年齢とMantel-Haenszel test for trendを実施した。そして、MNA[®]-SFによる低栄養リスク判定を従属変数としたロジスティック回帰分析を実施した。

3) 結果

(1) 前期後期高齢者群比較

男女別に前後期高齢者の歯数を比較した結果、現在歯数は年齢とともに有意に減少していることが示された(図3)が、機能歯数は前後期高齢者間で有意差を認めなかった。この結果は、本研究のほとんどの対象者は、歯の欠損部に対して補綴治療が行われていることを示している。舌の巧緻性を表すODK /ta/ (図4)や舌の筋力を表す舌圧(図5)、食品をかみ砕く力を示す咀嚼機能(図6)は後期高齢者の方が低値を示しており、年齢とともに機能が低下することが明らかとなった。その一方で、舌苔の付着度を示すTCIや咬合力、嚥下機能は前後期高齢者間で明確な差は認められず、加齢以外の要因の影響が強いことが伺える。特に咬合力は、女性において後期高齢者の方が高い値を示すという逆転現象が起きており、加齢や現在歯数以外の要因の方が強く影響している可能性が示された。年齢と調査項目との関係を検討した結果では、口腔粘膜湿潤度、ODK /ta/、舌圧、咀嚼機能は年齢との間に有意な負の相関関係が示すが、関連の強さは弱かった。TCI、咬合力は年齢と無相関であった。

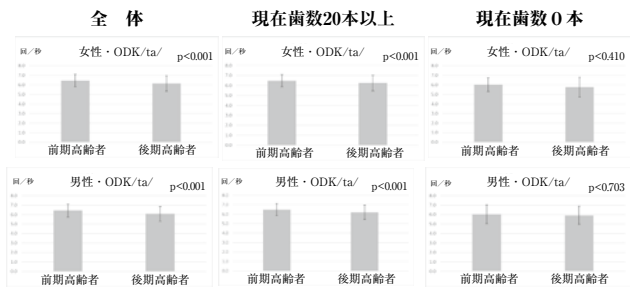


図4 現在歯数群別オーラルディアドキネシスコア(ODK)比較

(2) 現在歯数群別比較

本調査対象後期高齢者の現在歯数20本以上群は女性55.8%、男性53.4%、その一方現在歯数0本群は、女性9.4%、男性10.5%であった(図3)。現在歯数0本群では、男女に共通して前後期高齢者間で有意差を示す口腔機能は認められなかった。口腔機能のうち、舌圧のみ男性後期高齢者で有意に低値を示した。現在歯数が20本以上群では、咬合力、ODK /ta/、舌圧が男女に共通して前後期高齢者間で有意な差を認めた。ODK /ta/と舌圧は、前後期高齢者に比べて後期高齢者の方が低値であった(図4, 5, 6)。

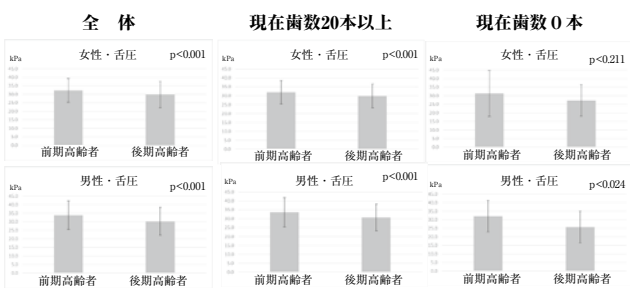


図5 現在歯数群別舌圧比較

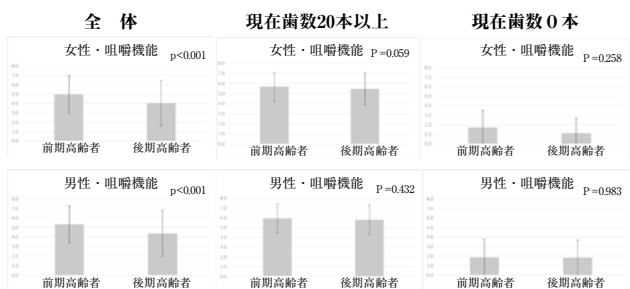
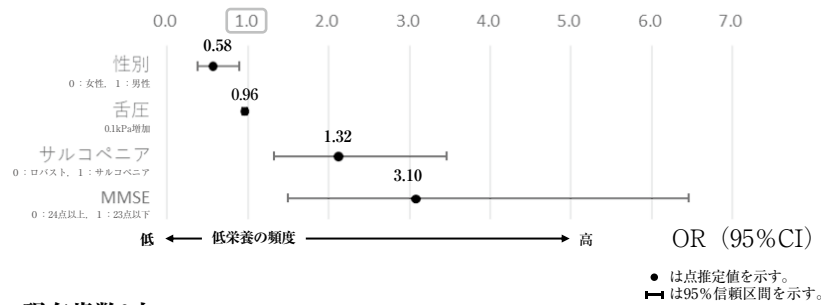


図6 現在歯数群別咀嚼機能(グミスコア)比較

(3) ロジスティック回帰分析結果

現在歯数群別の低栄養の口腔機能も含めた関連因子を検討することを目的に、現在歯数群別に解

現在歯数20本以上



現在歯数0本

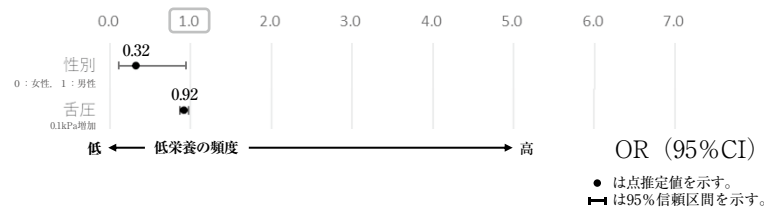


図7 現在歯数群別低栄養リスク (MNA) 因子の検討 (多変量ロジスティック回帰分析: 有意な項目のみ提示)

栄養障害を生じるリスクをオッズ比で示した。

現在歯数 20 本以上群: 栄養障害のリスクとして、女性であること、舌圧が下がること、サルコペニアであること、MMSE (23 点以下) 低下する、以上が有意なリスクとして示唆された。現在歯数 0 本群: 栄養障害のリスクとして、女性であること、舌圧が下がること、以上が有意なリスクとして示唆された。

析を行ったが、紙面の制約で現在歯数 0 本群と 20 本以上群の多変量解析結果のみ提示した (図 7)。現在歯数 0 本群の後期高齢者と 20 本以上群の前後期高齢者の集団に共通して、口腔機能のうち舌圧の低下が低栄養状態に関連していることが示された。また、現在歯数が 20 本以上群の前期高齢者では咀嚼機能の低下が、後期高齢者ではサルコペニアや認知機能の低下も低栄養状態に関連していることが明らかとなった。

3. 高齢者口腔機能管理の展望

本研究では、超高齢社会に向け後期高齢者栄養障害リスクに関して口腔関連項目、さらに健康寿命延伸に深く関与する、フレイル (サルコペニア) さらに認知機能の関係について検討した。口腔機能低下症の診断に使用する 7 項目 (嚥下機能は診断基準以外の評価) と年齢の関係は、TCI, 咬合力, 嚥下機能以外は弱いものの有意な相関を認めた。このような各口腔機能の加齢変化の様相を理解し、高齢期口腔機能管理を進めることが必要である。現在歯数と口腔機能の関連性はこれまでの多くの調査知見があるものの、現在歯数別に各機能の様相を整理した知見は少なく、本研究の結果は口腔機能管理計画を作成する際に現在歯数の重要性を示唆するものである。8020 運動が円滑に進み達成者は 5 割を越えたが、今回の調査では後期高齢者

群において、現在歯数 20 本未満群が約 4 割、さらに 0 本群*は約 1 割認めている (図 3) (*本研究のデータの現在歯数 0 本群の平均機能歯数は 28 本であることから事実上総義歯群である)。本稿では、20 本以上群と 0 本群の結果のみ示したが、現在歯数と各口腔機能関連項目との相関の強さは異なっていた (未掲載)。例えば、ODK, 舌圧と、咀嚼機能の加齢変化 (前後期高齢者比較) と、20 本以上群と 0 本群との差 (図 4~6) は異なる。つまり、口腔機能関連項目の多くは加齢の影響を受けているが、咀嚼機能に代表されるように加齢に加え現在歯数の影響を強く受ける特性を持つ項目がある。このことは口腔機能管理を行う上で、現在歯数を把握することの重要性を示唆するものである。

本研究は口腔健康を阻害する因子としてのフレイル、認知症の位置付けを検討することを目的とした研究であるが、現在歯数 20 本以上群において、フレイルの構成因子であるサルコペニア、認知機能 (MMSE スコア) が、舌圧とともに加齢の影響を除外しても栄養障害のリスクとなっていることが示唆された。つまり、現在歯数を多く維持している高齢者は、口腔機能だけでなくフレイルおよび認知機能低下も視野に入れた包括的な管理の必要性があることを示しており、日本歯科医師会からのオーラルフレイル概念との整合性も取れた結果と言えよう。一方で、現在歯数 0 本群 (総義歯群) では、栄養障害のリスクとして舌圧が統計学的に

有意な項目として確認され、現在歯数を多く維持している群とは異なる結果であった。

今回、本研究から得られた知見として、口腔機能評価項目の特性（加齢、現在歯数の影響）が把握され、さらには現在歯数別の対象者の特性（身体機能、認知機能など）を視野に入れた高齢期口腔機能管理の必要性が確認された。現在の高齢者の口腔環境は多様化していることから、大規模データによる、より詳細な検討が必要である。特に回復が困難な現在歯数に大きく影響される口腔機能の特性を踏まえ、健康寿命延伸施策で注目されている、フレイル、認知機能も包含した口腔機能管

理ニーズの整理が急務であると考えらる。



本項に関し、開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 健康寿命延伸プラン 資料4：厚生労働省. <https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000514142.pdf>
- 2) 歯科診療所におけるオーラルフレイル対応マニュアル 2019年版, 公益社団法人日本歯科医師会, 2019. https://www.jda.or.jp/dentist/oral_flail/pdf/manual_all.pdf
- 3) 水口俊介, 津賀一弘, 池邊一典ら：高齢期における口腔機能低下—学会見解論文 2016年度版一, 日本老年歯科医学, Vol.31(2) : 81-99, 2016.

A Study on Oral Functional Management of the Older People in the Super-aged Society ; Focusing on Frailty and Cognitive Decline

Hirohiko HIRANO¹⁾, Yuji SATO²⁾, Katsuya IJIMA³⁾, Tsuyoshi KODAMA⁴⁾, Junichi FURUYA²⁾, Takayuki UEDA⁵⁾, Midori TSUNEISHI⁶⁾, Yutaka WATANABE⁷⁾, Masanori IWASAKI⁸⁾, Yuki OHARA⁸⁾, Ayako EDAHIRO⁸⁾

¹⁾ Dentistry and Oral Surgery, Tokyo Metropolitan Geriatric Hospital and Institute of Gerontology

²⁾ Department of Geriatric Dentistry, Showa University School of Dentistry

³⁾ Institute of Gerontology, The University of Tokyo

⁴⁾ Japan Dental Association

⁵⁾ Department of Removable Prosthodontics and Gerodontology, Tokyo Dental College

⁶⁾ Japan Dental Association Research Institute

⁷⁾ Gerodontology, Department of Oral Health Science, Faculty of Dental Medicine, Hokkaido University

⁸⁾ Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology

abstract

The purpose of this study was to define the status of frailty and dementia as factors that impair oral health. The study participants were 1,819 older people living in the community. The findings from this study indicate the necessity of oral function management according to individual circumstances, taking into account the characteristics of the oral function assessment items (aging, influence of the number of present teeth, etc.) and also the characteristics of the subjects according to the number of current teeth (physical function, cognitive function, etc.). It is important to recognize that the number of current teeth is not reversible, and that the characteristics of oral function are greatly affected by the number of present teeth when managing oral function in older people. Furthermore, this study suggests the necessity of addressing frailty and cognitive function, which are the focus of attention in measures to extend healthy life expectancy.

keywords : number of teeth, Frailty, Older people, Oral function, Nutrition

AI活用によるオンライン口腔健康管理システムの構築に関する研究

藤澤政紀^{1,*}、三浦賞子¹、磯貝知範¹、新谷明一²、前野雅彦³、小峰 太⁴、
保坂啓一⁵、峯 篤史⁶、佐藤洋平⁷、大久保力廣⁷、大槻昌幸⁸

抄 録

超高齢社会における健康寿命の延伸には、口腔機能の維持が重要である。口腔機能低下に対しては、機能の面からのアプローチが多い一方、予防の観点から口腔の審美に着目した研究はほとんどなされていない。そこで、「口腔機能低下症、オーラルフレイルに対する予防手段として、口腔の審美に関心を抱くことが関与する」という仮説を設定しAI活用による新しい口腔健康管理システムを用いて検証することとした。なお、本発表では中間結果の報告を行うことで本研究の妥当性を検討した。

一般社団法人日本歯科審美学会会員の所属する病院および歯科医院に通院している60歳以上の患者のなかで調査の主旨に同意が得られた54名(男性26名、女性28名、年齢60～91歳、平均年齢71.2±6.9歳; mean±SD)を対象に20項目の質問票ならびに口腔内所見、全身状態の関連をAIにより解析した。本研究は明海大学(承認番号11000689-A1930)、日本歯科審美学会(承認番号2020-001)の倫理審査で承認を得て実施した。

機械学習を実施するため、データの75%を解析対象とし、25%を検証用に分割しデータの標準化を行った。サポートベクターマシンによる学習曲線の解析結果をもとに、特徴量の重要度を最適化した結果、「審美性に対する関心」の質問項目に高い関心を示す場合、「口腔内の問題による活動制限」、「見た目の良くない歯の存在」等の項目に対し「全くない」と回答する傾向が高い結果となった。AI解析では主観を排除して関連項目を検出することから、本手法が経年的な変化を追跡するコホート研究に対しても応用できると考える。

AI解析はオーラルフレイル予防に効果的なポピュレーションアプローチのエビデンスとなる調査を行う場合、今回の手法が利用できるものと期待される。

キーワード AI, 口元の審美意識, 健康寿命, 咀嚼機能, パーセルインデックス

1. はじめに

超高齢社会における健康寿命の延伸には、口腔機能の維持が重要であり、歯科的な対策を講じることの必要性が高まっている。口腔機能低下に対しては、直接口腔機能の面からのアプローチが多い。このことは機能低下を来した場合の対処に加え、予防としての口腔機能への対処も含まれ

る¹⁾。高齢者の機能賦活に関しては、直接機能に対する介入のみならず、間接的なアプローチの重要性も示唆されており、その一つに化粧療法²⁾がある。化粧をした高齢者が元気になり、周囲の高齢者にも活気が漲ったという話を耳にする。このことは審美性に関心を抱くことで精神面での賦活化が影響しているものと考えられている。一方、このような点に関し、口腔の審美という歯科の視点に着目した研究はほとんどなされていない。そ

受付：2020年10月10日 (*：研究代表者)

¹⁾ 明海大学歯学部 機能保存回復学講座 クラウンブリッジ補綴学分野

²⁾ 日本歯科大学生命歯学部 歯科理工学講座

³⁾ 日本歯科大学生命歯学部 接着歯科学講座

⁴⁾ 日本大学歯学部 歯科補綴学第Ⅲ講座

⁵⁾ 徳島大学大学院医歯薬学研究部 再生歯科治療学分野

⁶⁾ 大阪大学大学院歯学研究科 クラウンブリッジ補綴学分野

⁷⁾ 鶴見大学歯学部 有床義歯補綴学講座

⁸⁾ 東京医科歯科大学大学院 う蝕制御学分野

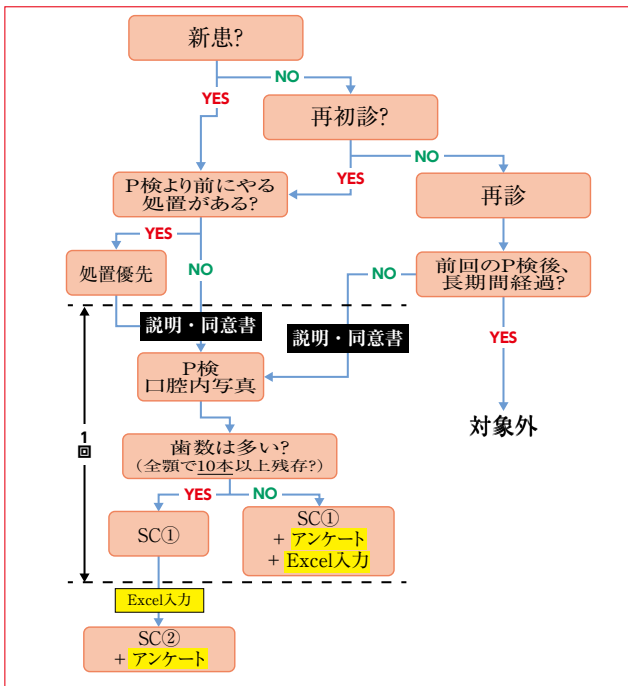


図1 調査の流れ

こで、口腔機能低下症，オーラルフレイルに対する予防手段として，口腔の審美に関心を抱くことが関与する，という仮説を設定した。本研究の最終的な目標は，患者の口腔内情報と，質問票による口腔に関する意識を入力することで artificial intelligence (AI) によるオーラルフレイル防止に関する患者個々の適切な指導プログラムを提示することにより，健康寿命延伸に寄与することである。今回の報告内容は，システム構築に必要な基礎的データを蓄積し，AIの学習に有効なデータの収集と解析方法の検証を行ったものである。

2. 研究方法

1) 調査方法

- (1)対象者：一般社団法人日本歯科審美学会会員の所属する病院および歯科医院に，歯科治療のために通院している60歳以上の外来患者に対し，**図1**に示す手順に従い，調査の主旨に同意が得られた54名（男性26名，女性28名，年齢60～91歳，平均年齢71.2 ± 6.9歳；mean ± SD）を対象とした。
- (2)審美意識調査：Larssonら³⁾のOrofacial Esthetic ScaleならびにSladeら⁴⁾のoral health impact profileならびにその日本語版⁵⁾を参考に作成した，歯および顎口腔の審美に対する関心を調査する20問の質問票（**図2**）を用いた自己記載に

- 1：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，発音しにくいことがありますか？
- 2：「見た目がよくない歯があるな」と思うことはありますか？
- 3：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，あなたの外観に影響していると感じることがありますか？
- 4：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，味覚が悪くなったと感じることがありますか？
- 5：口の中にズキズキした痛みがありますか？
- 6：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，食べづらいなあと感じることがありますか？
- 7：歯科の問題で悩んだことがありますか？
- 8：歯・お口あるいは入れ歯のために，人前を気にしたことがありますか？
- 9：歯・お口あるいは入れ歯の見た目が気に入らなかったことはありますか？
- 10：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，緊張するようなことがありますか？
- 11：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，食事が楽しくなかったことがありますか？
- 12：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，笑うことをためらってしまうことがありますか？
- 13：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，食事を中断することがありますか？
- 14：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，リラックスしにくいと感じることがありますか？
- 15：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，少し恥ずかしい思いをしたことがありますか？
- 16：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，ほかの人に少しおこりっぽくなることがありますか？
- 17：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，日常の家事・仕事にさしさわるようなことがありますか？
- 18：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，人生を不満に思うことがありますか？
- 19：歯・お口あるいは入れ歯に問題があって，十分に活動できないようなことがありますか？
- 20：歯・口元の見た目に関心がありますか？(0から10で選択)

図2 質問票

項目1～19は5段階（いつも，しばしば，ときどき，ほとんどない，まったくない）で回答し，20には11段階（0：全くない～10：非常にある）で回答する

による調査を実施した。

- (3)咀嚼スコア：平井ら⁶⁾の摂取可能食品アンケートを用いた自己記載による調査を実施した。
- (4)Barthel Index：ADL (activities of daily living)に関する調査項目として10項目の質問票からなるBarthel Index⁷⁾を用いた自己記載による調査を実施した（**図3**）。
- (5)全身状態：アンケート形式で基礎疾患等の既往の有無を自己記載による調査で実施した。
- (6)診療録記載内容調査：口腔内所見を診療録から抽出し歯式，歯周組織所見を記入した（**図4**）。記入された情報から，残存歯数，機能歯数，咬合支持歯数，咬合支持域数，平均プロービングデプス値，BOP (bleeding on probing) 率，平

**バーセル・インデックス (Barthel Index) の
10項目の配点・判定基準**

- ① 食 事
10点：自立， 5点：見守りや介助を要する， 0点：全介助
- ② 移 乗
15点：介助無しで動作可能， 10点：軽度の介助や監視・声掛けが必要， 5点：座ることはできるがほぼ全介助， 0点：全介助・不可能
- ③ 整 容
5点：自立， 0点：部分介助・不可能
- ④ トイレ動作
10点：自立， 5点：部分介助， 0点：全介助・不可能
- ⑤ 入 浴
5点：自立， 0点：部分介助・不可能
- ⑥ 歩 行
15点：45m以上の歩行， 10点：45m以上の介助歩行
5点：45m以上車いすでの操作可能， 0点：全介助
- ⑦ 階段昇降
10点：自立， 5点：介助または監視必要，
0点：不能（全介助）
- ⑧ 着替え
10点：自立， 5点：部分介助， 0点：全介助
- ⑨ 排 便
10点：失禁なし， 5点：ときに失禁あり， 0点：全介助
- ⑩ 排 尿
10点：失禁なし， 5点：ときに失禁あり， 0点：全介助

図3 Barthel Index の項目と配点

均動揺度を算出した。

(7)口腔内写真撮影：5枚法による口腔内写真を撮影した。

2) 集計方法ならびに解析方法

(1)集計方法

全ての項目を，Google フォームに入力し，個人が特定できないよう暗号化したデータとして集計した。なお，審美意識，咀嚼スコア，Barthel Index，全身状態等の質問票に関しては，被検者自身がGoogle フォームに入力し，口腔内所見に関しては研究協力者がGoogle フォームに入力した。口腔内写真データは被検者IDを付与して匿名化し研究代表者のサーバーに格納した。なお，調査に際しては，研究代表者が所属する明海大学の研究倫理審査委員会の承認（承認番号 A1930）を得，その後一般社団法人日本歯科審美学会の倫理審査委員会の承認（承認番号 2020-001）を得て実施した。

(2)解析方法

本来経年的な調査結果を前向きコホート調査として行う予定であるが，コロナ感染拡大に伴い，調査開始が遅れたため，初年度分の54名のデータについて質問票の結果を横断的に解析した。機械



図4 口腔内所見の入力例

上段:歯式，中段:ペリオチャート（下段左:歯式からの集計結果例，下段右:ペリオチャートからの集計結果例）

学習によるAI解析を行い，質問項目#20，即ち「歯・口元の見た目に気になりますか？」という質問に最も関連のある項目を検出することを試みた。この方法は，本研究の最終的な目標を達成する際の解析手法としての妥当性を確認するという点でも意味のある解析と考える。

解析にはパーセプトロン，ランダムフォレスト，サポートベクターマシン，K近傍，ロジスティック回帰などが適応できるが，今回はサポートベクターマシンにて学習した。また，Recursive Feature Eliminationにより有用な特徴量を選択し解析の最適化を図った。

3. 結果と考察

1) サポートベクターマシンによる学習の検証結果

機械学習を行うためには，データの75%を解析対象とし，25%を検証用に分割しデータの標準化を行う。適切な学習が行われると，学習データ (training accuracy) の学習サンプル数が増加するにつれ精度は低下し，検証データ (validation

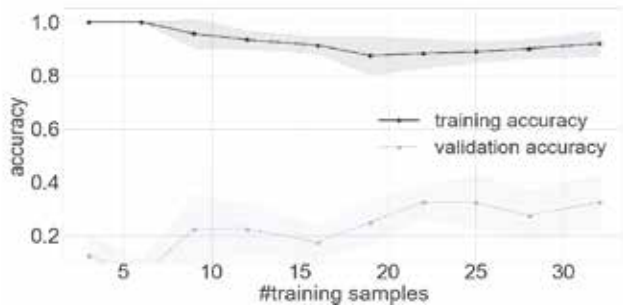


図5 学習曲線

学習データ（実線）の正解率が高く検証データ（破線）の正解率が低い

accuracy) では精度が増加することが知られている。サポートベクターマシンによる学習曲線の解析結果では、今回のデータ数では学習データの低下がみられないことから、過学習であることが理解できる（図5）。この解決方法としてはパラメータの最適化（ハイパーパラメータの探索）、特徴量選択の最適化、データ数の増加が考えられるが、今回の研究での対応策としては調査対象者数を増員する必要があることが理解できた。

2) 特徴量選択の最適化

特徴量の重要度をもとに最適化したところ、12の要素が選択され学習データが45%まで低下し検証データの上昇が確認できた（図6）。

今回の解析結果から「歯・口元の見た目に関心がありますか?」という質問に高い関心を示すと答えた人は、質問項目#19の「歯・お口あるいは入れ歯に問題があって、十分に活動できないようなことがありますか?」、2の「見た目がよくない歯があるな」と思うことはありますか?」、9の「歯・お口あるいは入れ歯の見た目が気に入らなかったことはありますか?」に対し、いずれも「全くない」の選択肢への回答と強い関係があることが分かった（図7）。この結果は当然と捉えられるが、一般的に質問の内容を理解し、主観的に判断することが「当然」と捉える理由であろう。一方、AIによる機械学習では主観が入る余地がなく、（その関連性の高くなる理由はさておき）関連性が高いことを客観的に示したものである。その意味では、本研究の最終目的である、前向きコホート調査の解析にも十分応用できるものと考えられる。AIによる客観的な判断とヒトによる主観的な考察、理由付けが将来、本研究の本当の目的を達成することに繋がるものと期待したい。

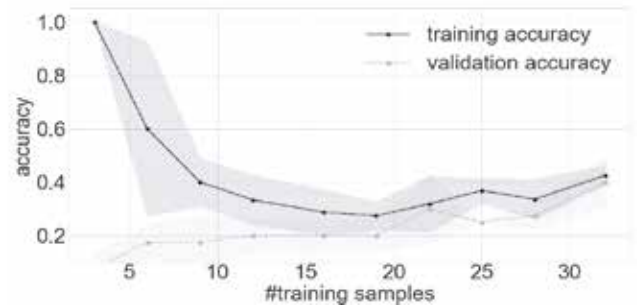


図6 自動抽出後の学習曲線

学習データ（実線）の正解率が低下し検証データ（破線）の正解率が若干上昇した

Weight	Feature
0.0857 ± 0.1069	Q19-5
0.0857 ± 0.1069	Q2-5
0.0857 ± 0.0571	Q9-5
0.0714 ± 0.0904	init-1
0.0571 ± 0.0571	init-6
0.0429 ± 0.0700	M
0.0286 ± 0.1143	Q10-5
0.0286 ± 0.0700	Can-2
0.0143 ± 0.0571	Masticatory_score
0.0143 ± 0.0571	Q2-4
0 ± 0.0000	Q5-4
0 ± 0.0000	Q2-3

図7 学習モデル

質問項目の #19, #2, #9 などが関連の高い項目として抽出された

4. まとめ

60歳以上の歯科治療を希望して来院した54名を対象に、口腔内所見、自己記入式質問票による調査を行った。作成した質問の入力システム、口腔内情報を数値化するデータ入力システムの有用性が確認できた。調査内容を機械学習によるAI解析で調べた結果、口腔の審美に関心があることに深く関与する質問項目を抽出できた。さらに調査を発展させることにより、オーラルフレイル予防としてポピュレーションアプローチを行う根拠となるエビデンスが得られることが期待される。

謝 辞

本研究に関し、以下の方々のご協力に謝意を表する。

【研究協力者】

〈AI解析〉窪田佳寛（東洋大学）

〈アンケート調査〉阿部俊宣, 井口 将, 磯貝知一, 漆原優, 大谷一紀, 小川信太郎, 金田 桂, 近藤隆一, 高橋真広, 坪田健嗣, 西浦美穂, 畑山貴志, 原 学, 日野年澄, 伏木亮祐, 本田順一, 宮内修平, 宮前守寛, 六人部慶彦, 米倉和秀（敬称略, 五十音順）



本稿に関連し、開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) Maekawa, K., Ikeuchi, T., Shinkai, S., Hirano, H., Ryu, M., et al.: Number of functional teeth more strongly predicts all-cause mortality than number of present teeth in Japanese older adults. *Geriatr Gerontol Int*, 20: 607-614, 2020.
- 2) 池山和幸：「粧う」ことで健康寿命を伸ばす化粧療法。クインテッセンス出版，東京，2018，54-72頁。
- 3) Larsson, P., John, M.T., Nilner, K., Bondemark, L., List, T.: Development of an Orofacial Esthetic Scale in prosthodontic patients. *Int J Prosthodont*, 23: 249-256, 2010.
- 4) Slade, G.D., Spencer, A.J.: Development and evaluation of the oral health impact profile. *Community Dent Health*, 11: 3-11, 1994.
- 5) 中居伸行, 貞森紳丞, 河村 誠, 笹原妃佐子, 濱田泰三：口腔にかかわる QOL 評価質問票 (OHIP) の翻訳等価性の検討. 補綴誌, 48: 163-172, 2004.
- 6) 平井敏博, 安齋 隆, 金田 冽, 又井直也, 田中 牧ほか：摂取可能食品アンケートを用いた全部床義歯装着者用咀嚼機能判定表の試作. 補綴誌, 32: 1261-1267, 1988.
- 7) Mahoney, F.I., Barthel, D.W.: Functional evaluation: The Barthel Index. *Md State Med J*, 14: 61-65, 1965.

Development of a Novel Oral Health Management System Utilizing AI

Masanori FUJISAWA¹⁾, Shoko MIURA¹⁾, Tomonori ISOGAI¹⁾, Akikazu SHINYA²⁾, Masahiko MAENO³⁾, Futoshi KOMINE⁴⁾, Keiichi HOSAKA⁵⁾, Atsushi MINE⁶⁾, Yohei SATO⁷⁾, Chikahiro OKUBO⁷⁾, Masayuki OTSUKI⁸⁾

¹⁾ *Division of Fixed Prosthodontics, Department of Restorative & Biomaterials Sciences, Meikai University School of Dentistry*

²⁾ *Department of Dental Materials Science, School of Life Dentistry at Tokyo, The Nippon Dental University*

³⁾ *Department of Adhesive Dentistry, School of Life Dentistry at Tokyo, The Nippon Dental University*

⁴⁾ *Department of Fixed Prosthodontics, Nihon University School of Dentistry*

⁵⁾ *Department of Regenerative Dental Medicine, Tokushima University Graduate School of Biomedical Sciences*

⁶⁾ *Osaka University Graduate School of Dentistry, Department of Fixed Prosthodontics*

⁷⁾ *Department of Removable Prosthodontics Tsurumi University School of Dental Medicine*

⁸⁾ *Cariology and Operative Dentistry, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University (TMDU)*

abstract

Maintaining oral function is important for extending the healthy life expectancy in a super-aged society. Although there are many functional approaches to oral dysfunction, few studies have focused on oral esthetics from the prevention perspective. Therefore, a survey was conducted based on the hypothesis of "consciousness of oral esthetics can prevent oral hypofunction and oral frailty" with a new oral health management system utilizing artificial intelligence (AI). In this interim result report, the validity of this study was examined.

Fifty-four patients aged 60 and over (26 males, 28 females, average age 71.2 ± 6.9 years old) who were treated and/or cared for at dental clinics employing members of the Japan Academy of Esthetic Dentistry were surveyed. A 20-item questionnaire, including oral findings, dental records, periodontal status, and general health condition, was analyzed by AI. This study was conducted after approval by the ethics committee of Meikai University (11000689-A1930) and the JAED (2020-001).

In order to carry out machine learning, 75% of the data was analyzed and 25% was divided for verification, and the data were standardized.

After optimizing the importance of features based on the analysis of the learning curve by the support vector machine, those with a high interest based on the question item of "interest in esthetics" had a high rate of answering "not at all" to the items of "activity restrictions due to problems in teeth or oral cavity" and "existence of unsightly teeth". As AI analysis excludes subjectivity and detects related items themselves, this method is expected to be applied to cohort studies that track changes over time to provide evidence of a population approach to prevent oral frailty.

keywords : AI, Esthetic Consciousness for the Dental Appearance, Healthy Life Expectancy, Masticatory Function, Barthel Index

第37回 歯科医学を中心とした 総合的な研究を推進する集い 日程

日時 令和4年2月15日(火)午後2時 ● 場所 オンライン(ライブ)配信 ● 主催 日本歯科医学会

開会式

14:00 ~ 14:10

司 会	日本歯科医学会 理事	馬場 一美
開会の辞	日本歯科医学会 副会長	松村 英雄
挨拶	日本歯科医学会 会長	住友 雅人
経過報告	日本歯科医学会 常任理事	尾松 素樹

1

14:10
14:30 『見つける』・『清める』・『護る』の概念を取り入れた with/post コロナ社会における安心・安全な環境づくり

演 者：足立 哲也 (京都府立医科大学大学院 医学研究科 歯科口腔科学)



14:30
質疑応答

座 長：山本 龍生 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 神奈川歯科大学 教授)



2

14:40
15:00 歯周炎による糖尿病性腎症増悪メカニズムの解明

演 者：新城 尊徳 (九州大学大学院歯学研究院 口腔機能修復学講座歯周病学分野)



15:00
質疑応答

座 長：高柴 正悟 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授)



3

15:10
15:30 アルカリフォスファターゼの硬組織結合制御による 新規歯周組織再生療法の開発

演 者：長崎 敦洋 (東北大学大学院歯学研究科/分子・再生歯科補綴学分野)



15:30
質疑応答

座 長：横瀬 敏志 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 明海大学歯学部 教授)



4

15:40
16:00 予知性の高い骨増生法の開発を目的とした 抗酸化物質エダラボンによる移植細胞の生存率向上と機能温存

演 者：江口 香里 (新潟大学医歯学総合病院 冠・ブリッジ診療科)



16:00
質疑応答

座 長：江草 宏 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 東北大学大学院歯学研究科 教授)



《16：10～16：20 休憩》

5

16：20
16：40

**VR技術を活用した歯科治療時の
全身的偶発症対応シミュレーションコースの開発**

演者：岸本 直隆 (新潟大学大学院 医歯学総合研究科 歯科麻酔学分野)



16：40
質疑応答

座長：水田健太郎 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 東北大学大学院歯学研究科 教授)



6

16：50
17：10

**Additive Manufacturing による
ジルコニアクラウンの臨床展開へ向けた色調再現法の確立**

演者：三浦 賞子 (明海大学歯学部機能保存回復学講座 クラウンブリッジ補綴学分野)



17：10
質疑応答

座長：二瓶智太郎 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 神奈川歯科大学 教授)



7

17：10
17：40

**AI を活用した暑熱環境下での脱水予測システムの開発
—口腔水分量や舌状態, 顔色などの
身体データ情報による最適指標の探索—**

演者：田邊 元 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科)



17：40
質疑応答

座長：田口 明 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 松本歯科大学歯学部 教授)



8

17：50
18：10

**SARS-CoV-2 へのエタノール, 次亜塩素酸水, オゾン水の
不活化効果検証と不活化メカニズム解明
—WHO (世界保健機関) と CDC (米国疾病対策センター) の
手指衛生ガイドラインへの提言—**

演者：王 宝禮 (大阪歯科大学歯学部)



18：10
質疑応答

座長：増田 宜子 (日本歯科医学会学術研究委員会委員, 松本歯科大学歯学部 教授)



閉会

18：20

閉会の辞

日本歯科医学会 理事

馬場 一美

1. 『見つける』・『清める』・『護る』の概念を取り入れた with/post コロナ社会における安心・安全な環境づくり

○ 足立哲也, 扇谷えり子, 宮本奈生, 新屋政春,
山本俊郎, Giuseppe Pezzotti, 松田 修, 金村成智
京都府立医科大学 大学院医学研究科 歯科口腔科学

①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) では, 新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) が飛沫を介し, “ヒト” から “ヒト” へ伝搬する。SARS-CoV-2 は, ステンレスやプラスチックの表面で最大 72 時間, サージカルマスク上では最大 7 日間, 感染力を維持していることが知られている (Doremalen NV 等. NEJM.2020), (Chin A 等. Lancet Microbe. 2020)。COVID-19 の感染拡大を防止するには, 『見つける』・『清める』・『護る』技術の最適な配備が必須となる。

本研究は, SARS-CoV-2 だけでなく様々な病原体を検出し, 抗ウイルス活性を有する機能性材料を創生することで, with/post コロナ社会における安心で安全な医療環境の構築を目指す。

②研究内容の斬新性

病原体を『見つける』技術として, ラマン分光法に着目した。ラマン分光法は, 核酸の抽出を行わずに, リアルタイムで分子レベルの解析が可能である。ラマン分光法を用いることで, SARS-CoV-2 の従来株と変異株の識別に成功した。

さらに, 新規バイオセラミックス窒化ケイ素やアニオン交換機能を有する層状複水酸化物ハイドロタルサイトは, SARS-CoV-2 従来株および変異株に対し抗ウイルス活性を有することを見出し, 『清める』・『護る』技術として有望であることが示唆された (Pezzotti and Adachi T 等. *CTM*, 2020, *Adv Sci, Mater Today Bio*. 2021)。

③研究の発展性・進展性

抗ウイルス活性を有するハイドロタルサイトをパルプにコーティングすることで, 機能性粉体担持シートの作製に成功した。この担持シートをマ

スクやガウン等の医療製品や衛生用品へ応用することで, COVID-19 の感染拡大の防止が期待でき, 変異ウイルス対策にも資するものとなる。

④関連領域とのグループ形成の有用性

窒化ケイ素は, 抗ウイルス活性だけでなく, 抗菌・抗真菌活性を有する。このことから, 窒化ケイ素を金属 (チタン) へのコーティングや, ポリマー (PEEK や PMMA) との複合化により, 歯科および整形外科分野のインプラント, 義歯や骨セメント等の医療用品だけでなく, 日用品への応用が期待できる。また, 様々な病原体のラマンスペクトルのデータを構築することで, 診断だけでなく, 生活環境の汚染をモニタリングが可能である。

本法の社会実装を実現するには, インプラントメーカー, 衛生雑貨の企画・製造・販売する企業, P3 施設を有する研究施設との共同研究が必須となる。

希望する協力分野

整形外科・歯科理工学・ウイルス学・材料学

連絡先: [電話] 075-251-5641

[E-mail] t-adachi@koto.kpu-m.ac.jp

『見つける』・『清める』・『護る』の概念を取り入れた with/post コロナ社会における安心・安全な環境づくり 感染のリスクを低減する環境づくり

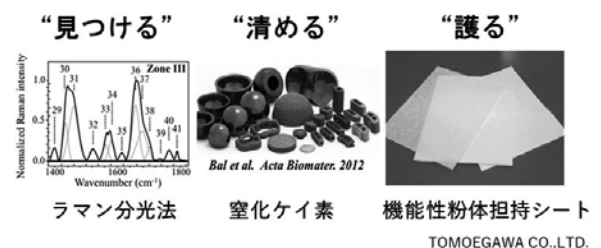


図 『見つける』・『清める』・『護る』の概念を取り入れた with/post コロナ社会における安心・安全な環境づくり

2. 歯周炎による糖尿病性腎症増悪メカニズムの解明

○新城尊徳, 佐藤晃平, 西村英紀

九州大学大学院歯学研究院 口腔機能修復学講座 歯周病学分野

①研究の背景(これまでの実績を含む)と目的

本邦の慢性腎臓病罹患者は約1,300万人にのぼり、そのうち約4割が糖尿病を原疾患とする糖尿病性腎症(Diabetic nephropathy: DN)である。DNは、腎不全による新規透析導入原因の第一位であり、循環器系疾患発症リスクが高い(心腎連関)ことから、QOLの著しい損失に加え医療経済的に大きな負担をもたらす。それゆえ、DN重症化対策は急務の課題である。

糖尿病では歯周病が増悪しやすく、また重症化した歯周病は血糖コントロールをはじめ、全身に様々な悪影響をもたらす。近年、慢性腎臓病患者で、歯周病の進行と腎機能低下に相関があることが示唆され(Chang et al, *Am J Med* 2017)、歯周病/腎臓病連関に注目が集まっているが、因果関係は不明である。動物実験レベルでも、DNモデル動物に実験的歯周炎を惹起させ、実際に腎機能障害が増悪するかどうかを検証した報告は皆無である。

申請者は、これまでDNモデル動物やDN患者検体を用いた研究に携わった経験を持ち(Gordin et al, *Diabetes Care*, 2019)、その過程で様々なDN病態解析手法を習得した。本研究は、DNモデル動物に実験的歯周炎を併発させ、**歯周炎によるDN増悪化の検証とその分子基盤の解明を目的とする。**

②研究内容の斬新性

これまでの基礎研究では、腎臓の病理的变化や糸球体・尿細管分画における遺伝子発現の変動といった、専門的手法に基づいて歯周炎がDN病態に影響することを示した報告は出ていない。これに対して、**本研究では「歯周炎がDN病態を増悪する」ことをin vivoモデルを用いて直接的に検証しようとする点**、また腎機能の中で最重要なる過機能の中心を担う糸球体に着目し、歯周炎とDNの連関に重要な因子(X因子)を網羅的解析により同定し、分子メカニズムを明らかにしようとする点が斬新である。

③研究の発展性・進展性

C57BL/6マウスと2型糖尿病モデルKK-Ayマウスを用いて、それぞれに絹糸結紮による実験的歯周炎を惹起した群と惹起しなかった群との比較検討に

より、DN病態の増悪に関与するX因子を同定でき、同因子を標的とした新たなDN病態分子基盤の解明やDN治療薬の開発につながる。また、臨床的には歯周病合併DN患者の腎機能低下予測や歯科未受診DN患者の歯周病進行予測マーカーとしての応用が期待される。究極的に、糖尿病性腎症重症化予防プログラムの一環として、医科歯科連携のさらなる強化が期待できる。

④関連領域とのグループ形成の有用性

X因子の同定には、網羅的解析手法に基づいた解析を必要とするため、情報工学分野との連携が必要となる。また、マウスにおけるDN病態の変化や得られた解析結果を、臨床に基づいて正確な解釈を得る必要があり、そのためには糖尿病・腎臓内科学分野との連携が必要となる。これらの関連領域との研究グループの形成により、研究のさらなる発展が見込める。

⑤今後の展望

歯周炎によって糸球体のX因子が亢進するメカニズムについて、バイオインフォマティクス分野との連携によってキーとなる因子を探索していく。

また、糸球体内のX因子発現亢進がDN病態に及ぼす影響について、糖尿病内科・腎臓内科学分野の研究者と連携を行い、基礎・臨床研究の両面から解明を行っていく。

将来的には、X因子を標的とした新たなDN病態分子基盤の解明やDN治療薬の開発、臨床的には歯周病合併DN患者の腎機能低下予測や歯科未受診DN患者の歯周病進行予測マーカーとしての応用につなげ、医科歯科連携のさらなる強化によって糖尿病性腎症重症化予防プログラムのより効果的な遂行に貢献したいと考えている。

希望する協力分野

糖尿病内科・腎臓内科学・情報工学分野

連絡先：〔電話〕092-642-6358

〔E-mail〕takanori.shinjo@dent.kyushu-u.ac.jp

3. アルカリフォスファターゼの硬組織結合制御による 新規歯周組織再生療法の開発

○長崎敦洋, 江草 宏

東北大学大学院歯学研究科／分子・再生歯科補綴学分野

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

セメント質および歯槽骨は歯牙の植立に不可欠な硬組織である。我々はこれまで、セメント質や歯槽骨の再生が、リン酸 (P_i : 石灰化促進) / ピロリン酸 (PP_i : 石灰化抑制) 代謝によって制御されていることを明らかにした。特に, PP_i から P_i を産生するアルカリフォスファターゼ (ALP) のアイソザイムの1つである“組織非特異的アルカリフォスファターゼ (TNAP)”の局所投与が、歯槽骨およびセメント質の再生を強力に促進することを明らかにした (Nagasaki et al., *J Dent Res.* 2020, 2021, 図)。

また, ALP は細菌由来病原因子であるリポ多糖を脱リン酸化する抗炎症作用を有し (Shingh et al., *Sci Rep.* 2020), さらに, 複数のアスパラギン酸 (Asp) を付加した TNAP (Asp TNAP) は陰性に帯電し, 陽性に帯電した硬組織に強力に結合することが明らかになっている (Nishioka et al., *Mol Genet Metab.* 2006)。そこで, 硬組織結合能を有し, 歯周組織再生能および抗炎症効果の両効果を有する Asp TNAP の作製を着想した。本研究の目的は, 新規 Asp TNAP による新たな歯周組織再生療法を開発することである。

②研究内容の斬新性

P_i/PP_i 代謝を利用した歯周組織再生療法は存在せず, 本研究戦略の新規性は極めて高く, 本タンパク質の構造決定から得られる成果には知的財産権が期待される。局所投与の効果をも高めるために, 帯電という極めて簡便な原理に着目した歯周組織再生研究は斬新かつ独自性が非常に高い。

③研究の発展性・進展性

本タンパク質は歯科領域のみならず骨疾患の治療を行う内分泌学や整形外科領域への応用が期待できる。

④関連領域とのグループ形成の有用性

構造および投与方法について, 生命・遺伝子工学分野とのグループ形成が必要不可欠である。また, 臨床への応用を鑑みた時, 早期から医療経済学や産学連携分野との連携が必要である。

希望する協力分野

生命工学, 遺伝子工学, 内分泌学, 整形外科学, 医療経済学, 産学連携分野

連絡先: [電話] 022-717-8363

[E-mail] atsuhiro.nagasaki.a5@tohoku.ac.jp

骨シアロタンパク欠損マウス

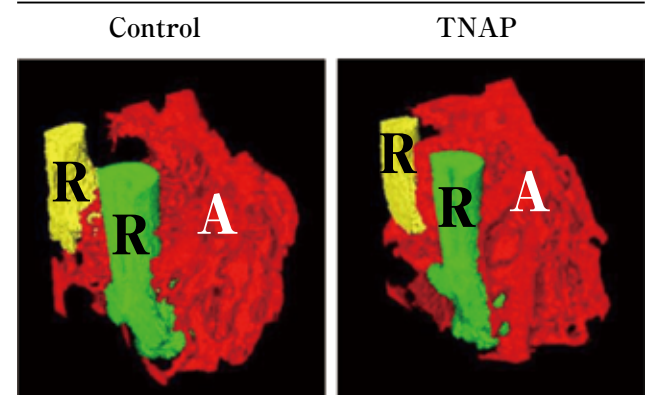


図 TNAP による骨組織再生の促進

A: 再生歯槽骨, R: 歯根
局所投与後 45 日の MicroCT 像。

(Nagasaki et al. *J Dent Res.* 2021)

4. 予知性の高い骨増生法の開発を目的とした 抗酸化物質エダラボンによる移植細胞の生存率向上と機能温存

○江口香里¹⁾, 秋葉陽介¹⁾, ゲエン=ヴァン=クアン²⁾,
工藤莉奈¹⁾, 高岡由梨那¹⁾, 魚島勝美²⁾

¹⁾新潟大学医歯学総合病院 冠・ブリッジ診療科,

²⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科 生体歯科補綴学分野

①研究の背景(これまでの実績を含む)と目的

歯科治療において、その質を高めるために顎骨欠損、吸収部位に対する骨増生が必要となることは珍しくない。細胞移植を伴う骨増生法は、移植細胞による骨形成を期待するものであるが、移植細胞の多くは移植直後の酸化ストレスにより、アポトーシスや機能不全に陥ると言われている。エダラボンは、フリーラジカルスカベンジャーおよび抗酸化物質として知られており、脳虚血疾患における活性酸素種(ROS)からの神経細胞保護に高い効果が報告されている。そこで、我々はエダラボンを細胞移植併用の骨増生法に応用することにより、骨増生部で生じるROSを除去して移植細胞のアポトーシスや機能不全を抑止できる可能性に着目した。これにより、移植細胞の長期生存および機能温存が可能となれば、治療期間の短縮や増生骨量の制御、増生骨の長期安定の獲得に寄与することが予想される。本研究の最終目的は、細胞移植を伴う骨増生において、移植部位の環境調整による予知性の高い骨増生法を開発することである。

②研究内容の斬新性

本研究は骨増生部位の細胞移植環境を改善することによって移植細胞の生存率を上げると共に生

存期間を延伸させ、これらの機能維持により骨形成を促進しようとする点で斬新性が高い。

③研究の発展性・進展性

エダラボンは人工生体材料、生理活性物質、細胞の機能亢進を目的とした他の因子などとの併用が可能で、既存の骨増生法との併用も可能である。本研究の成果は、各種歯科治療の適応症拡大や予知性の向上に大きく寄与するばかりではなく、移植を伴う医療分野での応用の可能性を秘めていることから発展性があり、社会的な貢献度は高いと思われる。

④関連領域とのグループ形成の有用性

細胞移植を伴う骨増生におけるエダラボンの作用機序の解明やエダラボンの応用方法を探索するにあたり、薬理学、口腔再生医学、生体材料学、歯科医用工学との異分野融合、グループ形成の有用性は高い。

希望する協力分野

薬理学, 口腔再生医学, 生体材料学, 歯科医用工学

連絡先: [電話] 025-227-2900

[E-mail] kaori-mic@dent.niigata-u.ac.jp

5. VR 技術を活用した歯科治療時の 全身的偶発症対応シミュレーションコースの開発

○岸本直隆, 瀬尾憲司

新潟大学大学院 医歯学総合研究科 歯科麻酔学分野

①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

超高齢社会を迎えたわが国では、歯科患者の多くが全身疾患を有しており、治療中にその急性増悪による全身的偶発症を引き起こす可能性がある。われわれは患者の急変に対応するための study group 「AneStem (アネステム)」を設立し、歯科医療従事者に対して偶発症対応シミュレーションコースを開催してきた。また同コースの教育効果を調査し、受講者の偶発症診断・治療スキルが向上することを報告しており (Eur J Dent Educ. 2018;22:e350-7.), さらにオンラインで受講可能な遠隔シミュレーションコースも開発した (J Dent Anesth Pain Med. 2021;21:179-81.). しかし対面および遠隔シミュレーションでは蕁麻疹やチアノーゼといった患者の病態表現に限界がある。したがって Virtual Reality (VR) 技術を活用することで、よりリアルな急変の状況を再現できると考えた。本研究の目的は VR 技術を活用した偶発症対応シミュレーションコースの開発とその教育効果を評価することである。

②研究内容の斬新性

われわれが既に関した遠隔シミュレーションコースでは、指導者は遠隔地より指導するが、受講者は臨床現場を模した環境下で偶発症の診断や治療を体験するため、歯科医院に集合してコースへ参加する。一方、VR 技術を活用すれば、各受講者が自宅からヘッドマウントディスプレイを使用して、仮想空間内の歯科医院に没入し、自身のアバターを介して学ぶことができる。また仮想空間内の患者は蕁麻疹、チアノーゼ、失禁、嘔吐、けいれんなど様々な臨床症状を呈することが可能で、

発生頻度が非常に低い偶発症であっても、その再現は容易である。このように VR 技術の導入によって完全に 3 密を避けつつ、リアルな環境下で学べるシステムの構築を目指す点が斬新性である。

③研究の発展性・進展性

VR 技術の導入で偶発症対応スキルが向上することが証明されれば、科学的に有用性が認められたコースとして広く普及する。ひいては急変時に適切に行動できる多数の歯科医療従事者を養成することとなり、歯科医療の安全性向上へつながる。また基盤となる VR 技術を応用すれば医師、薬剤師、看護師など患者に携わるあらゆる職種のスキルアップを図ることができ、日本の医学教育に対する発展性が期待される。

④関連領域とのグループ形成の有用性

われわれは歯科治療時の偶発症対応やその教育に関する専門家であるが、VR コンテンツ制作の経験はない。VR 制作に長けた情報工学を専門とする研究者とグループを形成すれば、われわれが作成したアナフィラキシー、過換気症候群、急性冠症候群などの偶発症シナリオを基に、両者の専門性を活かした質の高い教育コンテンツの開発が期待できる。

希望する協力分野

Virtual Reality (VR) コンテンツの制作に長けた情報工学の専門家

連絡先: [電話] 025-227-2972

[E-mail] kishimoto@dent.niigata-u.ac.jp

6. Additive Manufacturing による ジルコニアクラウンの臨床展開へ向けた色調再現法の確立

○三浦賞子, 藤澤政紀

明海大学歯学部 機能保存回復学講座 クラウンブリッジ補綴学分野

①研究の背景(これまでの実績を含む)と目的

歯科医療におけるデジタル化の進展で, 印象採得から切削加工法を応用した補綴装置製作までのデジタルワークフローが確立され, 日常臨床において一般的となりつつある。しかしながら, 補綴装置の色調選択や色調再現については, 未だアナログ技術が主流である。

Additive Manufacturing (AM; 付加製造) は, 材料の無駄を省き必要最小限の材料で高精度の補綴装置を製作できることが最大の特徴である。我々はこれまでに, 付加造形時の造形方向の違いがジルコニアの機械的性質(曲げ強さ, ヤング率, ポアソン比, ビッカース硬さ, 破壊靱性)に与える影響について検討し, 曲げ強さについては, 造形方向の影響を受けることが明らかとなった。したがって, 臨床応用時にはその影響が最小となるような設計の構築が求められる。一方で, AMで応用されるジルコニア材料は白色であるため, 審美性に優れているとはいえない。また, 歯冠色を付与するための色調再現法については明らかになっていない。

本研究では, AMにより製作したジルコニアクラウンの色調再現法について確立し, 実用化を目指すことを目的とする。

②研究内容の斬新性

AMで使用するジルコニアはペースト状の白色

であり, 歯冠色を得るためのカラーリング法などは確立されていない。またそれに関する研究報告も見当たらない。

③研究の発展性・進展性

AMを応用したジルコニアクラウンの色調再現法が確立すれば, その臨床応用の可能性が高まると考えられる。将来的には Computer color matching を応用することで最適な色調の配合計算や色調管理が可能になると考えられ, 技工操作や臨床工程の効率化・可視化, データの共有・統合・再活用を可能にする技術としてさらなる進展が期待される。

④関連領域とのグループ形成の有用性

本研究を遂行するためには歯科領域だけではなく, コンピュータ技術, 光学技術や色彩技術に特化した工学系分野との連携は必須である。これらの領域と密に連携することにより, 生体親和性や審美性に優れ, 材料効率の良い AM 補綴装置の製作が可能になると考えられる。

希望する協力分野

工学系分

連絡先: [電話] 049-279-2751

[E-mail] miuras@dent.meikai.ac.jp

7. AIを活用した暑熱環境下での脱水予測システムの開発 —口腔水分量や舌状態、顔色などの身体データ情報による最適指標の探索—

○田邊 元, 隅田由香, 上野俊明

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

スポーツ現場では、脱水症状を検知し、未然に防ぐことが最良なパフォーマンス発揮や安全確保の観点から重要であり、脱水症状の非侵襲的かつ簡便なモニタリング法が求められている。我々は、トップアスリートの協力下に暑熱環境下での口腔内の生理的・生化学的変動を捉えるべく、口腔内水分計を用いたフィールド調査を実施した。その結果、口腔内水分量のモニタリングによって脱水症状を予測できる可能性を見出した（Tanabeら、Chemosensors 2021）が、予測精度に改善の余地があった。そこで、口腔内水分量に加え、唾液流量、唾液の粘性、脱水時に特異的に減少する細菌・ウイルス、舌状態や口腔写真、顔面写真（顔色）、熱分布データや血流データといった口腔顎顔面情報が、脱水の指標としての妥当性を有するか検証することとした。また、各種身体所見を多角的に集積し、AIを活用することで脱水の指標としての最適な組合せを探る総合的な研究を企図した。

②研究内容の斬新性

既存の脱水の指標には侵襲性、時間・場所的制限、コスト、簡便さ、精度において課題がある。口腔顎顔面領域は、比較的アクセスが容易で、侵襲性

やコストの面から現場実測での親和性が高い指標である。これに全身の多角的所見を組み合わせ、最適指標を確立することができれば、ライフサイエンスにおける歯科医学の新たな価値創出となる。

③研究の発展性・進展性

初動が重要となる救急の現場での活用、学校保健室や救護所への配置、幼児や高齢者などの生活弱者の脱水の検知・予防への応用も想定でき、社会への波及効果は大きい。

④関連領域とのグループ形成の有用性

医学専門家による脱水症状の診断・評価が必要である。研究遂行上 AI 専門家との連携が不可欠である。スポーツ科学者や競技団体のコーチ、体育教諭や養護教諭、救急救命士との協力のもとフィードバックをうけることで、社会実装へ大きく前進できる。

希望する協力分野

医学分野（内科、救急医学）、AI 分野、スポーツサイエンス分野、学校安全分野

連絡先：〔電話〕 03-5803-5867

〔E-mail〕 genspmd@tmd.ac.jp

8. SARS-CoV-2 へのエタノール, 次亜塩素酸水, オゾン水の 不活化効果検証と不活化メカニズム解明

—WHO (世界保健機関) と CDC (米国疾病対策センター) の手指衛生ガイドラインへの提言—

○王 宝禮¹⁾, 金子明寛²⁾, 松野智宣³⁾

¹⁾ 大阪歯科大学歯学部

²⁾ 池上総合病院 歯科口腔外科

³⁾ 日本歯科大学附属病院 口腔外科

①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

2020年1月に、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19: coronavirus disease 2019) の国内初の感染症患者が報告された。COVID-19の感染経路は主に飛沫感染と接触感染であり、そのふたつの経路を遮断することが予防の基本になる。これらの感染予防は、飛沫感染に対してマスクの着用、接触感染に対して手指衛生が基本である。

さて、COVID-19のウイルスであるSARS-CoV-2 (Severe acute respiratory syndrome coronavirus 2) はウイルス表面をエンベロープ (脂肪の膜) で包まれていて、エンベロープはアルコール消毒薬によって破壊され感染力が失われる。そのため、COVID-19が拡大するなかで、手指衛生で消毒用アルコール (エタノール) が急速に消費され、街の薬局からアルコール消毒液が消えた。このような背景から私達の研究プロジェクトはエタノールに変わる不活化剤を探求する中で以下の4点を明らかにできた。

- ① SARS-CoV-2に対して70%エタノール (EtOH), 34ppm 次亜塩素酸水 (SAEW), 3-10ppm オゾン水 (OW) が不活化を確認した。
- ② SAEW と OW は有機物によってウイルス不活化活性が減弱するために、実臨床では流水下が有効である。
- ③ これまでの研究報告から、手指衛生において、

従来からの石鹼 (ハンドソープ) や水、擦式 EtOH 法 (15 ~ 20 秒) を用いなくても、流水下で 34 ~ 35 ppm SAEW あるいは 4 ppm OW で 30 秒以上が有効であると考えられた。

- ④ 但し、EtOH の代替としては、安全性が確立されている「手指消毒の医療機器認可」のある生成機を用いた SAEW と OW が「効果的手洗い」といえる。

上記の発見を、現在私達は WHO (世界保健機関) や CDC (米国疾病予防管理センター) の手指衛生ガイドライン委員会に提言している。

参考文献

- Yohei Takeda, Hourei Oh et al. Complete republication: Inactivation Activities of Ozonated Water, Slightly Acidic Electrolyzed Water and Ethanol against SARS-CoV-2. *Molecules* 26 (18), 5465, 2021.
- 王 宝禮. 新型コロナウイルスパンデミックに対する有効な手指衛生消毒剤のエビデンス. —エタノール, 次亜塩素酸水, オゾン水—. *日歯医師会誌* 74, 929-937, 2022.

希望する協力分野

機能水関連学会・次亜塩素酸水企業・オゾン水企業
連絡先: [電話] 072-864-3171

[E-mail] ohoh@cc.osaka-dent.ac.jp

会務報告

日本歯科医学会

小林 隆太郎

(日本歯科医学会総務理事)

令和3年度の本学会会務運営は、事業計画に基づき、幅広い諸施策を推進するとともに活発な事業展開を行った。

○医療問題の検討

歯科医療協議会（座長：小林隆太郎）は、学術的根拠に基づき社会保険医療の在り方を提言し、適切な診療報酬について検討を行うことを設置目的としている。

令和4年度診療報酬改定では、日本歯科医学会分科会からの84件の医療技術評価提案書を提出し、中医協総会にて、そのうちの17項目が診療報酬改定において対応する優先度が高い技術と評価された。

エビデンスレベルの高い提案書の作成・提出は、国民の公的医療保険のもとでの健康の維持・増進の手段として重要な役割を果たすものである。

○歯科診療ガイドラインライブラリーの整備

専門分科会および認定分科会が作成した歯科分野の診療ガイドラインを歯科診療の現場で広く活用できるよう、平成21年に「日本歯科医学会・歯科診療ガイドラインライブラリー」を本学会ホームページ上に設置した。令和4年1月末現在、47編の「診療ガイドライン」ならびに57編の「その他の指針等」が掲載されている。

また、歯科診療ガイドラインライブラリー協議会（座長：平田創一郎）では次年度の研修会を企画し、特定非営利活動法人日本コクランセンターの協力を得て、令和4年5月14日（土）に「系統的レビューワークショップ」（ランダム化比較試験のRisk of Biasについて）を開催する予定。

○歯科医療技術革新の推進

歯科医療技術革新推進協議会（座長：興地隆史）は、「令和4年版新歯科医療機器・歯科医療技術産業ビジョン」の策定に向けて検討を進めている。

また、令和4年版新歯科医療機器・歯科医療技術産業ビジョン作成WG（座長：宮崎真至）を設置して、本学会専門・認定分科会学術大会・総会の抄録集の中から、歯科医療技術として大きく展開できるものを委員各位が選定し、本協議会としてとりまとめを行っている。

○会員の顕彰

本学会最高の顕彰である日本歯科医学会会長賞の授賞式が第107回評議員会（令和4年2月18日（金）開催）において執り行われ、5名の方が受賞された。栄えある受賞者は次のとおり。

（研究部門）

田上 順次（東京医科歯科大学名誉教授）

米山 武義（静岡県歯科医師会会員）

（教育部門）

荒木 孝二（東京医科歯科大学名誉教授）

矢島 安朝（東京歯科大学名誉教授）

（地域歯科医療部門）

中村 譲治（福岡県歯科医師会会員）

○日本歯科医学会誌の発行

本学会の機関誌である「日本歯科医学会誌」第41巻は、日本歯科医学会誌編集委員会（委員長：松野智宣）で、編集作業を行い、令和4年3月に発行した。本誌は第34巻（平成26年度）よりオンライン化へ完全移行され、本学会ホームページ上で利用者に無料公開している。

○The Japanese Dental Science Review の発行

本学会の英文機関誌「The Japanese Dental Science Review」は、インパクトファクター（IF）を取得したレビュー誌として国際的に活躍する研究者のレビューを掲載している。

令和元年から出版形態を変更し、年1巻のオンラインジャーナルとして、利用者にオンライン上で随時、レビューを無料公開している。

英文雑誌編集委員会（委員長：土持 眞）では、Vol.57（令和3年11月）を発行した。

なお、Clarivate Analytics社より2021年6月に2020 JOURNAL IMPACT FACTOR が発表され、JDSRの初回IF値は5.039（歯科分野で11位／91誌）であった。

○歯科学術用語の検討

「文部省学術用語集歯学編増訂版」を平成4年11月20日付で、さらに平成8年度には補足的にまとめた資料編(補遺集)を発行。この増訂版について、歯科学術用語委員会において削除、訂正、追加の用語を集積し、また補遺集との整理・整合を図り、そのデータを基に、「日本歯科医学会学術用語集(日本歯科医学会編)」として平成20年11月に医歯薬出版株式会社が発行し、第2版を平成30年12月に発行している。

現在、利用者の利便性を高めていくために、学術用語集WEB版の作成について検討している。

また、厚生労働省大臣官房統計情報部長より協力要請のあったICD-11への改訂に向けた対応については、平成30年6月にICD-11(国際疾病分類)の英語原稿(案)が公表されたことに伴い、本委員会で分担し、日本歯科医学会学術用語集をもとに和訳作業を行った。改訂に係る概要については、厚生労働省国際分類情報管理室が集大成版「ICD-11改訂と日本」を発行している。歯科学術用語委員会がICD-10以前から検討を行っている日本口腔科学会と協力体制をとりつつ作業にあたっている。

○学術研究の推進および実施

本学会事業の大きな柱である学術研究事業は、学術研究委員会(委員長:上條竜太郎)で、第37回「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」(令和4年2月15日開催)の発表演題(8題)の選考、企画および当日運営、優秀発表賞の選考、プロジェクト研究事業について協議を行った。

「優秀発表賞」は第30回(平成26年度)の“集い”より新設したもので、斬新性・広範性・進展性・現実性・共同研究性等の観点から発表内容を総合的に評価し、特に優秀な発表を行った4名に授賞した。(P.37参照)。

プロジェクト研究事業は、事業計画の「重点計画-歯科医療への学術的根拠の提供」に基づき、歯科医学、医術の進歩発達を歯科医療現場に迅速に導入することを目的として平成19年度に新設された公募型の競争的資金である。学術的かつ高度な研究結果を診療報酬改定時の新技術導入の一助となる研究課題や歯科医療を変えるcutting-edge研究を選考対象とするもので、分科会より申請のあった研究課題から慎重審議の上、プロジェクト研究課題(令和3年度)を選考した。

また、前述の公募型研究とは異なり、学会執行部が主体

令和3年度日本歯科医学会会長賞



令和3年度日本歯科医学会会長賞受賞者と本学会役員及び評議員会正・副議長
(上段左から) 田上順次氏, 米山武義氏, 荒木孝二氏, 矢島安朝氏, 中村讓治氏
(下段左から) 小林総務理事, 築瀬副議長, 宇尾議長, 住友会長, 松村副会長, 川口副会長

性をもって行う研究テーマについて、重点研究委員会（委員長：天野敦雄）で検討している。

日本歯科医学会の最重要課題である「2040年への歯科イノベーションロードマップ」を、さまざまな広報手段を駆使し、本学会から社会に効果的に発出する方法を引き続き検討し、また、2025年大阪・関西万国博覧会出展に向けて、「2040年への歯科イノベーションロードマップ」を実装させた出展内容の検討を併せて行っている。

○歯科医学研究等における研究倫理および

利益相反 (conflict of interest : COI) 状態の適切な管理に向けた対応

歯科医学研究等の円滑な実施にあたっては、研究対象者等の尊厳や人権等を守るために、研究倫理に関する指針等の策定と遵守、ならびに当該指針等に基づき研究倫理審査委員会の設置が求められる。また、研究の公正性、信頼性の確保の観点から、研究者の利益相反について、その透明性を確保し適切に管理するための利益相反指針の策定と遵守、ならびに当該指針に基づき利益相反指針の設置が求められる。

本学会研究倫理審査委員会（委員長：清水典佳）および利益相反委員会（委員長：関根秀志）で申請案件を審査し、会員の歯科医学研究等に係る研究倫理および利益相反状態を適切に管理するための対応を図るとともに、所属分科会に対しても必要な対応を要請している。

○学術講演会の実施

本学会と都道府県歯科医師会の共催形式による学術講演会は平成26年度をもって発展的解消し、平成27年度以降は、歯科医学に係る学術研究団体との連携のもとに、各種の学術上の問題をとりえたフォーラムやシンポジウムなどを積極的に開催している。

現在、学術講演委員会（委員長：本田和也）にて新企画案を検討中である。

○働き方改革および歯科医療の新機軸の検討

働き方改革について、日本歯科医師会が「歯科医師の勤務実態等の調査研究」を取りまとめて公表した。また、日本歯科専門医機構の設立により、新歯科専門医制度の下での増加が予想される歯科専門医、加えて、現に増加している女性歯科医師の活躍の場として、多機能の歯科診療所（いわゆる1.5次歯科医療機関）が期待されている。

新歯科医療提供検討委員会（委員長：立浪康晴）において、前執行部の本委員会の答申を基として、1.5次歯科医療機関（診療所）について、具体的な形に進める手段の検討

討、モデルケースの構築、女性歯科医師と歯科専門医の活躍の場という可能性について、多面的に検討している。

○歯科におけるコンプライアンスについて

コンプライアンス調査・普及委員会（委員長：真鍋厚史）は、社会に発出されているあらゆるコンプライアンスに関する情報を俯瞰しつつ、医療分野のコンプライアンス情報をまとめることとし、特に歯科においてはこれまで問題となっている事例は網羅、整理し、とりわけ卒前教育に資する大、中、小項目からなるカリキュラムを作成すること、また、その成果は分科会からや公開フォーラムなどで意見を聴取して活用性の高いものに仕上げ、社会で低いと言われる歯科界のコンプライアンスレベルを高めることを目的に設置された。

○「口腔健康管理」および「オーラルフレイル」の定義定着について

日本歯科医師会が歯科医療・歯科口腔保健の展開の一環として推進している「口腔健康管理」および「オーラルフレイル」について、用語が定着していないことなどから、国や地方公共団体において用語の使用を控える動きが散見されるとして、日本歯科医師会より本学会に対し、それらの定義定着、活性化に向けた対応の検討について依頼があった。

それを受け、本学会は「口腔健康管理」および「オーラルフレイル」の定義定着に関する協議会（座長：小林隆太郎）を設置し、検討を行っている。

○第24回日本歯科医学会学術大会の準備・実施

第24回日本歯科医学会学術大会の準備は、住友雅人会頭、松村英雄準備委員長および小林隆太郎事務局長のもと、従来の会場参加型に加えて一部のセッション（ポスター、テーブルクリニック）にオンライン参加するハイブリッド形式での開催の方向で進めてきたが、新型コロナウイルス感染症の世界的規模での拡大により、パシフィコ横浜を使用しての通常の大会形式での開催ではなく、原則無観客とし、パシフィコ横浜の一部会場を利用したオンライン会議システムを使用するかたちで開催することを決定した。

オンラインでの開催に伴い、会頭招宴会の実施は見送ることとなったが、開会式、開会講演、公開フォーラム、公開講演、公募から採択された講演、シンポジウム、国際セッション、e-テーブルクリニック、e-ポスターセッションのすべてのプログラムを開催し、大会期間後には、約1カ月間のオンデマンド配信も行い、最終的な参加登録者数は20,298名であった。

《第24回日本歯科医学会学術大会 計画概要》

■名 称

(和文) 第24回日本歯科医学会学術大会
 (英文) The 24th Scientific Meeting of the Japanese
 Association for Dental Science

■メインテーマ

(和文) 逆転の発想 歯科界2040年への挑戦
 (英文) A Brand New Take : Dentistry's Challenge in
 the Lead-Up to 2040

■主 催

日本歯科医師会, 日本歯科医学会

■後 援

文部科学省, 厚生労働省, 日本歯科医学会連合,
 日本学術会議, 神奈川県, 横浜市,
 国際歯科研究学会日本部会, 日本歯学系学会協議会

■協 力

関東地区歯科医師会・東京都歯科医師会

■会 期

LIVE 配信期間
 2021年9月23日(木), 24日(金), 25日(土)
 オンデマンド配信期間
 2021年9月26日(日) ~ 10月31日(日) 17時

■会 場

パシフィコ横浜
 (講演, シンポジウム等を現地からオンライン配信)
 〒220-0021 神奈川県横浜市西区みなとみらい1-1-1
 TEL : 045-221-2155

■行 事

- 開会式
- 開会講演
- 公開講演
- 講演
- シンポジウム
- 国際セッション
- e-テーブルクリニック
- e-ポスターセッション
- 公開フォーラム

■共催行事

関東地区歯科医師会学術大会
 2021年日本口腔衛生学会特別学術大会
 日本歯科放射線学会第2回秋季学術大会
 第49回日本歯科医史学会学術大会
 日本歯科医療管理学会特別大会
 第41回日本歯科薬物療法学会学術大会
 第38回日本障害者歯科学会学術大会
 第40回日本接着歯学会学術大会
 第42回日本歯内療法学会学術大会
 日本スポーツ歯科医学会第32回学術大会
 第39回日本歯科東洋医学会学術大会
 第31回日本磁気歯科学会学術大会
 第21回日本外傷歯学会学術大会

■併催行事

日本デンタルショー 2021



1. 学術大会・総会の開催について

第63回歯科基礎医学会学術大会は、神奈川県立歯科大学を主管校として2021年10月9日～11日（オンデマンド配信期間：2021年10月11日～17日）の期間でWeb開催された。メインテーマは「R/Evolution 歯科基礎医学，再生から進化へ」である。大会長は松尾雅斗教授（神奈川県立歯科大学口腔解剖学分野），準備委員長は高橋俊介教授（神奈川県立歯科大学歯科薬理学分野）である。ロッテ基金特別講演1では、高井研先生（国立研究開発法人 海洋研究開発機構 超先鋭研究開発部門）から「歯科基礎医学者の皆様に聞いて頂きたい極限環境生物や地球外生命の面白さ」という題名で、ロッテ基金特別講演2では内藤裕二先生（京都府立医科大学大学院医学研究科生体免疫栄養学講座）から「腸内微生物叢最前線 with/post コロナ時代の生命科学」という題名で、それぞれ最新の話をご提供いただいた。その他歯科基礎アカデミーシンポジウム，日韓シンポジウム，先端歯学国際教育研究ネットワーク共催シンポジウム，日本歯科理工学会共催イノベーションロードマップシンポジウム，日本唾液腺学会共催シンポジウム，日本骨形態計測学会共催シンポジウム，3つのメインシンポジウム，6のアップデートシンポジウム，教育講演，市民公開講座が開催された。一般演題（e-ポスター）も232題が行われた。

2. 学会活動について

2021年度歯科基礎医学会の主な事業は、①学術大会ならびに総会の開催，②歯科基礎医学会機関誌（Journal Oral Biosciences）の刊行，③歯科基礎医学会学会賞，歯科基礎医学会ライオン学術賞，歯科基礎医学会学会奨励賞，歯科基礎医学会ベストペーパー賞，歯科基礎医学会モリタ優秀発表賞の選考および授与，④韓国KBDSSAとの学術交流事業などである。なお学会機関誌 Journal of Oral Biosciences は61巻1号からPubMedに掲載されている。

本年度のトピックス

本学会では日本歯科医学会が「健康寿命の延伸に貢献する歯科イノベーションロードマップ」を作成して社会における歯科のプレゼンスを示すことを提唱したことを受け、1. 口腔・全身の健康増進を目指す口腔マイクロバイオームの解明，2. 健康長寿社会を目指す口腔機能低下の予防と回復法の確立，3. 早期口腔癌の発生・進展メカニズムと診断・治療法の確立，4. 新たな再生医療・バイオマテリアルの開発の4つのテーマを選定し、2019年度より学術大会においてシンポジウムを開催している。

2021年度は第63回歯科基礎医学会学術大会において、「4. 新たな再生医療・バイオマテリアルの開発」をテーマに日本歯科理工学会と合同でシンポジウムを開催した。埜隆夫教授（東京医科歯科大学生体材料工学研究所金属材料学分野）から「再生医療における金属材料の役割と課題」，岸田晶夫教授（東京医科歯科大学生体工学研究所物質医工学分野）からは、「新しいバイオマテリアル：脱細胞化組織の可能性」，江草宏教授（東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野）からは、「次世代の再生補綴歯科治療に向けたイノベーションロードマップ」，美島健二先生（昭和大学歯学部口腔病態診断科学口腔病理学部門）からは、「唾液腺3次元培養法の開発」というタイトルでそれぞれご講演いただいた。

次年度は「2. 健康長寿社会を目指す口腔機能低下の予防と回復法の確立」をテーマにシンポジウムの開催を予定している。

（文責：二藤 彰／総務委員会委員長）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9
駒込TSビル（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891，FAX：03-3947-8341

【会員数】1,968名（2021年11月30日現在）

【設立年】1959年（昭和34年）

【機関誌】「Journal of Oral Biosciences」を年3回発行

特定非営利活動法人 日本歯科保存学会

理事長 石井 信之



<http://www.hozon.or.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

春季学術大会（第154回）は、6月10日～11日に川商ホール（鹿児島市民文化ホール）で西谷佳浩 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面再建学講座歯科保存学分野教授を大会長として開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、前大会と同様に「Web開催」で6月10日～30日に開催された。「シンポジウム1」「シンポジウム2」「教育講演」「学会主導型プログラム」等のプログラムは、大会会期中にオンデマンド方式で視聴できるようにした。特に「教育講演」は41講演が開催され、Web開催の特性が活かされる形となった。また、「研究発表（ポスター）」はEポスターとしてデータ掲載した。

秋季学術大会（第155回）は、大会長の野村由一郎 新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔健康科学講座う蝕学分野教授により、春季学術大会と同様に「Web開催」（オンデマンド方式）で10月28日～11月17日に開催された。「特別講演」「基調講演」「シンポジウムI」「シンポジウムII」「シンポジウムIII」の他に、歯科衛生士との連携および認定歯科衛生士制度推進の観点から「歯科衛生士シンポジウム：う蝕予防管理と歯科衛生士の和み」が開催され、歯科衛生士発表（ポスター）を新設した。

2. 学会活動について

保存修復・歯内療法・歯周治療の三領域の連携のもと、歯の保存を通じて人々の健康長寿を支えることを目標として、学術研究活動、教育活動、医療・予防活動、国際活動、関連団体との連携などの取り組みを重ねている。すなわち、機関誌6冊の刊行、国際学術交流（大韓歯科保存学会、台湾牙體復形学会、トルコ歯科保存学会など）、う蝕治療ガイドライン作成、指導医・専門医・認定医の養成、教育ガイドラインの策定、学術用語集の編纂などを、コロナ禍で可能な方法で行った。また、例年、社会貢献活動として市民公開フォーラムを年2回開催しているが、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み開催方法を検討している。

合格者が誕生した。今後も日本歯科衛生士会との連携によって口腔疾病構造の変化に対応する歯科医療体制の礎としたい。さらに、本年秋季学術大会（155回）より、歯科衛生士シンポジウムや歯科衛生士発表が設けられ、多職種との連携プログラム拡充が実施され、今後も関連学会と共に魅力ある学会プログラムを通じて歯科保存学の普及・周知を目指している。

本学会機関誌は年間6冊の刊行を継続してきたが、本年12月に英文雑誌の刊行を開始し、初の英文誌となる「Operative Dentistry, Endodontology and Periodontology」（略称：ODEP）1巻1号が発行された。

本学会は、関連学会（日本歯内療法学会、日本接着歯学会、日本レーザー歯学会、日本歯科審美学会）と連携協定を締結し、歯科保存専門医（仮称）の設立へ向け、日本歯科専門医機構との交渉を進めている。これまでに13回の意見交換会を重ね、本年12月に日本歯科専門医機構への申請許可が得られ、歯科保存専門医実現に向けて大きな一歩を踏み出すことができた。

（文責：石井 信之）

本年度のトピックス

本学会は、「口腔疾病構造の変化に対応する新しい歯科保存治療の推進」をテーマに積極的に学術活動を継続している。本テーマの社会活動を具現化するためには、超高齢社会における歯科医療の対応が必須であり、本年度は歯科保存学関連学会や多職種との連携を深めることに注力した。日本歯科衛生士会との連携による認定歯科衛生士（認定分野B：う蝕予防管理）の審査を開始し、昨年2020年度は5名の合格者であったが、本年2021年度は103名の

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】 4,591名（2021年11月30日現在）

【設立年】 1955年（昭和30年）

【機関誌】 和文誌「日本歯科保存学雑誌」第64巻2～5号、英文誌「Operative Dentistry, Endodontology and Periodontology」第1巻1号を発行（電子ジャーナル）春季および秋季学術大会抄録はHPに掲載

【認定医】 584名（2021年11月現在）

【専門医】 745名（うち指導医280名を含む。2021年11月現在）

公益社団法人 日本補綴歯科学会

理事長 馬場 一美



<http://www.hotetsu.com/>

1. 学術大会・総会の開催について

第130回記念学術大会は2021年6月18日～6月20日に、水口俊介教授（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野）を大会長として開催した。本学術大会の参加者総数は、2,561名であった。メインテーマを「食力向上による健康寿命の延伸—補綴歯科の力を示す—」とし、海外特別講演1セッション、メインシンポジウム2セッション、シンポジウム10セッション、医療問題検討委員会連携企画1セッション、臨床リレーセッション2セッション、歯科医療安全対策推進セッション1セッション、歯科専門医機構 理事長講演1セッション、専門医研修会1セッションを実施した。また課題口演9題（コンペティション）、ポスター151題が発表された。本年度の学術大会は、当初は神奈川県民ホールにて開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、誌上ならびにWebにて開催した。

本会は事務局を港区に置き、全国に9支部を有する。2021年度は、各支部が支部学術大会と総会を、誌上、Web、あるいは対面との併催にて開催した。

2. 学会活動について

本会は歯科補綴学の専門学会として国民の健康・口腔保健の向上のための国民、行政、学術団体への情報発信、提言、ならびに歯科医学・歯科医療の発展、向上に資する公益社団法人日本歯科医師会、日本歯科学会、関連学会への情報発信、提言を、積極的、効果的に行うことを目標としている。これらの基盤となる歯科補綴学、補綴歯科医療の発展、向上に向けて、学術活動、教育活動、国際学術交流の更なる充実、活性化、ならびに学会運営の効率化などを図っている。出版では、英文誌 Journal of Prosthodontic Research がインパクトファクター4.642を獲得した。また、国際学術活動として、世界各国の補綴関連学会と活発に交流を行っている。社会貢献活動としては、市民フォーラムを開催し、補綴歯科治療の啓発活動を行っている。

本年度のトピックス

1. 老年精神医学会との連携

超高齢社会における補綴歯科治療の貢献を目指して、（公社）日本老年精神医学会と「認知機能の口腔機能との相関」について医科歯科連携研究を推進している。その一環として、医師歯科医師の相互理解を深め、新たなリサーチクエストを探索することを目的とした双方向アンケートによる質的研究を実施した。

2. 専門医制度

本会専門医制度が（一社）日本歯科専門医機構によって認定されること、つまり広告可能な補綴歯科専門医制度の実現を目指し、制度設計と認定・研修要件について検討し、2022年4月より新たな専門医制度へ移行することとした。

3. Journal of Prosthodontic Research (JPR)

本会英文誌 JPR は、本年度4.642のインパクトファクターを獲得し、歯科分野のジャーナルにおける上位25%の地位（Q1）を5年連続で維持した。本会のグローバルなプレゼンス向上と国際的な学術プロモーションに貢献するため、2021年から完全なオープンジャーナルとして新たなスタートをきった。

4. 日本臨床歯科学会 (SJCD) との連携

インターディシプリナリーアプローチを基盤に歯科臨床を展開する SJCD との協定に基づく学術連携を予定しており、両学会にとって有益な関係の構築を目指す。第一歩として、第131回日本補綴歯科学会学術大会（大阪）で共催シンポジウムを開催予定である。

（文責：馬場 一美）

《問い合わせ先・事務局》

〒105-0014 東京都港区芝2-29-11 高浦ビル4階

TEL：03-6722-6090, FAX：03-6722-6096

【会員数】6,768名（2021年9月30日現在）

【設立年】1933年（昭和8年）

【機関誌】英文誌「Journal of Prosthodontic Research」を年4回、和英混交誌「日本補綴歯科学会誌」を学会特別号（抄録集）を加えて年5回発行

【認定医・専門医など】専門医1,187名（うち指導医661名）、認定研修機関は103か所が認定されている（2021年9月30日現在）

公益社団法人 日本口腔外科学会

理事長 桐田 忠昭



<https://www.jsoms.or.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第66回総会・学術大会は、原田浩之教授（東京医科歯科大学）を大会長として、新型コロナウイルス感染症拡大防止策を可能な限り講じた上で、幕張メッセ国際会議場に於いてハイブリッド方式（現地開催およびライブ配信の併用）で、特別講演、シンポジウム等は同会場からのライブ配信、一般口演、ポスター発表等についてはオンデマンド配信、さらにライブ配信を録画しアーカイブ化したものを配信する形式で2021年11月12日～14日に開催された。大会のテーマは「口腔外科学の現在までの進歩・未来の進歩を考える」であり、演題数は723演題、参加者は5,338名で特に正会員の参加者は4,845名と過去最高を記録した。

この学術大会においては、テーマに沿って、海外招聘講演、特別講演、教育講演等に加え、シンポジウム12題、市民公開講座等を開催した。ハイブリッド方式での利点として現地参加、また、現地に行かなくても参加できることで、個々のプログラムの視聴者数から、職務の都合等で参加が難しい会員が多数参加されたものと考えている。なお、次の第67回総会・学術大会は2022年11月4日～6日に幕張メッセで開催予定となっている。

2. 学会活動について

COVID-19防止のため、例年春と夏に開催している教育研修会が延期となっていたが、本年2月よりWeb開催にて実施している。全国6支部会においては、支部学術集会和歯科臨床医リフレッシュセミナーを例年開催しているが、同様の理由によりいったん開催延期としていたが、Web開催に切り替えて開催している。専門医制度では、認定医234名、専門医59名、指導医47名が新たに資格認定された。

国際口腔顎顔面外科学会、アジア口腔顎顔面外科学会における活動や各国学術団体との交流をこれまで積極的に行っているが、COVID-19の影響を受けWeb主体による交流となっている。

（文責：外木 守雄 / 第67回大会長）

本年度のトピックス

歯科診療の中でも口腔外科は唾液を含むエアロゾルが発生する手術を伴うため、2020年はCovid-19の影響を受け、日本全国の各病院で外科手術の中止・延期を余儀なくされた。学会員も手術の適否について混乱していたので、何らかの指針を学会員に発出しようということになり、東京大学医学部口腔顎顔面外科・矯正歯科の星 和人教授を委員長として新型コロナウイルス感染症対策検討小委員会を発

足させ、2021年1月15日に「新型コロナウイルス感染症流行下における口腔外科手術に関する指針」（第1版）を学会ホームページに公開した。この指針では7つのクリニカル・クエスチョンを掲げて方針を示した。例えば、「COVID-19感染後の患者に対しては、いつから院内感染を懸念せずに口腔外科手術を実施することができるか?」、「口腔外科手術における直前のポビドンヨードによる洗口は、COVID-19感染リスク低減に有効か?」などがある。

また、この指針を海外にも知ってもらうため、「Guide for surgical procedures in oral and maxillofacial areas during coronavirus disease 2019 pandemic」のタイトルで本学会の国際機関誌であるJournal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology (Available online 28 October 2021) に発表した。

医科の外科系の学会と同じく、本学会も後進の人材確保が大きな課題である。そこで数年前から若手口腔外科医委員会を立ち上げて、若手口腔外科医の交流会を企画し、若手同士の情報交換とお互いを刺激し合う場を提供している。そのような中で歯学部学生や研修歯科医に口腔外科の魅力を知らせ口腔外科専門医を目指してもらえるようにプロモーションビデオを作製した。会員なら誰でもダウンロードができる。このビデオを利用して、学生にさらに国民にもアピールしたいと考えている。

コロナ禍の中で、都会と地方との医療情報格差も浮き彫りとなった。地方の口腔外科医の意見を吸い上げ、学会の問題として対応するために病院歯科口腔外科医療連携委員会を立ち上げて活動を始めた。

（文責：池邊 哲郎 / 常任理事、広報・IT委員会委員長）

《問い合わせ先・事務局》

〒108-0014 東京都港区芝5-27-1 三田SSビル3F
TEL：03-5422-7731, FAX：03-6381-7471

【会員数】11,073名（2021年8月31日現在、正会員）

【設立年】1933年（昭和8年）

【機関誌】和文誌「日本口腔外科学会雑誌」年13回、
ニューズレターを年2回発行、英文誌「Journal of
Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and
Pathology」年4回発行

【認定医・専門医など】認定医2,806名、専門医2,158名、
指導医989名、研修施設311施設、准研修施設298
施設（2021年10月1日現在）

公益社団法人 日本矯正歯科学会

理事長 森山 啓司



<http://www.jos.gr.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

2021年11月3日～5日にかけて第80回日本矯正歯科学会学術大会 & 第5回国際会議がパシフィコ横浜を会場とし、オンラインを併用したハイブリッド形式にて開催された。横 宏太郎大会長(昭和大学歯学部歯科矯正学講座 教授)のもと、「望まれる矯正歯科の未来」をメインテーマに、教育講演、特別講演、シンポジウム、ラウンド・テーブルディスカッション、臨床セミナー、スタッフ & ドクターセミナー、学術展示/症例展示、生涯研修セミナー、サテライトセミナーなど多彩なプログラムが実施された。第5回国際会議記念シンポジウムでは、近年社会的関心が高まる「アライナー矯正」についてグローバルな視点で意見交換が行われ、JOSフォーラムでは、一般社団法人日本歯科専門医機構の今井 裕 理事長をお招きし、歯科専門医制度の動向についてご講演いただき、矯正歯科の明るい未来を創造していくためのディスカッションの場として、有意義な記念大会となった。

2. 学会活動について

医療・社会面では、2018年4月に設立された、(一社)日本歯科専門医機構の指導のもと、関係各所と緊密に連携しながら、「国が広告可能と認める矯正歯科専門医制度」の実現にむけて取り組んでいる。また、「医療広告ガイドライン」の遵守を目的とし、会員への周知と徹底を行うとともに、抵触している会員にホームページ掲載内容の改善指導を目的とした「ホームページ倫理審査」を実施している。さらに、設立100周年事業(2026年)の一環として、学術研究プロジェクトの公募を開始した。また、学会ホームページをリニューアルし、レスポンス対応を行った。学術面では2022年より学会誌名を“Clinical and Investigative Orthodontics (CIO)”へ変更し、MEDLINE再収載およびインパクトファクター取得に向け引き続き検討を行っている。

本年度のトピックス

1. 「広告可能な矯正歯科専門医制度の実現」への取り組み

2018年4月に設立された、(一社)日本歯科専門医機構の指導のもと、関係各所と緊密に連携しながら、「国が広告可能と認める矯正歯科専門医制度」の実現に向けて取り組んでいる。

2. 学会誌名の変更

現在、英文の学会誌(ODW)のMEDLINE再収載とインパクトファクター獲得に向けた活動の一環としてわかりやすい学会誌名にすることとなり、2022年より学会誌名を

“Clinical and Investigative Orthodontics (CIO)”へ変更する。

3. ホームページ倫理審査の実施

会員の規範となる立場である臨床指導医(旧専門医)・認定医・指導医の更新(一部新規)申請において、申請者のホームページの内容を審査し、ガイドラインに違反する場合は修正を求める「ホームページ倫理審査」を2017年より実施しているが、本年度も「2021年度ホームページ倫理審査指針」をアップデートし、学会ホームページに掲載した。

4. ホームページのレスポンス対応

患者さんを含む一般の方々の70%以上がスマートフォンでホームページを閲覧していることから、2021年1月より本学会ホームページをリニューアルし、レスポンス対応を行い、スマートフォンでも閲覧しやすいようにした。

5. 100周年記念事業

本学会は2026年に100周年を迎えるが、記念学術大会の実施、公募による学術調査研究、記念基金の設立、記念誌の発刊、学術雑誌記念号の発刊、など100周年に向けて、様々な記念事業の準備を進めている。

(文責：森山 啓司)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9-3F

(一財) 口腔保健協会内

TEL: 03-3947-8891, FAX: 03-3947-8341

[会員数] 7,201名(2021年11月現在)

[設立年] 1926年(昭和元年)

[機関誌] 和文誌「Orthodontic Waves-Japanese Edition」年2回、英文誌「Orthodontic Waves」年4回発行、Information letter 年2号発行

[認定医など] 認定医 3,429名、指導医 551名、臨床指導医(旧専門医) 364名(2021年11月現在)

一般社団法人 日本口腔衛生学会

理事長 天野 敦雄



<http://www.kokuhoken.or.jp/jsdh>

1. 学術大会・総会の開催について

第70回日本口腔衛生学会・総会は、2021年5月27日～6月10日に岡山大学の森田学教授を学会長として沖縄コンベンションセンターで開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のためWeb開催となった。「地域・社会から求められる口腔衛生学の専門性とは何か」をテーマに、70周年記念講演1題、シンポジウム7題、学術賞LION AWARD受賞講演4題、論文奨励賞受賞講演3題、国際セッション1題、モーニングセッション1題、共通セミナー3題、ミニシンポジウム1題、一般講演75題（学部学生発表含む）と国内外から300名余の参加者を得た。

第71回総会・学会は、2022年5月13日～15日、鹿児島大学郡元キャンパスにて、鹿児島大学の於保孝彦教授を学会長として開催を予定していた。しかし、オミクロン株の急速な感染拡大のため、オンディマンドのWeb開催に変更となった。

2. 学会活動について

18委員会を中心に活発な学会活動を行い、その成果は、会員の研究論文と共に機関誌である口腔衛生学会雑誌やホームページで公表している。また、北海道、東北、甲信越・北陸、関東、東海、近畿・中国・四国、九州の7地域の関連学会等とも連携して、地域と個人の口腔保健の推進に努めるとともに、その中核となる認定医・指導医、認定歯科衛生士を養成し、Oral Health Promotion普及に努めている。

「健康な歯とともに健やかに生きる 一生涯28（ニイハチ）」を学会声明として掲げ、2011年8月に制定された「歯科口腔保健法」や各地で制定されている「口腔保健条例」を科学的・技術的に支援することを目標としている。また、「第74回WHO総会議決書を踏まえた口腔衛生学会の提言」、「認知症に対する口腔保健の予防的役割」などの政策声明を発出するなど、すべての人が健全な口腔と高いQOLを享受する社会の実現をめざしている。

国際交流：韓国予防歯科・口腔衛生学会（Korean Academy of Preventive Dentistry and Oral Health）とは、毎年交互に代表を派遣し講演と情報交換を行っている。本年10月31日に開催された同学会の年次大会では理事長・天野がWeb講演を行った。また、Global Oral Healthに関し、WHO（世界保健機関）との緊密な連携を図っている。

本年度のトピックス

1. 歯科公衆衛生専門医

本学会は、2021年5月にわが国で初めての社会歯学系の専門医となる歯科公衆衛生専門医をはじめとする新たな認

定制度を設立した。この新認定制度は、地域口腔保健実践者、認定医、歯科公衆衛生専門医、および指導医から成る。2021年度は旧認定制度からの移行期間とし、本年度から新制度下の申請および認定が始まる。

健康の増進には、個人の要因だけでなくその環境要因が関わる。これらの要因を解明し個人から集団・地域までを含む包括的なアプローチと政策がなければ健康の不平等は解決されない。そのため地域に密着した歯科医師、行政職に従事する歯科医師、そして大学等の研究者の3者を橋渡しし、効果的な公衆衛生施策および地域における活動の展開に向けて指導的役割を果たせる人材を育成し、国民誰もがどのような地域・環境に暮らしていても健康でいられるための支援をしていくことが本制度の主旨である。

2. 第74回WHO総会議決書を踏まえた口腔衛生学会の提言

第74回WHO総会においてoral healthに関する強い議決がなされた。その議決を受け日本口腔衛生学会は以下の学会提言を発出した。

「全ての年齢層の全ての人のために健康な生活を確保し、幸福を促進すること」を目標に、Universal health coverageの一環として口腔保健の推進に取り組む努力を強化して、持続可能な社会の実現を目指す。その目標達成のため、口腔疾患の予防とリスクファクター対策など7つの課題に取り組む」（詳細は本学会HPを参照されたし）。

本学会は「生涯28」を提唱している。この意は「歯を失わない」ではなく、「健康な歯とともに健やかに生きる」社会を作ることである。本学会は生涯28の実現に向け今後とも着実な歩みを重ねる。

（文責：天野 敦雄）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
一般財団法人口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】2,150名（2021年11月1日現在）

【設立年】1952年（昭和27年）

【機関誌】口腔衛生学会誌を年4回発行

【認定制度】口腔衛生学会認定医297名、指導医55名、認定医研修機関24施設、認定歯科衛生士44名（いずれも2021年11月1日現在）

一般社団法人 日本歯科理工学会

理事長 早川 徹



<http://www.jsdmd.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第77回日本歯科理工学会学術講演会は、2021年4月10日～11日に鶴見大学歯学部歯科理工学講座（大会長：早川 徹）が担当し、Webライブ配信とあわせて、タワーホール船堀（東京）でライブビューイングも実施した。一般演題の他は特別講演1題、学会主導型シンポジウム1題、スポンサードセミナー1題であった。初日に定時社員総会・会員総会を実施した。

第78回日本歯科理工学会学術講演会は、2021年10月16日～17日に岡山大学学術研究院医歯薬学域生体材料学分野（大会長：松本 卓也）が担当し、Webライブ配信および10月18日～25日の間に一部のプログラムをオンデマンド配信した。一般演題の他は特別講演1題、学会主導型シンポジウム1題、シンポジウム1企画であった。シンポジウムは「歯科理工学 東西対抗戦」として、全国の歯科理工学分野または生体材料学分野の教授が自身の研究を紹介し、新しい研究トレンドや共同研究の創出するきっかけとなった。

コロナ禍においても、会員の研究発表と交流の機会を絶やさない企画を試みる事ができた。

2. 学会活動について

会員の研究発表や交流の場として、様々なかたちで5つの地方会でセミナーが開催された。また、学術講演会や地方会セミナーの企画の一部はDental Materials Adviser/Senior Adviserのための特別セミナーとしても併催している。

日本歯科医学会に所属する学会を中心に、さまざまな他学会との連携強化を図っている。

また、学会の国際的プレゼンスの向上を目指して、定例の学術講演会に加え、4年ごとに国際学会（International Dental Materials Congress）を開催し、昨年延期となったIDMC2020はIDMC2022として来年度開催予定である。

本年度のトピックス

1. DMJのIFが2を超える

本学会が発行している英文機関誌（Dental Materials Journal）は我が国の歯科界で初めてインパクトファクターを獲得した権威ある学術雑誌である。今年度は、2020年IF値：2.012、5年IF値：2.214とIF値が2を超えた。今後IF値のさらなる向上を目指していく。

2. DEでホットな特集

日本歯科理工学会では、その時のホットな話題をDE（The Journal of Dental Engineering）で特集している。ただ単に新しい材料や器械を紹介するのではなく、歯科臨床の現場で問題となっている事、歯科医が知りたい情報などを、歯科理工学研究者だけではなく、臨床の先生などそれぞれの分野の先生に解説して頂いている。今年、「DE」で取り上げた特集は以下の通り。

- ①「各種シミュレーション技術の歯科応用」
- ②「歯内療法における材料・器械の新展開」
- ③「歯科と色彩」

3. 国際歯科材料会議2022年度開催決定

本学会では、アジアの歯科理工学の発展に貢献するとともに、アジアの歯科理工学の研究者とのネットワークの構築を目指しており、その一環として、今までにタイ（2007年）、韓国（2011年）、インドネシア（2016年）で、約4年毎に国際歯科材料会議と称して国際学会を開催してきた。2020年には台湾での開催を予定していたが、コロナ禍により延期となり、2022年度開催を決定した。

4. 学術講演会開催の見直し

今年度、学術大会の開催方式を見直した。現在は春秋年2回の学術講演会を開催しているが、本学会を構成する各地方会の活性化を図るために、2023年度から全国的な学術講演会の開催を年1回（春期）に開催し、秋期は地方会主催のセミナーなどを活性化させ、大学や研究機関に所属する研究者のみならず、臨床家や学生、企業関係者に至るまで、会員の研究成果発表の機会を広げることにした。

（文責：早川 徹）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

【会員数】1,625名（2021年12月1日現在）

【設立年】1982年（昭和57年）

【機関誌】和文誌「日本歯科理工学会誌」（年3回、Special Issue年2回）、英文誌「Dental Materials Journal」（年6回）

【称号】Dental Materials Adviser 96名、Dental Materials Senior Adviser 202名

特定非営利活動法人 日本歯科放射線学会

理事長 浅海 淳一



<https://www.jsomfr.org/>

1. 学術大会・総会の開催について

NPO 法人日本歯科放射線学会第 61 回学術大会・第 17 回定例総会は倉林 亨大会長（東京医科歯科大学）のもと、2021 年 5 月 21 日～23 日、「もっと知りたい、歯科放射線」をテーマに Web 開催（Zoom ウェビナー）された。日本歯科放射線学会第 2 回秋季学術大会は、荒木和之大会長（昭和大学）のもと、Zoom 配信による Web 大会として、2021 年 10 月 29 日～31 日、「ニューノーマルにおける歯科放射線—コロナ後の世界で歯科放射線専門医に必要とされる能力を考える」をテーマに開催された。日本歯科放射線学会第 62 回学術大会第 18 回定例総会・第 13 回アジア口腔顎顔面放射線学会は勝又明敏大会長（朝日大学）・新井嘉則大会長（日本大学）のもと、2022 年 6 月 3 日～4 日、じゅうろくプラザ（岐阜市橋本町 1 丁目 10 番地 11）で併催（一部オンライン）されることになった。

2. 学会活動について

日本歯科放射線学会は歯科放射線学およびこれに関連する学術研究の促進を 18 の委員会を中心に推進し、歯科放射線学の普及を図り、もって学術および医療の進展に寄与することを目的としている。和欧文学術雑誌の発行、欧米やアジア各国の歯科放射線医との連携協力、また関連学会との連携協力も継続的に行っている。歯科放射線専門医制度の下、準認定医、認定医、歯科放射線専門医、指導医の認定や一般開業医への啓発活動として、教育委員会を中心に、歯科医師生涯学習研修会、実技研修会、等を開催している。これらの活動の多くは 2021 年度においては COVID-19 の影響を受け中止あるいは Web 開催となっている。そのような中 ICDMFR (International Congress of DentoMaxilloFacial Radiology, 国際歯顎顔面放射線学会) 第 23 回大会は 2021 年 4 月 28 日～5 月 1 日まで韓国 Gwangju で開催された。COVID-19 の影響で、現地と Web のハイブリットで催され、海外からの現地参加は難しかった。

本年度のトピックス

(1)CBCT の臨床利用指針, (2)顎関節画像診断ガイドライン, (3)インプラント画像診断ガイドライン, (4)パノラマ X 線画像による全身疾患スクリーニングのガイドライン, ((5) MRI の医療安全に関するガイドライン (「MRI 検査における over denture の磁性体の取り扱いに関する見解」), (6)携帯型口内法 X 線装置による手持ち撮影のためのガイドラインの改定・策定を進めている。保険点数の改定に向けて、① Oral Radiology に収載された「Clinical guidelines for the application of panoramic radiographs in screening for osteoporosis」を基盤としてパノラマ X 線写真の下縁皮質骨による顎骨脆弱度評価, ②薬剤関連顎骨壊において骨密度が上昇することから、口内法 X 線撮影による骨塩定量検査, ③ COVID-19 に対応して、口内法の代替えとして部分パノラマ断層撮影法の導入に向けて技術提案書を作成した。Oral radiology は 2021 年 Volume 38 Number 1-4 計 719 ページ掲載した。詳細は Review articles 8 編, Original Article 66 編, Case Reports 10 編, Technical Reports 1 編, Rapid Communication 1 編, Letters to the Editor 7 編であった。Impact Factor は 1.852 で、歯科放射線学分野では Medline 掲載誌としては現在 DMFR と 2 雑誌のみである。

(文責：浅海 淳一)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

学会事務センター内 (担当: 並河 宏樹)

TEL : 03-5620-1953, FAX : 03-5620-1960

[会員数] 1,498 名 (2021 年 10 月 19 日現在)

[設立年] 1960 年 (昭和 35 年)

[機関誌] 和文誌「歯科放射線」年 2 回, 英文誌「Oral Radiology」年 4 回発行

[認定医・専門医など] 准認定医 572 名, 認定医 476 名, 専門医 255 名, 指導医 101 名, PET 核医学歯科認定医 30 名, 口腔放射線腫瘍認定医 22 名

公益社団法人 日本小児歯科学会

理事長 牧 憲司



<http://www.jspd.or.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

本年度、第59回日本小児歯科学会大会は、山崎要一教授（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科小児歯科学分野）を大会長とし、「新しい時代の小児歯科，維新の風は南から」をテーマにWeb開催された。2021年6月6日に開会式，特別講演，教育講演，シンポジウムの先行配信を行い，6月7日～22日に全プログラムのWeb配信を行った。参加登録者は1,941名となり，成功裏に終了した。また，秋には6ブロックの地方会をすべてWeb開催で行った。

次回の第60回日本小児歯科学会大会は，2022年5月19日～20日に，幕張メッセ国際会議場にて，白川哲夫教授（日本大学歯学部小児歯科学講座）を大会長とし，「心をつなぎ支えよう，子どもたちの明日を」をテーマに開催される。

2. 学会活動について

日本小児歯科学会は，25の委員会で組織され，日本の小児歯科医療と国民の皆様の福祉の発展のために活動を行っている。

主な活動方針は，①すべての会員が参加しやすい学会運営の構築，②専門医制度の確実な施行と新たな認定制度の拡充，③新たな時代に適した会議やセミナー等の開催方法の検討，④学術雑誌の充実，⑤チームアプローチによる研究成果の向上，⑥公益社団法人としての学会事業の展開と法人支部の組織運営の充実，⑦諸外国との学術交流，⑧成育基本法への小児歯科としての具体的施策提示と小児の保険・医療に関連する学術団体との連携強化，⑨広報活動，⑩災害時における迅速な対応である。本年度は，より多くの学術情報の発信のため，学会開催のほかにオンデマンドによる学術セミナーを定期的に開催している。また，若手支援プログラムを構築し，より多くの会員が参加しやすい環境を提供している。さらに，本会専門医制度が日本歯科専門医機構に認証され，小児歯科学に関する知識，技術を有する専門医を育てるだけでなく，その情報を随時更新している。

学会会員のみならず，広く国民の期待に添え，未来の日本を担う子どもたちの健康を支えるための活動を継続して行っている。

本年度のトピックス

新型コロナウイルス感染拡大の影響により，大会および地方会のWeb開催が余儀なくされたが，多数の参加者を得ることができた。また，オンラインシステムの充実に伴い，オンラインシンポジウムを2021年11月より2022年5月まで毎月開催し，会員への学術情報発信を行っている。11月のオンラインシンポジウムでは，再生回数が300回以上に達した。

小児保健に関しては，コロナ感染予防のために，園や学校現場などにおける歯みがき・うがい・食べ方について，学会ホームページにて提言を行うとともに，リーフレットを作成した。歯みがきリーフレットでは，楽しく安全な歯みがきを行う方法と幼児に多い歯ブラシ事故への注意喚起を示し，食べ方についてのリーフレットでは，口腔機能の育成に役立つ情報を掲載し，患者教育に役立つ媒体となった。さらに，日本学校歯科医会とともに，コロナ禍における児童生徒の調査研究や歯ブラシの実態調査を行い，子どもたちの健康増進に関する調査を行っている。

また，アレクシオン社からの依頼で，「気づいてあげて！特徴的な乳歯の早期脱落がある遺伝性の難病」というタイトルで難治性疾患である低フォスファターゼ症に関する教育映像の監修を行った。

災害対策委員会では，災害に見舞われた会員に対して迅速な対応をしている。

来年度は，若手支援プログラムの実施，国際小児歯科学会開催の誘致活動を行う予定である。

（文責：西田 郁子／庶務担当常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル3F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891，FAX：03-3947-8341

【会員数】 会員総数 5,069名（内訳：名誉会員 39名，正会員 4,569名，準会員 432名，賛助会員 29社）（令和3年11月30日現在）

【設立年】 1963年（昭和38年）

【機関誌】 和文誌「小児歯科学雑誌」を年4回，英文誌「Pediatric Dental Journal」を年3回発行

【認定医・専門医など】 専門医指導医 234名，専門医 1,163名，認定医 80名，認定歯科衛生士 145名。認定医の認定制度は廃止し，更新のみを継続している（令和3年11月30日現在）

特定非営利活動法人 日本歯周病学会

理事長 小方 頼昌



<http://www.perio.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

COVID-19 感染拡大の影響により、第 64 回春季学術大会は八重柏 隆大会長(岩手医科大学歯学部教授)のもと「今、求められる歯周治療 ～研究から臨床へ～」として、2021 年 5 月 21 日～6 月 22 日に Web 開催、第 64 回秋季学術大会は三谷章雄大会長(愛知学院大学歯学部教授)のもと「歯周治療で美味しい人生をサポート」として、2021 年 10 月 15～16 日に名古屋国際会議場で対面形式、終了後の 11 月 1 日～30 日にオンデマンド配信によるハイブリッド方式で開催した。春季学術大会は 4,739 名、秋季学術大会は、現地参加 804 名、オンデマンドで 4,712 名の参加者があり、今後の学術大会のあり方を示す記念すべき学術大会となった。

2. 学会活動について

日本歯周病学会は、科学者がリーダーシップを執る信頼される学会として、継続的に学会のあり方および発展の方策を検討している。

- (1)研究:「歯科診療における臨床検査の新規開発」を継続し、新しい臨床検査法や臨床指標の開発を進めている。また、侵襲性歯周炎患者のデータベースの充実化を図るためスクリーニング法を作成し、本疾患の診断の定義付けや治療効果の検証を推進している。
- (2)医療:診療ガイドラインの改訂の実施、新たなガイドライン(歯周病患者における抗菌薬適正使用にガイドライン)の発刊。医療技術評価提案に関する恒久的な検討を実施している。
- (3)教育:歯周病学基礎実習動画の HP での公開、歯周病学基礎実習用顎模型の開発を行っている。
- (4)臨床:専門医試験、認定医試験、認定歯科衛生士試験を年 2 回開催している。COVID-19 感染拡大の影響により、臨床研修会の開催方式を検討するとともに、歯科医師に対する歯周治療の啓発活動に取り組んでいる。
- (5)地域貢献:専門医、認定医の適正配置を図るとともに、都道府県歯科医師会との連携を推進している。地域活動賞の授与等、地域との連携を強化している。
- (6)国際貢献:アメリカ歯周病学会との学術大会を 2022 年に共同開催予定である。また、韓国・中国・ヨーロッパ・インドなど、各国の歯周病学会との交流を展開している。
- (7)その他:歯周病の予防および治療法の更なる国民への周知(国民向けホームページの新設、学会キャラクター、ビデオ作製等)に注力している。

本年度のトピックス

第 64 回秋季学術大会(名古屋国際会議場)を 2 年ぶりに対面で現地開催した。会期終了後、初の試みとして、オンデマンド配信によるハイブリッド開催を行った。今後の学術大会においても、同様の開催方式が一般的になるのではないかと考えている。

ガイドラインの改訂および新指針の発刊については、①歯周治療の指針 2015 の改定、②歯周病患者における再生治療のガイドライン 2012 の改定、③糖尿病患者に対する歯周治療ガイドライン改定第 2 版 2014 の改定、④高齢者に対する歯周治療の指針の作成と発刊に向けて作業を行っている。

歯周病の予防および治療法の更なる国民への周知のために、国民向けホームページの新設、学会キャラクター、国民向けビデオ作製等を進めている。

歯科医師に対する歯周治療のさらなる啓発のために、歯周基本治療、歯周外科治療の術式および進め方の解説 pdf を臨床研修委員会で作成している。

第 64 回春季学術大会(2021 年 5 月 21 日～6 月 22 日 Web 開催)では、韓国歯周病学会(KAP)理事長を招聘し、代表講演を実施した。

若手研究者への支援強化の一環として、第 64 回春季学術大会時に第 54 回若手研究者の集いを Web 形式で、第 64 回秋季学術大会時(2021 年 10 月 14 日)に第 7 回若手合宿研修を現地(名古屋)で各々実施した。

臨床データベース委員会を新設し、歯周病臨床データベースの構築に向けて検討を開始した。

(文責:小方 頼昌)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-43-9 駒込 TS ビル
TEL: 03-3947-8891

[会員数] 12,178 名(2021 年 10 月 31 日現在)

[設立年] 1958 年(昭和 33 年) / 2003 年 3 月法人格取得

[機関誌] 「日本歯周病学会会誌」年 4 回発行(2015 年よりオンラインジャーナル)、ニュースレター年 2 回発行

[認定医・専門医など] 専門医 1,178 名、指導医 289 名、認定医 1,242 名、認定歯科衛生士 1,303 名、指定研修施設数 174 箇所(2021 年 10 月 31 日現在)

一般社団法人 日本歯科麻酔学会

理事長 飯島 毅彦



<http://kokuhoken.net/jdsa/>

1. 学術大会・総会の開催について

第49回学術集会・総会が藤澤俊明会長（北海道大学大学院歯科麻酔科学分野教授）のもと、2021年10月8日～11月21日までオンデマンド形式によってオンライン開催された。特別講演2，教育講演3，久保田康耶記念講演，宿題報告，シンポジウム4，認定講習会，学会企画教育講座，実習型バイタルサインセミナー，および共催セミナーが企画され，最優秀発表賞候補演題，一般演題と合わせて129題が発表された。参加者総数は1,408名であった。日本歯科麻酔学会の会員総会では，会務報告がされた。

2. 学会活動について

社員総会（10月8日）において，第17期会計決算，第18期補正予算案，第19期事業計画案・予算案，役員選出細則の改定，専門医制度規則の改定等が承認された。また，第52回総会・学術集会の会長として瀬尾憲司氏（新潟大学）が承認された。また，社員総会終了後に開催した理事会において，次期理事長として飯島毅彦氏（昭和大学）の再任が承認された。

教育研修活動として，第35回リフレッシュャーコースを7月12日から9月15日まで，Web上で開催した。各種資格認定事業については，認定歯科衛生士31名，登録医7名，専門医15名が資格審査に合格した。認定医試験については，コロナ禍のために来年3月に延期とした。

地域医療の推進活動として全国で3か所の歯科医師会でバイタルサインセミナーを開催した。その他の活動として，診療ガイドライン・診療ステートメントの作成などを行った。

日本麻酔科学会理事会において歯科麻酔についての正しい理解を深めるために理事長が提案を行った。

本年度のトピックス

日本歯科麻酔学会専門医制度は2021年度に日本歯科専門医機構の登録第1号として認定された。歯科麻酔専門医は現在300名余りが登録されている。日本での麻酔管理を必要とする患者は現在行われている麻酔件数の数倍いると考えられている。歯科治療恐怖症の患者さんや障害者で歯科治療を受けられない患者さんの他に深部埋伏智歯の抜歯を必要とする方や小児の患者さんである。多くの患者さんが麻酔のできる施設が整備されることを願っている。そのためには麻酔が施行できる施設を増やす必要がある。日本歯科麻酔学会は専門医を増やすだけでなく，その専門性を生かせるインフラの開拓を進めている。

安全な歯科治療を進めるためには患者さんの状態を客観的に評価するモニターが整備され，歯科医療スタッフがそれを使いこなせるようにする必要がある。日本歯科麻酔学会は地域医療委員会で地域の歯科医師のためにバイタルサインセミナーを開いてきた。コロナ禍でも今年是全国3か所で遠隔講習会を開催した。今後もこの活動を広げていく。

（文責：飯島 毅彦）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891，FAX：03-3947-8341

[会員数] 2,759名（令和3年8月31日現在）

[設立年] 1973年（昭和48年）

[機関誌] 和文誌「日本歯科麻酔学会雑誌」年4回（論文号）年1回（抄録号），Anesthesia Progress（アメリカ歯科麻酔学会発行，日本歯科麻酔学会機関誌）年4回，「ニューズレター」年4回発行

[認定医・専門医など] 認定歯科衛生士119名，登録医50名，認定医1,334名，専門医339名

日本歯科医史学会

理事長 渋谷 鑛



<http://www.jsdh.org/>

1. 学術大会・総会の開催について

2021年度の学術大会は、会長 渋谷 鑛（日本歯科医史学会理事長）のもと、第49回日本歯科医史学会学術大会は第24回日本歯科医学会学術大会と併催で執り行われた。歯科医学会は黎明期においては、各分科会が併催されていた史実の再現でもあった。リモート開催（誌上発表）で行われ、会長講演にかえて「日本歯科医学会の回顧と発展」、一般演題は12題とした。

次年度、第50回歯科医史学会総会および学術大会は2022年10月1日、会長高山直秀（本学会理事）で東京ガーデンパレスにて開催予定である。

2. 学会活動について

1) 月例研究発表会

本学会では設立以来、月に1回を目途に形式にとられない自由な発表討論と会員相互の親睦を図る目的から「月例会」を開催している。本年は新型コロナウイルスの影響から、いずれもリモート開催で1月～12月（通算474～482回）実施された。

2) 日本医史学会、日本歯科医史学会、日本薬史学会、日本獣医史学会、日本看護歴史学会、洋学史学会の六史学会12月例会は新型コロナウイルスの影響で中止となっている。

3) 第24回日本歯科医学会学術大会関係

第24回日本歯科医学会学術大会記念誌の編纂に「第一部歯科医学会のあゆみ」として携わった。

本年度のトピックス

本年度は、「第24回日本歯科医学会学術大会」（日本歯科医学会主催で原則として4年毎）が行われた。その企画として記念誌のWeb発刊が計画され、編集に当学会として協力した。「学術大会記念誌 第1部 日本歯科医学会のあゆみ 第2部 座談会」をWebからご覧頂きたい。

過去に、第15回日本歯科医学会総会と第71回FDI年次世界歯学大会1983年では「日本の歯学史展」を併催事業として行った史実がある。当時、印刷物として日本の歯学史として学術展示物をまとめた「DENTAL HISTORY IN JAPAN」が、配布されたことを記憶している歯科医学会会員も少なくなってしまった。日本における近代歯科医学は明治期に欧米からの移入によるところが大きい。しかし、わが国固有の歯科医学とその技術（木床義歯、お歯黒等）について供覧していただく目的で企画されたものである。

第24回日本歯科医学会学術大会は、その名称や開催方法など日本歯科医学会史上多くの機構改革が実施された。各分科会の併催もその一例である（黎明期は各分科会が同時に開催され総会学術大会が行われていた）。学術大会記念誌では、「日本歯科医学会」の歴史的背景を各分科会会員に紹介することができたものと考えている。日本歯科医学会は明治期にすでにその胎動が始まり、その発展には「医」との対峙の歴史的背景があり、その原動力ともなっていることを再認識していただきたい。

過去の史実に触れることによって、未来の歯科ビジョンの構築を作り上げることを再考したいと思う。

（文責：渋谷 鑛）

《問い合わせ先・事務局》

〒271-8587 松戸市栄町西2-870-1

日本大学松戸歯学部歯科麻酔学講座内

TEL, FAX: 047-360-9439

[会員数] 一般会員502名（令和3年7月末日現在）

[設立年] 1973年（昭和48年）4月

[機関誌] 和文誌「日本歯科医史学会々誌」、第34巻第1号、第2号発刊

一般社団法人 日本歯科医療管理学会

理事長 尾崎 哲則



<http://www.jsdpa.gr.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第62回総会・学術大会は2021年7月16日～30日、河野文昭大会長（徳島大学）のもとWeb開催された。テーマは「温故知新：未来へ引き継ぐ歯科医療—安心・安全・信頼の継承—」でした。テーマに沿ったシンポジウムのタイトルは「100年続く歯科医院・医療継承成功へのロードマップ」である。大会長の挨拶では、「患者さんが一番望むこと、それは先生を信頼して、安心してかかれるなじみの歯科医院が存在することである。そして現在、2代目、3代目へと歯科医院を継承することが難しい時代になっており、徳島県でも跡継ぎがないために閉院する歯科医院もあり地域の歯科診療に支障が出るケースが生まれている。歯科医院の継承がスムーズに行えた4つの歯科医院の先生にシンポジストになっていただき医院継承の難しさ、課題をどのように解決したか、また地域の歯科医療をどのように守るか」ということを議論する内容で企画された。

特別公演は、徳島大学大学院医歯薬学研究部医療情報学分野の廣瀬 隼先生による「AIが導く次世代の医療」であった。近未来の医療のあり方についてお示しいただいた。

また口演発表は12題、ポスター発表は6題であった。

2. 学会活動について

本学会の常置委員会は、編集、学術・教育、認定医制度、認定医資格審査会、医療情報、医療保険・地域医療検討、諸規則等運用、広報、倫理審査、利益相反である。

地域関連団体の活動は次の通り。北海道地区：2021年12月4日Web開催。東北地区：2021年10月31日Web開催。関東甲信越地区：2021年11月3日～11月27日Web開催。東海地区：2021年8月29日Web開催。近畿北陸地区：2022年3月にWeb開催予定。中国地区：2021年10月31日Web開催。四国地区：2021年7月16日～30日Web開催。なお第62回日本歯科医療管理学会総会・学術大会と併催。九州地区：2021年12月19日鹿児島県歯科医師会館で開催。

本年度のトピックス

本年度の総会学術大会では、新型コロナウイルス感染拡大にともなう歯科診療への影響についての学術発表が5題あった。いずれも当学会が「安全、安心、信頼の歯科医療を提供すること」を活動の主体としていることにより、感染蔓延のかなり早い時期から会員が歯科診療との関係に注目し研究していたことが示された。

また情報発信として毎月全会員にメール配信しているマンスリレターに新型コロナウイルスの感染予防対策を発信してきた。会員諸氏より大いに役に立ったとの声が寄せられている。

また、医療連携についての原著論文が複数掲載された。これらの報告は他学会ではなかなか見受けることが少なく、本学会が地域医療の重要な柱として重視している特徴の一つが示された。

また当学会雑誌は「臨床」についての投稿の受付をはじめた。これは会員の6割が開業歯科医師であることから、歯科医療管理の観点で論じられた臨床論文が必要であろうということである。学会の裾野が広がればと考えている。

第24回日本歯科医学会学術大会（令和3年、横浜市オンライン開催）ではe-テーブルクリニック1で尾崎哲則理事長が「安心・安全な歯科医療を提供するための口腔外バキューム装置の活かし方」の講演を行った。またシンポジウム10では「訪問歯科診療の16kmルールと継続的な地域歯科医療の提供」として平田創一郎、澄川裕之、藤井一維先生がシンポジストとして講演した。

（文責：福澤 洋一／総務担当常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

【会員数】正会員1,019名、団体会員33団体、維持会員5社、賛助会員10社（2021年11月30日現在）

【設立年】1960年（昭和35年）

【機関誌】「日本歯科医療管理学会誌」を年4回発行
【認定医・専門医など】125名、指導医24名、認定士5名（2021年11月現在）

一般社団法人 日本歯科薬物療法学会

理事長 松野 智宣

<http://jsotp.kenkyuukai.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第41回学術大会は李 昌一大会長(神奈川歯科大学教授)のもと、第24回日本歯科医学会学術大会の併催学会として、オンデマンド配信を含め2021年9月23日～10月31日の期間オンライン開催した。併催学会のプログラムとしては、講演13で大曲貴夫先生に「歯科におけるAMR(薬剤耐性)対策」をご講演いただき、シンポジウム20では「COVID-19と口腔～感染症の予後を分ける口腔健康管理～」を討議し、ポスター発表は17演題であった。

一方、第41回学術大会としては、「歯科医療SDGsを目指したイノベーション With 新型ウイルス時代を生き抜く歯科医療に必要なエビデンスを求めて」をテーマに、COVID-19やその感染対策に関する特別講演や教育講演をはじめ、AMR対策、インプラント治療における感染制御、オーラルフレイルなど多彩なテーマでシンポジウムやワークショップ、パネルディスカッションなどが他学会との共催企画として行われた。

なお、社員総会は6月26日オンラインで開催した。

2. 学会活動について

年1回の学術大会開催と学術誌の発行以外に、特に力を注いでいるのが専門医・認定薬剤師・認定歯科衛生士の養成および認定である。その他、COVID-19であらためて注目されているインфекションコントロールドクター(ICD)講習会の開催や認定制度にも関わっている。また、歯科における未承認薬、保険適応外薬および漢方薬について検討を行い、他学会および行政への働きかけも行っている。

さらに、歯科で使用するさまざまな薬物(和漢薬を含む)に関する知識や現在問題となっている薬剤耐性(AMR)対策と抗菌薬の適正使用(AMS)、高齢者のポリファーマシーなどを中心とした生涯教育を行っている。

加えて、歯科医院におけるスタンダードプリコーションや新たな感染症対策などの実践や最新情報などを提供している。

一方、多施設における抗菌薬の使用状況の実態調査やCOVID-19をはじめとする感染症対策への適切な手指消毒薬に関する研究も行っている。

本年度のトピックス

現在の本学会のアピールポイントとして、①抗菌薬の適正使用や術前感染予防抗菌薬の適応拡大、②COVID-19をはじめとする新興感染症に対する院内感染予防、③超高齢化社会におけるポリファーマシー対策、④周術期口腔機能管理、④歯科における漢方薬の薬物療法の普及、⑤歯科薬

物療法の生涯教育の充実などを掲げている。

注目のトピックスは、以下の通りである。①日本歯科医師会雑誌5号のクリニカルに佐伯副理事長・松野理事長の『高齢者のポリファーマシーと歯科薬物療法』が掲載された。②認定試験にeラーニングコンテンツを採用した。③専門医15名、認定歯科衛生士8名が登録された。④関連学会として日本口腔感染症学会との協力体制を構築した。⑤『感染症治療ガイド2022』の菌性感染症に関するコンテンツを日本感染症学会・日本化学療法学会から原稿依頼された。

また、今後の事業計画として、以下の内容が本年度の総会で決定した。①1990年発刊以来4版まで改訂されてきた『日本歯科用医薬品集』を第5版として大幅改訂し、2022年秋に発刊する。②認定制度を見直し、専門医の資格基準を厳格化するとともに、新たに認定医を設ける。

なお、次年度の第42回大会は上川善昭大会長のもと、鹿児島で開催される。

会員以外の歯科医療関係者に伝えたいこととして、本学会は歯科においてICDを申請できる3つの学会のひとつである。そのため、ICD講習会などを通して歯科医師のICD養成を担っているの、ICD取得を考えている先生方には是非ご入会いただきたい。

(文責：松野 智宣)

《問い合わせ先・事務局》

〒151-0051 東京都渋谷区神宮前2-4-11

Daiwa 神宮前ビル1F

(株)大伸社(DS&C)内

TEL：03-6863-1777, FAX：050-3153-0400

E-mail：jsotp-sec@daishinsha.jp

【会員数】 会員 553 名、賛助会員 5 社 (2021 年 12 月 13 日現在)

【設立年】 1979 年 (昭和 54 年)

【機関誌】 和文誌「歯科薬物療法」を年 3 回発行。歯科用医薬品集を発行

【認定医・専門医など】 専門医 59 名・認定薬剤師 9 名・認定歯科衛生士 2 名、ICD 108 名

一般社団法人 日本障害者歯科学会

理事長 弘中 祥司



<http://www.kokuhoken.or.jp/jsdh-hp/html/>

1. 学術大会・総会の開催について

第38回総会および学術大会（大会長 弘中祥司先生（昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門）は、「新しい生活様式と障害者歯科」をテーマとして2021年9月25日～10月11日にオンデマンドで開催された。本学会は第24回日本歯科医学会と併催し、歯科医学会での一般演題は60演題で、日本障害者歯科学会は93演題であった。学術大会プログラムは特別講演「新型コロナウイルス感染症 COVID-19 パンデミック下の障害児のくらしから考えること（加我牧子先生）」、教育講演「発達障害—その誤解と医療・教育の課題—（榊原洋一先生）」、厚生労働省委託研究報告「障害者等への歯科健診等推進事業に係る調査研究（弘中祥司先生：学会理事長）」、企画講演「新しい生活様式における臨床の Tips」として3題、教育講座4題、委員会企画講演5題、企業共催セミナー1題などであった。2,296名の参加者であった。

2. 学会活動について

学会誌は、原著論文が8編、症例報告11編、臨床集計9編、臨床ヒント1編、委員会報告1編、総説論文（講座）5編が掲載された。本学会は29の委員会が活動し、公益社団法人化の作業、診療ガイドラインの作成、IT化を進めている。専門医基本研修会3題、認定医研修会2題を2回オンライン開催した。地域医療推進のために3つの県にて障害者歯科セミナーをオンライン開催した。

臨床実習マニュアル「障害の特性を考慮した介助磨きの指導」がHP上で公開された。認定医・認定医指導医試験、専門医・専門医指導医試験、認定歯科衛生士試験は10月31日に全国7カ所で実施された。国際交流活動として国際障害者歯科学会とアジア障害者歯科学会は、次年度開催のための準備が進められている。

本年度のトピックス

厚生労働省委託研究報告「障害者等への歯科健診等推進事業に係る調査研究（弘中祥司：学会理事長）」は、全国の会員の協力を得て1,059名のデータを収集し、分析結果をHPで公開した。検診に際して30.1%の障害者は協力が得られず、抑制法が実施された。かかりつけ歯科医があるのは、87.5%であった。未処置歯は平均 0.6 ± 1.8 歯であるが、1人平均喪失歯（永久歯）数は平均 3.5 ± 6.2 歯であった。口腔清掃状態としてのOHI-Sは、10歳未満が平均1.0未満であったが、15歳以上で平均1.5を越えている年代が多く、最高は55～59歳で平均2.1であった。4mm以上の歯周ポケットのある者の割合は30歳代で50%を超え、

そのまま高い状態を推移していた。処置の困難性と加齢とともに口腔清掃状態が難しく、歯周疾患のリスクを抱えていて、かかりつけ歯科医による障害者の歯科管理の難しさを反映していた。

COVID-19に関連した報告は、「COVID-19感染拡大下あるいはそれに近似した状況下における小児在宅歯科医療に関するアンケート」、「新型コロナウイルス感染症流行下におけるオンライン診療に対する摂食嚥下障害患者の意識調査」、「在宅療養児に対して実施したオンラインによる摂食嚥下リハビリテーション」の3編が学会誌へ掲載された。

Down症候群にみられる先天性心疾患は、子どもの病気と思われたが、現在は20歳以上の患者が20歳未満を上回っている。心房中隔欠損のような問題がなかった先天性心疾患でも加齢とともに慢性心不全、不整脈などの管理が必要になり、30歳以上で生存率が急速に低下するので、歯科治療を行う上でも配慮が必要となる。学会誌に「成人先天性心疾患（ACHD）と歯科治療」が掲載された。

（文責：小笠原 正／庶務担当理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
一般社団法人 日本障害者歯科学会事務局
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341
E-mail：jsdh@kokuhoken.or.jp

[会員数] 正会員3,962名、準会員1,092名、名誉会員20名、賛助会員7社（2021年11月現在）
[設立年] 1973年（昭和48年）
[機関誌] 「障害者歯科」を年3回発行。ニュースレターを年3回発行
[専門医制度] 平成29年発足。令和3年11月末日現在、専門医指導医38名、専門医178名、専門医研修施設50施設
[認定医制度] 平成15年発足。令和3年11月末日現在、名誉指導医・認定医8名、認定医指導医190名、認定医1,330名、臨床経験施設261施設
[認定歯科衛生士審査制度] 平成20年発足。令和3年11月末日現在、指導歯科衛生士91名、認定歯科衛生士379名、臨床研修施設24施設

一般社団法人 日本老年歯科医学会

理事長 水口 俊介

<http://www.gerodontology.jp/>



1. 学術大会・総会の開催について

第32回学術大会は、河相安彦 理事（日本大学松戸歯学部）を大会長に、2021年6月11日～13日のWebでのライブ配信3日間と、6月14日～30日の約2週間のオンデマンド配信で開催された。メインテーマを「人生100年時代に老年歯科医学ができること」とし、特別講演1, 教育講演1, シンポジウム7, スポンサーセッション5, また愛知県医師会および愛知県歯科医師会とのジョイントセッションを企画した。口演・ポスター発表は208題で、優秀口演賞2名と優秀ポスター賞4名が表彰された。質疑応答はすべてライブ配信し、オンライン上でありながら、集合型開催と変わらない活発なディスカッションを実施した。また、新企画としてMeet the Presidentとして多職種の会員と理事長との座談会を音声配信し、好評であった。

本学術大会は第32回日本老年学会総会と併催され、加盟学会の学術大会もオンラインで視聴し、多職種との情報交流も活発に行われた。

定時社員総会は同年5月29日にオンライン開催した。

2. 学会活動について

本会は日本老年医学会、日本老年社会科学会、日本基礎老化学会、日本老年精神医学会、日本老年看護学会、日本ケアマネジメント学会とともに日本老年学会の構成団体である。本会の理事長と理事6名が日本老年学会の理事となっている。本会より国際老年学会議（IAGG）の評議員が選出されている。

今年度は多彩なテーマでオンラインライブ研修会を計6回実施し、地域を限らず広く研修の場を会員に提供した。

本会には学術委員会、編集委員会、在宅歯科医療委員会など26の委員会が置かれている。支部活動は地域歯科医療の現場と学会を繋ぐ重要な役割を担っている。本会では学会認定医制度、専門医制度、摂食機能療法専門歯科医制度を運営し、高齢者に対する高い専門的知識と技術を有する歯科医師の育成に力を入れている。また、日本歯科衛生士会の認定歯科衛生士（認定分野B：老年歯科）の専門審査を行っている。

また、ヨーロッパ老年歯科医学会（ECG）、台湾老年歯科医学会との交流協定があり、活発な学術交流が行われている。

本年度のトピックス

口腔機能低下症は、本会が2016年に発出した見解論文がもととなっているが、その英語版ともいえるポジションペーパーが2018年に本会の公式ジャーナルでもあるGerodontology誌に掲載された。本年、このポジションペーパーに対して、最も引用された論文に送られるRobin Heath Award for the most-cited paper in Gerodontologyが授与された。さらに、Gerodontology誌においては、口腔機能低下症の英語名であるOral Hypofunctionの特別号が現在編纂中である。わが国初の病名が診療や研究分野で国際的に認められたことの証であると感謝している。また、口腔機能低下症の診療および臨床研究支援アプリを開発し、会員に無料で提供するなど国内での普及にも努めている。

本会では学術用語の検討を継続的に行っているが、本年度は歯科における訪問診療を示す用語として、訪問歯科診療と歯科訪問診療とが混在しており、混乱を招いている点について詳細な検討を行った。その結果、診療形態としては「訪問診療」、歯科における訪問診療である点を明示する場合には「歯科訪問診療」とするのが妥当であるとし、ステートメントを発出することになった。

高齢者施設職員向けに、口腔ケアの手引きやリーフレットの作成を行った。また、新型コロナウイルス感染症蔓延時の歯科治療への対応として、歯科訪問診療における感染予防策の指針を発出したが、最新の状況を加味した2021年版を公表予定である。医療従事者の安全を確保しつつ、訪問診療を継続するために必要な情報の発出を行っている。

（文責：上田 貴之／総務担当常任理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】4,132名（2021年12月1日現在）

【設立年】1986年（昭和61年）

【機関誌】「老年歯科医学」年4回、「Gerodontology」年4回、「ニューズレター」年4回発行

【認定制度関連】認定医数592名、専門医数274名、指導医数195名（以上、のべ人数）、摂食機能療法専門歯科医師100名

一般社団法人 日本歯科医学教育学会

理事長 秋山 仁志



<http://kokuhoken.net/jdea/>

1. 学術大会・総会の開催について

第40回日本歯科医学教育学会学術大会は11月20日～12月3日に日本大学歯学部を主管校としてWeb開催形式で開催された。大会長は本田和也(日本大学歯学部長)である。「医療ICT時代の歯科医学教育を考える—歯科医学における遠隔教育の実践—」をテーマに、特別講演として「Dental Education in Lao P.D.R.」「The future of dental education in Norway」「歯学教育の質保証に向けた第三者評価について」の3題、教育講演として「地域包括ケアでの医療人育成のあり方」の1題、その他にシンポジウム5題が行われた。一般発表は、口演10題、ポスター69題の発表が行われた。参加者は310名であった。

2. 学会活動について

本学会では11の委員会を設置し、歯科医学ならびに関連領域の教育向上、充実および発展を見据えた積極的活動を行っている。総務委員会は庶務事項、学術賞の選考、規程・規約の策定・改定作業を行っている。財務委員会は予算・決算案の作成を行い、学術委員会は学術大会のテーマ・企画の検討を行っている。企画・将来構想委員会は、学会の在り方、オンラインでの講習会の実施方法について検討し、編集・広報委員会は学会誌の編集作業、学会Webサイトの管理、メールマガジンの配信を行っている。教育国際化推進委員会は諸外国の歯科教育関連学会に参加し、情報の収集・発信に努め、教育能力開発委員会は各種ワークショップの運営を行っている。教育方略委員会は倫理・プロフェSSIONナリズム、多職種連携等の学習方略の調査・検討を行っている。教育評価委員会は歯科医師国家試験に関するアンケート調査を実施し、教育一貫性委員会は卒前教育から生涯教育のシームレスな学習の在り方を検討している。機関会員委員会は歯科大学・大学歯学部29校が会員として参加し、利益相反委員会は会員の利益相反状態の管理・対応を行っている。

本年度のトピックス

本学会では文部科学省から委託を受けた「歯学教育モデル・コア・カリキュラム改訂に向けた調査研究」、厚生労働省から補助を受けた「臨床研修活性化推進特別事業」を実施している。

「歯学教育モデル・コア・カリキュラム改訂に向けた調査研究」は昨年度から引き続き委託を受けたもので、平成28年度改訂版歯学教育モデル・コア・カリキュラムの改定に向け、関係団体、医学・薬学のモデル・コア・カリキュラム改訂作業チームとの意見交換、海外の歯学部、学会の情報収集を行い、改定案の作成を進めている。

「臨床研修活性化推進特別事業」は、指導歯科医講習会の講師養成のための研修会の実施と指導歯科医のフォローアップ研修のためのe-ラーニング教材の検討および作成・運営の2つの事業からなる。指導歯科医講習会の講師養成のための研修会は、歯科医師臨床研修施設のプログラム責任者、指導歯科医を対象とし、指導歯科医講習会でタスクフォースを担当する人材の養成することを目的としている。指導歯科医のフォローアップ研修のためのe-ラーニング教材の検討および作成・運営は、歯科医師臨床研修の制度見直しにより、指導歯科医のフォローアップ研修が導入されることを踏まえ、e-ラーニングによるフォローアップ研修受講システムの構築を目的としている。

(文責：藤井一維／総務担当常務理事)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
(一財) 口腔保健協会内
TEL : 03-3947-8891, FAX : 03-3947-8341

[会員数] 1,755名 (2021年11月30日現在)

[設立年] 1982年 (昭和57年)

[機関誌] 「日本歯科医学教育学会雑誌」を年3回発行

公益社団法人 日本口腔インプラント学会

理事長 宮崎 隆



<https://www.shika-implant.org>

1. 学術大会・総会の開催について

第51回学術大会を、津賀一弘大会長のもと、「インプラントで支える未来の健康」を大会テーマとして、2021年12月17日～26日の期間 Web 開催した。

大会特別シンポジウムでは、「口腔機能回復から全身の健康へ、4学会の連携と目指す方向性」をテーマに、日本歯科医学会の住友雅人会長を座長として、日本口腔外科学会、日本歯周病学会、歯科補綴歯科学会及び本学会の各理事長と、患者に分かりやすく、安心して受診できるインプラント治療の構築を目的に意見交換を行い、今後の方向性を共有した。大会企画では、インプラントの症型分類の構築や審美領域へのインプラント治療の成功基準の再考、他にも、各種教育講座、各種優秀研究発表、一般発表、ポスター発表など、多くの講演をオンデマンド配信した。第52回学術大会は、2022年9月23日～25日に村上 弘大会長（愛知学院大学歯学部）のもと名古屋市で開催予定である。総会は2021年6月13日に東京グランドホテルで開催し、2020年度収支決算報告、事業報告などが承認された。

2. 学会活動について

本部学術大会と並行して、全国6支部（東北・北海道、関東・甲信越、中部、近畿・北陸、中国・四国、九州）において支部活動を行っている。また、学会活動において、優れた研究者や業績者には、優秀論文賞、奨励論文賞、優秀基礎研究発表賞、優秀臨床研究発表賞、優秀ポスター発表賞、優秀歯科衛生士発表賞、優秀歯科技工士発表賞などの表彰を行っている。認定制度事業としては、口腔インプラント専門医臨床技術向上講習会を2021年3月21日（約600名参加）と同年11月3日（約700名参加）に Web 開催した。また星 和人先生による「新型コロナウイルス感染症とその対策」と題した講演などを実施し、会員への啓発活動を行った。刊行物では、学会創立50周年を節目として、「日本口腔インプラント学会創立50周年記念誌、新たな水平線を目指して」を発刊した。

本年度のトピックス

新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、国民の感染に対する意識が高くなった。コロナウイルスが口腔内に多数存在することや、清掃不良によって感染リスクが高まることも広く認知され、感染予防に歯科治療が密接に関わっていることが明らかとなった。インプラント治療は、その過程で、口腔清掃、天然歯の治療、義歯、暫間補綴、画像診断、外科手術、術後の口腔管理など、口腔外科学、歯科補綴学、歯周病学、歯科放射線学など多くの分野と関わるため、それぞれの過程において、各段階に応じた感染予防対策が必要となる。本学会では、コロナ禍においても、国民が安心して受診できるような情報の発信や、相談窓口での対応を続けてきた。会員には、Webセミナーを活用し、医療倫理、医療安全、感染予防対策の徹底、各種講演を実施し、知識と技能の向上に努めている。同様の活動は、多くの学会が、日本歯科専門医機構の指導の下、積極的に取り組んでいると思う。本年6月に厚労省が発表した、「施設内で新型コロナウイルス感染者が2名以上出た施設数」の報告では、全8,231件の中、医療機関が1,225件、高齢者福祉施設が1,680件、歯科医院は1件であった。これらの結果は、過去のエアータンを取り上げ、歯科の感染対策の不備を批判した風評被害を払拭し、歯科医療機関の感染対策レベルの高さを、国民やマスコミに知らしめた。インプラント治療においても、過去には同様の報道もあったが、本学会は引き続き、国民が安心して受診できるインプラント治療の構築、患者が身近で探することができる、インプラント歯科専門医の育成と認定制度の確立を進めている。

（文責：阪本 貴司／学術担当常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒108-0014 東京都港区芝4-3-5
ファースト岡田ビル8F
TEL：03-5765-5510, FAX：03-5765-5516

【会員数】16,246名（2021年10月末現在）

【設立年】1972年（昭和47年）

【機関誌】和文誌「日本口腔インプラント学会誌」年5回発行。英文誌「International Journal of Implant Dentistry」年2回発行

【認定医・専門医など】専修医1,030名、専門医1,255名、指導医231名、インプラント専門歯科衛生士868名、インプラント専門歯科技工士250名（2021年10月末現在）

一般社団法人 日本顎関節学会

理事長 鱒見 進一



<http://kokuhoken.net/jstmj/>

1. 学術大会・総会の開催について

第34回日本顎関節学会学術大会を2021年10月23日～11月23日に、本田和也大会長（日本大学歯学部歯科放射線学講座教授）の下、Web形式で開催した。参加登録者は693名であったが、本大会は「顎関節の現在、そして未来へ」をテーマに、シンポジウム、教育講演、認定医セミナー、共催セミナーや、その他多数の口演発表・ポスター発表が行われた。特に今回は、脳神経外科、耳鼻咽喉科、整形外科、精神科、ペインクリニックの医師に登壇いただき、医科歯科連携について興味深いシンポジウムが行えた。

次回の第35回学術大会は2022年7月2日～3日に札幌市教育文化会館にて、山口泰彦大会長（北海道大学大学院歯学研究院口腔機能学分野冠橋義歯補綴学教室教授）の下で開催予定である。

2. 学会活動について

本学会は理事25名（理事長1名、副理事長1名、常任理事5名を含む）、監事2名で役員を構成し、21の常置委員会、3つの暫定委員会があり活動を行っている。

年4回の学術講演会をはじめ、2015年より、要望のある都道府県歯科医師会で「新顎関節症の病態分類」に関する学術講演を実施、現在は「顎関節症治療の指針2020」に関する学術講演を企画しており、会員・非会員を問わず、顎関節症ならびに、その他の顎関節疾患の標準的な診療の啓発活動に積極的に取り組んでいる。

また、認定制度により専門医・指導医、認定医を認定するとともに2015年より暫定指導医制度を運用し、全国的に認定研修機関を設置して、専門医育成の環境作りを進め、これまで以上に顎関節症をはじめとする顎関節疾患の標準的な診療の普及に力を入れている。

国際交流に関しては、アジア顎関節学会（隔年開催）との交流を行っている。

また、現在世界標準の顎関節症（TMD）診断基準であるDC/TMD（Diagnosis of Criteria for Temporomandibular Disorders）のInternational Networks for Orofacial Pain and Related Disorders Methodology(INFORM)公認のDC/TMD認定トレーニングコースを行う。

本年度のトピックス

顎関節症（TMD）は、現在、その考え方について世界的にコンセンサスが得られ、世界標準の診断基準としてDC/TMDがある。本学会ではINFORM公認のDC/TMD認定セミナーを行っている。本年INFORMから日大松戸歯学部が公認認定トレーニングセンターとして認められた。

また本学会ではDC/TMDを日本の一般臨床医が用いられるように「顎関節症治療の指針2020」としてまとめ直し学会HPよりダウンロードできるようにしている。そして、会員向けに毎回の学会で診察・検査法についてのセミナーを行うとともに、一般臨床医にも広く周知するためのセミナーも企画している。さらに顎関節症精密検査を医療保険に収載されるよう、毎回の医療保険改定時に学会より提案書を提出している。歯科では、う蝕や歯周病と言った器質的疾患を扱うことが主であるが、顎関節症は運動器の機能障害であり、他の歯科的疾患とは考え方が大きく異なる。痛みには侵害受容性疼痛、神経障害性疼痛の他に、近年、非器質性疼痛として痛覚変調性疼痛（Nociplastic pain）が認められた。ここには一部の顎関節症が含まれ、歯科医師はこれに対応する必要性が生じてきている。現在、慢性痛の治療には多職種による集学的治療が行われているが、今後は歯科もそこに加わることが求められてくると思われる。ほとんどの顎関節症は、初期治療で改善するため、適切な初期対応法を一般歯科医師に啓発し、一般的な顎関節症を治療出来る歯科医師を増やすこと、そして痛覚変調性疼痛に含まれる顎関節症に対応できる専門医を育成することが、今後、本学会の大きな課題となると考えている。

（文責：島田 淳／理事・保険医療推進委員会委員長、社会連携・広報委員会副委員長）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9

（一財）口腔保健協会

TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

E-mail：gakkai23@kokuhoken.or.jp

【会員数】正会員2,000名、準会員10名、名誉会員53名、賛助会員3社（2021年12月1日現在）

【設立年】顎関節研究会：1980年、日本顎関節学会：1988年、有限責任中間法人日本顎関節学会：2008年、一般社団法人日本顎関節学会：2009年

【機関誌】和文誌「日本顎関節学会雑誌」を年4回発行（大会特別号を含む）。ニューズレター、メールマガジンを随時発行

【認定医・専門医関連制度】現在119研修施設、26関連研修施設、研修補助施設3施設があり、歯科顎関節症専門医（308名）、指導医（186名）基礎系指導者（3名）が在籍している

特定非営利活動法人 日本臨床口腔病理学会

理事長 前田 初彦



<http://www.jsop.or.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

2021年度第32回日本臨床口腔病理学会総会・学術大会は榎木恵一大会長（神奈川県大）の下「歯科と病理学の絆と社会貢献」を大会テーマとして、8月12日～14日（オンライン）、9月1日～28日（オンデマンド）にWeb開催された。特別講演1（中村直哉先生 東海大）、特別講演2（櫻井孝先生 神奈川県大）、教育講演1（辻村傑先生 辻村歯科医院）、教育講演2（豊澤悟先生 大阪大）、若手シンポジウム1（大塚邦紘先生 徳島大、角田麻里子先生 日本大、田中準一先生 昭和大）、若手シンポジウム2（常孝孝明先生 徳島大、山崎学先生 新潟大、高島清文先生 岡山大）、Webランチョンセミナー1（白澤淳子先生 日経BP）、Webランチョンセミナー2（松沢成文先生 衆議院議員、中澤宗寿先生 表千家茶道）、スポンサーシンポジウム（村上正基先生 愛媛大）、モーニングセミナー1（伊藤由美先生 鶴見大）、モーニングセミナー2（窪田展久先生 神奈川県大）、イブニングセミナー（猿田樹理先生 神奈川県大）、学会奨励賞受賞講演、症例検討に加え、多数の口演発表が行われた。

次回の第33回総会・学術大会は2022年9月22日～24日に安彦善裕大会長（北海道医療大）の下、第32回日本口腔内科学会（安彦善裕大会長 北海道医療大）、第35回日本口腔診断学会（永易裕樹大会長 北海道医療大）との合同学術大会として、札幌市教育文化会館で行われる予定である。

2. 学会活動について

開催が延期されていた第53、54回口腔四学会合同研修会（第53回 星和人先生 東京大、第54回 濱田傑先生 近畿大）は2月～3月にオンデマンド形式で開催された。7月に第49回口腔三学会連携協議会を開催（Web開催）した。また、11月には第66回日本口腔外科学会で口腔三学会合同シンポジウム（浦野誠先生 藤田医科大）を開催した。

本年度のトピックス

日本臨床口腔病理学会として、口腔病理学の教育・診断の標準化を目指している。その中で、現状の歯科医師国家試験出題基準では、肉芽腫性炎の項目で放線菌症が第1番目に備考欄に記載されている。現在の病理学では、放線菌症を肉芽腫性炎の代表的疾患として取り上げているものは殆どみられない。もちろん、放線菌症においても肉芽腫を形成することがあるが、多くは、「口腔結核、口腔梅毒、癩、サルコイドーシス」をあげている。肉芽腫性炎について歯学教育をする上で、学生の理解の混乱を起こしていることが、本学会会員からあがってきた。そこで、公益社団法人日本口腔外科学会とこの件について検討した結果、賛同をいただき、歯科医師国家試験出題基準における「肉芽腫性炎の項目から放線菌症の除外」についての提言を厚生労働省医政局へ提出した。今後は、口腔病理学の教育・診断における標準化を日本臨床口腔病理学会が主導して関連学会と共同しながら行っていく所存である。

（文責：前田 初彦）

《問い合わせ先・事務局》

〒110-0016 東京都台東区4丁目22-8

ワタナベビル2階(株)

ウィザップ東京支店内

TEL：03-6284-2560, FAX：03-6284-2561

E-mail：jsop-info@sksp.co.jp

【会員数】506名（2021年10月28日現在）

【設立年】1990年（日本口腔病理学会）、法人：2006年（特定非営利活動法人日本臨床口腔病理学会）

【機関誌】英文誌「JSOMP」「JOMP」（各年4、10月発行）

【認定医・専門医など】口腔病理専門医（一般社団法人日本病理学会認定）

一般社団法人 日本接着歯学会

理事長 奈良 陽一郎



<https://www.adhesive-dent.com/>

1. 学術大会・総会の開催について

第40回日本接着歯学会学術大会（第24回日本歯科医学会学術大会との併催）については、2021年9月23日～26日を会期とし、鶴見大学・山本雄嗣教授が大会長を担い開催した。当初の開催方式は、9月23日からの3日間は、神奈川県横浜市のパシフィコ横浜における第24回日本歯科医学会学術大会との併催にて実施し、続く9月26日は、本学会独自の開催日として鶴見大学歯学部にて開催する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大防止を図り、全日程を通してオンライン方式（ライブ配信＋オンデマンド）による開催形式に変更して実施された。第40回大会は「患難を乗り越え Next Society へ」をメインテーマに設け、日本歯科医学会との併催プログラムとしてオンライン方式によるe-ポスター発表15題と“歯冠色間接修復法を成功させる接着の極意”をテーマとする本学会企画のシンポジウムが行われた。ついで9月26日には、本学会独自の大会プログラムとして口頭発表7演題がビデオ・オンライン配信され、併せて2021年度臨時社員総会・会員総会を同日にオンライン開催した。

2. 学会活動について

2021年5月29日に2021年第1回臨床セミナー・専門医認定研修会を、12月12日には第2回の同セミナー・研修会を講演ビデオ・オンライン配信で開催した。第1回では「変革期を迎えた接着臨床を知る」を、第2回では「今、歯科接着ができること—もっと接着歯学を臨床に活かそう!—」をテーマとする発表を経て、参加者と講演者を交えた活発なライブ・オンライン・ディスカッションがなされた。更に本学会では、日本歯科専門医機構認証による専門医制度を見据えた体制準備はじめ、編集・広報・学術・研修検討委員会を含めた常設13委員会による事業によって、会員や一般臨床家のみならず国民が望む接着歯学活用の良質な歯科医療への寄与を念頭に、精力的な活動を行っている。

本年度のトピックス

“辛くなく、綺麗で、しっかりとした歯科治療”は、世界中の患者の切なる願いである。この願いを叶える手段として、“接着歯学”を活用した歯科医療は首座的役割を果たす。事実、国内外を問わず、日々の臨床における接着歯科医療器材の応用頻度と必要性は高まる現状がある。弊会ではこの実態を改めて客観視し、国境を越えた患者国民が切望する“歯科治療”の提供に向け、先進的研究に基づくエビデンスの蓄積と共に、新たな手技・関連器材の開発、それらの公表と臨床現場への普及をアピールポイントとして活動している。学会注目のトピックスとしては多機能・汎用性高分子接着性材料の探究をはじめ、歯科用CAD/CAMやIOSを活用したメタルフリー・デジタル・レストレーションの接着修復の検証などを挙げるができる。また、弊会が関わった国内外の事業としては、先述した第24回日本歯科医学会学術大会とのコラボレーション、日本歯科専門医機構が検討を進める“歯科保存専門医（仮称）”認証に向けた連携活動、2022年6月に札幌にて開催予定の第41回学術大会と併催するInternational Adhesive Dentistry 2022@Sapporoを見据えた準備などがある。これから実施予定の企画としては、接着歯科医療用器材や手技に関する最新情報を定期的に会員向け提供し、質の高い医療の一助としていただく。会員以外の歯科医療関係者に向けて、歯科医療の要となっている“接着歯学”について、まずは覗いていただき、共に患者国民に寄り添っていただくことを切に願っている。

（文責：前野 雅彦／役員幹事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル3F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】943名（2021年12月15日現在）

【設立年】1987年（昭和62年）

【機関誌】「接着歯学」年4回発行。「Dental Materials Journal」年6回発行

【認定医・専門医など】接着歯科治療専門医119名、指導医41名、専門医認定研修施設26施設（2021年12月15日現在）

一般社団法人 日本歯内療法学会

理事長 佐久間 克哉

<https://jea-endo.or.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第42回学術大会は第24回日本歯科医学会学術大会と併催で9月23日～25日に行われた。新型コロナウイルスの影響によりライブ配信、翌26日～10月31日までオンデマンド配信という形で開催された。事前登録389名、演題数66題（テーブルクリニック17題、ポスター49題）、その他公開講演・公開フォーラム、シンポジウム等を行う内容であった。理事会、総会は2021年11月21日にZoomを使用してオンラインにて開催された。また、昨年誌上開催にとどまった山形大会の内容を2021年9月10日に『別冊 the Quintessence 日本歯内療法学会がすべての歯科医師に贈る最新トレンド』としてクインテッセンス出版(株)より発売となった。

2. 学会活動について

現在の会員構成は、大学関係者と開業医でほぼ同数で約2,700名が所属しており、専門医（含指導医）は226名となっている。学会活動は、学問と実際の臨床の融和を目指している。内容は、本年度は残念ながらオンライン開催となったが、学術大会（1回/年）、理事会（3回/年）、研修会（3回/年）、認定臨床研修会（2回/年）、専門医セミナー（1回/年）を行っており、さらに機関誌（3回/年）を発刊している。前年度に歯内療法診療ガイドラインを発刊、ならびに歯内療法における患者同意書を作成し、2021年1月にHPにアップした。また、その専門性の高さからマイクロエンドドンティクストレーニング用人工歯の開発を行っており、患者様との円滑な相互理解、術者の診療技術のさらなるレベルアップを目指している。さらに、歯内療法を一般の方々により理解していただく為、ホームページの改良、マスメディアを通じての啓発に努力している。

本年度のトピックス

日本歯内療法学会の最大の特徴は大学人と開業医がほぼ同数在籍しており、「臨学一体」で活動しているところである。これにより歯内療法の質の向上に努めている。また、学術大会においても大学医局主体だけではなく、開業医が主体となって開催もしている。2022年の学術大会は開業医主催となり北海道にて開催する予定である。

本学会は、歯内療法の専門として海外のAAE（アメリカ歯内療法学会）やKAE（韓国歯内療法学会）との交流を行うと同時に、IFEA（国際歯内療法連盟）やAPEC（アジア太平洋歯内療法学会）のメンバーとしても活動している。これにより、日々変わりゆく最新の歯内療法に対して研鑽を積み、国民へ寄与することを心がけている。

本学会は歯内療法の専門医の試験申請にあたり決められたカリキュラムを履修後、術後の予後評価を必須とした症例報告・口頭試問・筆記試験を実施している。これからの歯内療法の役割を考え、また国民の更なる信頼を得るためにこの審査を厳格にし、専門医更新の際にも必要となる事項を増やそうと鋭意検討している。また、学会独自で卒後教育として技能習得動画等を作成しHPにて公開している。また、倫理審査会の設置により研究発表の審査が独自でできるようになり、開業医でも審査可能な体制を整えている。

これからも「臨学一体」となって専門性を維持し、歯内療法の発展のため精進するとともに国民の健康に寄与するよう邁進したい。

(文責：大久保建吾/事務局長)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
一般財団法人 口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

[会員数] 2,690名（2021年9月30日現在）

[設立年] 1980年（昭和55年）

[機関誌] 和文誌「日本歯内療法学会雑誌」を年3回発行

[認定医・専門医など] 専門医（含指導医）226名、指導医50名、認定研修施設27施設（2021年9月30日現在）

一般社団法人 日本レーザー歯学会

理事長 吉成 伸夫



<http://jsld.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第33回総会・学術大会は富士谷盛興大会長（愛知学院大学）のもと、2021年11月29日～12月13日にオンデマンド配信で開催した。「光によるイノベーション—これからのレーザー歯学会—」をメインテーマに掲げ、日本歯科医学会会長講演：住友雅人先生，理事長講演：吉成伸夫先生，特別講演：中村哲也先生，教育講演1（歯内）：樋口直也先生，興地隆史先生，2（歯周）：青木章先生，福田光男先生，3（口外）：前田初彦先生，4（修復）：山本一世先生，山田三良先生，教育研修会：加藤智崇先生，認定講習会：五味一博先生，パラデンタル対象認定講習会：小林一行先生，安全講習会：加藤純二先生，共催セミナー：塩谷公貴先生，そして一般演題（ポスター）11題という大変充実した内容であった。

第34回総会・学術大会は，青木章次期大会長（東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科歯周病学分野歯周光線治療学担当 教授）のもと，2022年11月26日～27日に東京医科歯科大学 M&D タワー 2階で開催予定である。

2. 学会活動について

2021年度事業概要としては，1.学術大会：第33回総会・学術大会（2021年11月29日～12月13日）をオンデマンドにてWeb開催した。また，学術大会期間中に認定講習会，パラデンタル対象認定講習会，歯科用レーザー安全講習会を併せて開催した。2.刊行物：学会機関誌「日本レーザー歯学会誌」第31巻（1号，2号）を発行した。3.その他：日本レーザー歯学会認定パラデンタル（2015年度より発足），認定医（2001年度より発足），専門医（2013年度より発足），指導医（2001年度より発足）は，2021年10月末日現在，認定パラデンタル：18名，認定医：25名，専門医：176名，指導医：78名である。また，認定研修施設は22機関である。本年度は現在までに認定パラデンタル：2名，認定医：2名，指導医：3名を新たに承認した。

本年度のトピックス

レーザーの生体への応用は，1960年代に Stern や Goldman らがヒトの抜去歯にルビーレーザーを照射した報告に始まる。その後，本学会（当時は日本レーザー歯学会研究会）が設立された1989年頃からはレーザー機器の低価格化，小型化，高機能化が急速に進んだことで基礎研究および臨床応用が一層盛んとなった。その後，様々なエビデンスを蓄積してきた成果の一つとして，2021年現在，保険収載されたレーザー歯科治療は，1.う蝕無痛の窩洞形成加算，2.歯肉剥離掻爬手術時又は歯周組織再生誘導手術におけるレーザー照射の応用加算，3.口腔粘膜処置，4.歯肉，歯槽部腫瘍等の軟組織摘出術におけるレーザー機器加算，5.口腔粘膜血管腫凝固術，6.エナメル質初期う蝕管理加算の6項目となっている。

レーザー機器が普及し始めた頃，レーザー治療はあくまでも既存の治療・器材の代替として考えられることが多かったが，近年はレーザーがなければ成し得ない利用法が検討されている。さらに，青色LEDをはじめとして光源が多彩になったことにより，本学会においても既存のレーザー波長のみならず“光”全般を研究の対象として扱っている。すなわち，抗菌光線力学療法（antimicrobial photodynamic therapy：a-PDT），口腔粘膜疾患のスクリーニング検査（fluorescence visualization），レーザー溶接やレーザーシタリング（3Dプリンター技術），低出力レーザー照射の作用機序の解明など，これらは歯科界に新たな価値を生み出すことができる技術として期待されている。本学会は“光”の技術革新とその安全な使用方法の啓発に努め，国民の健康の保持と増進に貢献していくことを使命として活動している。

（文責：鈴木 雅也／総務幹事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891，FAX：03-3947-8341

【会員数】910名（機関，2021年10月31日現在）

【設立年】1989年（平成元年）12月

【機関誌】和文誌「日本レーザー歯学会誌」年3回発行

【専門医など】「日本レーザー歯学会専門医制度」専門医176名，指導医78名，認定医25名，認定パラデンタル18名，認定研修施設22機関（2021年10月31日現在）

一般社団法人 日本スポーツ歯科医学会

理事長 安井 利一



<http://kokuhoken.net/jasd/>

1. 学術大会・総会の開催について

第32回日本スポーツ歯科医学会学術大会・総会は、木本一成学術大会長（神奈川歯科大学歯学部社会歯科学系健康科学講座口腔保健学分野）のもと、2021年9月21日～22日に単独プログラムとして神奈川県歯科保健総合センター他+ Web開催で、23日～25日に第24回日本歯科医学会学術大会との併催プログラムとしてオンライン開催された。今回は「Proactive Safety and Enjoy the Excitement of Sports !!」をメインテーマとし、特別記念講演1題、特別講演1題、基調講演1題、教育講演1題、企画講演2題、シンポジウム2題（兼認定研修会）、SDHセミナー1題、DTセミナー1題、一般演題54題、企業展示他の内容であった。次期学術大会は、武田友孝学術大会長（東京歯科大学口腔健康科学講座スポーツ歯学研究室）のもと、東京にて開催予定である。

2. 学会活動について

本会の活動目標は、(1)スポーツによる国民の健康づくりへの歯科的支援、(2)マウスガードやフェイスガード等によるスポーツ歯科傷害の安全対策、(3)競技力の維持・向上に向けた歯科的支援であり、臨学一体を念頭に、さまざまな活動を展開し、競技者やスポーツ愛好家、国民の口腔保健と安全確保に貢献している。本会には学術研究、学会賞選考、学術論文賞選考、教育普及、編集、認定、マウスガードテクニカルインストラクター選考、マウスガード研修施設選考、渉外、広報、社会保険、倫理、東京オリンピック・パラリンピック対策委員会、日本スポーツ協会公認スポーツデンティスト連携委員会の各委員会が設置されている。スポーツ歯科の普及啓発のため、日本歯科医師会、日本学校歯科医会、日本歯科技工士会、日本歯科衛生士会、日本スポーツ・健康づくり歯学協議会（SHP）等の外部団体との学術交流や情報交換を積極的に推進し、2013年度より開始された日本スポーツ協会公認スポーツデンティスト事業についても協力を行っている。また、米国スポーツ歯科医学会、ドイツスポーツ歯科医学会、大韓スポーツ歯科医学会等との国際交流にも努めている。

本年度のトピックス

本会ではスポンサー企業各社の協賛をいただき、2006年度から毎年度、スポーツ歯学の進歩と本会の発展に寄与する優れた業績を発表した者に対し、学術表彰を行っている。本年度の受賞式は第32回学術大会・総会にて執り行われた。各賞の受賞者については以下の通りである。

〈学会賞〉

- 日本メディカルテクノロジー賞：鈴木浩司ら（日大松戸クラウンブリッジ補綴学）
- モリタ賞：田邊元ら（医科歯科大スポーツ医歯学）

〈研究奨励賞〉

- ロッセ賞：筒井新ら（東歯大スポーツ歯学）
- 大榮歯科産業賞：中守貴一ら（広大先端歯科補綴学）、田中佑人ら（大歯大障がい者歯科）
- ネオ製薬工業賞：大木郷資ら（九大クラウンブリッジ補綴学）、小山田勇太郎ら（岩医大補綴インプラント学）

〈学術論文賞〉

- ジーシー賞：森田匠ら（愛院大生理学）

〈論文奨励賞〉

- リンクイ賞：杉原大介ら（日大松戸クラウンブリッジ補綴学）

〈特別賞〉

- サラヤ賞：和田敬広ら（医科歯科大先端材料評価学）

また、スポーツ歯科に関する臨床指針として好評発売中であった本会編纂の学会図書「スポーツ歯科臨床マニュアル（医学情報社）」がリニューアルされ、第2版として刊行された。日本歯科医師会が示す「2040年を見据えた歯科ビジョン—令和における歯科医療の姿—」の中でもスポーツ歯科への取組は重要な柱の一つとして謳われていることから、学会認定医や公認スポーツデンティスト、マウスガードテクニカルインストラクター、スポーツデンタルハイジニスト等の認定資格取得を目指す方だけでなく、かかりつけ歯科医にとっても必須の知識となるので、ご一読いただければ幸いです。（文責：上野 俊明／庶務担当理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
一般財団法人口腔保健協会 内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】1,978名（2021年9月1日現在）

【設立年】1990年（平成2年）

【機関誌】和文誌「スポーツ歯学」年2回、英文誌「International Journal of Sports Dentistry」年1回を発行

【認定医・専門医など】認定医140名、認定マウスガードテクニカルインストラクター276名、認定マウスガード研修施設30施設、認定スポーツデンタルハイジニスト72名

一般社団法人 日本有病者歯科医療学会

理事長 今井 裕



<http://www.jjmcp.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第30回学術大会は、小笠原健文先生（町田市民病院口腔外科 歯科・歯科口腔外科部長）を大会長として新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み2021年7月3日～4日の日程でベルサール飯田橋駅前（千代田区飯田橋）にてハイブリッド開催とした。参加者は788名であった。

今大会は学会発足30周年を記念して「これまでの30年、これからの30年」と題して30周年特別基調講演、30周年記念シンポジウムを企画した。30周年特別基調講演では、白川正順先生（学会前理事長）に、学会設立の経緯から30回に至る歴史についてご講演いただいた。また、30周年記念シンポジウムでは、当学会を構成する5つの分野（医科・歯科・歯科麻酔・病院・一般臨床）の先生が、それぞれの立場で今現実に直面している有病者歯科医療の実態、今後の展望についてご講演いただいた。

また、特別講演1を「新型コロナの時代」と題して河野太郎先生（行政改革担当大臣、新型コロナウイルスワクチン接種推進担当大臣）、特別講演2を「SARS-CoV-2の口腔からの侵入に対するメカニズムと歯科の役割」と題して榎木恵一先生（神奈川歯科大学副学長 環境病理学分野教授）、学術教育講演を「新型コロナウイルス感染症と感染対策」と題して吉田正樹先生（東京慈恵会医科大学附属病院感染症科 診療部長・教授）よりそれぞれに行政・病理学・感染対策の観点から最新の情報をご講演いただいた。さらに医学と歯学の協調という当学会の目的に沿った関連講演2題、シンポジウム4題、委員会企画2題、歯科衛生士教育講演2題を企画した。一般演題（一般口演、ポスター発表）は109題であった。

次年度の第31回学術大会は、2022年4月29日～5月1日の日程で砂田勝久先生（日本歯科大学生命歯学部歯科麻酔学講座 教授）のもと、大会テーマ「パンデミックを超えて」と題して沖縄コンベンションセンター（沖縄県宜野湾市）にて開催する予定である。

定時総会は2021年3月23日にハイブリッドで開催した。

2. 学会活動について

第11回学術教育セミナーを、2021年10月24日にライブ配信、10月26日～11月8日までオンデマンド配信で「超高齢社会における歯科の在り方—地域包括ケアシステムにおける有病者歯科医療学会の役割—」をテーマに開催した。

また学会刊行物として、「訪問歯科診療—歯科医師のためのリスク評価実践ガイド—」を訪問歯科診療の現場において有用な情報を提供するガイドとして発刊した。

本年度のトピックス

本学会は、わが国の疾病構造の変化に伴い基礎疾患を有する患者に対応し得る医学的知識の研鑽、あるいは臨床に直結した全身管理を普及させることを目的に設立され、これまでは独自の制度に基づき専門医を養成してきた。現在、日本歯科専門医機構の基本領域10領域の1つとして日本障害者歯科学会、日本老年歯科医学会と連携して新しい専門医制度の確立に向けた協議を重ねている。

本年度発刊の「訪問歯科診療—歯科医師のためのリスク評価実践ガイド—」は訪問診療に限らず、歯科医院における全身状態の評価や他職種連携の場での情報交換のツールなどに役立ててもらいたい。

遺伝性血管性浮腫（HAE）は希少疾患のため認知率はあまり高くないが、診断が困難なことから苦しむ患者が多い。そこで本疾患の早期診断実現を目指すコンソーシアムが設立され、本学会も連携することとなった。今後は本疾患の適切な早期診断および診断率の向上のための情報発信を積極的に行っていく予定である。

（文責：石垣 佳希／総務担当常任理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒115-0055 東京都北区赤羽西6丁目31番5号
（株）学術社内

一般社団法人 日本有病者歯科医療学会
事務局

TEL：03-5924-3621, FAX：03-5924-4388

E-mail：yubyousha@jmmcp.jp

【会員数】2,586名（2021年11月19日現在）

【設立年】1991年（平成3年）

【機関誌】「有病者歯科医療」年6回、「NEWSLETTER」年2回発行

【認定医・専門医など】認定医681名、専門医435名、指導医273名、認定研修歯科診療施設140施設、認定歯科衛生士199名（2021年11月19日現在）

認定分科会

一般社団法人 日本口腔感染症学会

理事長 岸本 裕充

<http://www.jaoid.org>

1. 学術大会・総会の開催について

第30回総会・学術大会を岸本裕充大会長（兵庫医科大学歯科口腔外科学講座主任教授）のもと、2021年10月30日～31日、兵庫県歯科医師会館で開催した。特別講演「細菌叢と疾患との関連について～兵庫医科大学における挑戦～」(兵庫医科大学病原微生物学講座主任教授 石戸聡先生)、教育講演「骨シンチ SPECT/CT を用いた ARONJ の評価」(兵庫医科大学放射線医学講座准教授 北島一宏先生)、シンポジウム「COVID-19 High Volume Center での歯科口腔外科診療～わたしたちの対応～」①名古屋市立大学での取り組み (渋谷恭之先生) ② COVID-19 流行時の九州医療センター歯科口腔外科における感染対策について (吉川博政先生) ③ コロナ診療重点病院での歯科口腔外科の役割 (小林裕先生) ④ 神戸市立医療センター中央市民病院での対応 (竹信俊彦先生)、一般口演 (16 演題) などが行われ、参加者は 131 名であった。併せて、第 369 回 ICD 講習会を開催した。

●第31回総会・学術大会の予定

日 時：2022 年 10 月 22 日・23 日

会 場：愛知県名古屋市 名古屋市立大学桜山キャンパス
大会長：渋谷恭之（名古屋市立大口腔外科学分野教授）

2. 学会活動について

本学会の院内感染予防対策認定制度講習会を 2021 年 2 月 15 日～28 日に Web で、講演 1 「ウィズコロナ時代における歯科での感染対策の新しいスタンダード」(兵庫医科大学歯科口腔外科学講座主任教授 岸本裕充先生)、講演 2 「歯科衛生士視点で考える感染対策の基礎力と情報把握力～どう考える？何をやる？を明確にしよう～」(大手前短期大学歯科衛生学科助教 白水雅子先生) の内容で開催し、参加者は 306 名であった。また、スプリングカンファレンスを 2021 年 5 月 1 日～16 日に Web で、講演 1 「口腔外科手術および口腔ケア時に生じるエアロゾルによる感染への対策」(兵庫医科大学歯科口腔外科学講座主任教授 岸本裕充先生)、講演 2 「標準予防対策の実践 —使えるマニュアルづくり—」(大手前短期大学歯科衛生学科講師 中川裕美子先生) の内容で開催し、参加者は 187 名であった。

本年度のトピックス

第 31 回総会・学術大会が渋谷恭之大会長（名古屋市立大学大学院医学研究科口腔外科学分野教授）のもと、2022 年 10 月 22 日～23 日、名古屋市立大学桜山キャンパス 病棟・中央診療棟 3 階大ホールで開催予定である。神戸大学大学院医学研究科感染治療学分野教授 岩田健太郎先生の特別講演、シンポジウム、一般口演など多彩な内容が企画されており、ICD 講習会も併催される。また、スプリングカンファレンスを 2022 年 5 月に開催予定である。COVID-19 の拡大状況により、現地開催になるか Web 開催になるかは未定である。決定次第、学会のホームページ (<https://www.jaoid.org>) に掲載させていただく。是非とも多数の皆様にご参加いただきたい。

本学会では、院内感染予防対策の知識と実践に優れた歯科医師・歯科衛生士を育成することにより、患者と医療従事者の健康と福祉に貢献するとともに社会に信頼される安全な医療の提供に寄与することを目的とし、2006 年より院内感染予防対策認定制度を実施している。2022 年 1 月 1 日現在、認定医 66 名、認定歯科衛生士 35 名となっている。COVID-19 の蔓延により、歯科医療現場では厳密な院内感染予防対策が求められており、より多くの歯科医師・歯科衛生士の皆様に認定制度を取得していただきたい。認定審査は年 2 回行っている。詳しくは学会ホームページでご確認いただきたい。

(文責：古土井春吾／専務理事)

《問い合わせ先・事務局》

〒 663-8501 兵庫県西宮市武庫川町 1-1

兵庫医科大学歯科口腔外科学講座内

TEL：0798-45-6677, FAX：0798-45-6679

[会員数] 628 名 (正会員 600 名, 名誉会員 26 名, 賛助会員 2 社 / 2022 年 1 月 1 日現在)

[設立年] 1993 年 (平成 5 年) 2 月

[機関誌] 和文誌『日本口腔感染症学会雑誌』年 2 回, ニュースレター年 2 回発行

[認定制度] 院内感染予防対策認定制度. 認定医 66 名, 認定歯科衛生士 35 名 (2022 年 1 月 1 日現在)

一般社団法人 日本歯科心身医学会

理事長 安彦 善裕



<https://www.sikasinsin.or.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第36回日本歯科心身医学会総会・学術大会は、「全身を視る口腔を診る心を見る」をメインテーマとし、北海道大学大学院歯学研究院口腔診断内科学教室、北川善政大会長のもと2021年6月19日～20日にオンラインで開催された。コロナ禍の影響で、昨年度の誌上開催に続き2年連続で、従来の対面による開催は叶わなかった。初日には、北海道医療大学保健衛生学分野の松岡紘史先生による「口臭に関わる認知行動療法」とのタイトルでのランチョンセミナーから始まり、シンポジウム1「口腔内科と歯科心身症」で本学会会員4人による発表が行われ、続いてシンポジウム2「顎変形症患者における心身医学的背景」では3名の演者による発表、その後一般演題では12の発表があり、いずれもオンラインで活発な質疑応答が行われた。2日目は、「Reports from Korean Society of Psychosomatic Dentistry」のタイトルで、ここ数年本学会と交流のある韓国歯科心身医学会から2名の演者による発表があり、続いてシンポジウム3「インプラント治療において心身医学的な問題がどこに起きるか、その対応法について」では3名の演者による発表があって、その後のランチョンセミナーでは、兵庫医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の任 智美先生による「味覚障害と低亜鉛血症」とのタイトルでの発表があった。午後は、4つの一般演題の後、「コロナ禍で歯科心身症患者はどうなったか」との、世相を反映したシンポジウムで、韓国からの演者を含めた6人による発表があり、本学会がコロナ禍で貢献できることについて熱のこもった議論が行われた。本学術大会でのオンライン開催は初めての試みであったが、北川大会長、山崎準備委員長のご尽力で、例年より多い参加登録者による活発な質疑応答があり、いつもの学会以上に充実した大会となった。次回第37回大会は、2022年7月9日～10日に小佐野先生（自治医科大学埼玉医療センター口腔外科教授）のもと自治医科大学埼玉医療センターにて、現地とオンラインを併用したハイブリッド方式で開催する予定である。

2. 学会活動について

「歯科領域の心身医療の発展をはかる」ことを目的として設立され、本年で、38年を迎える歯科領域で唯一の心身医療に特化した学会として発展してきた。現在行われている主な事業は、(1)学術集会の開催、(2)機関紙の刊行、(3)教育講習会、(4)認定医制度に伴う試験の実施と教育施設の指定などがある。昨年度は教育講演を初めてオンラインで行い、認定医試験は試験場を分散してオンラインによる試験監督を併用しながら行われた。

これらの活動を通じて、同分野の学問や教育に関する議

論と共に、国民の健康および福祉に寄与する」ことを重視し、会員の診断・治療能力の向上と歯科心身医療の普及を図っている。

本年度のトピックス

コロナ禍における歯科心身症患者の動向

コロナ禍は、感染への不安や日常生活の変化から、多くの人々に様々なストレスを与えている。病状の発症や進行の多くに、ストレスが関わっていると考えられている歯科心身症患者のコロナ禍での動向についての報告を紹介する。当初、感染拡大に伴うストレスから新たな歯科心身症の発症、増加を懸念する報告がなされ、これを受け、本学会員を中心にこの件に関する調査報告が行われた。その結果、一部明らかにコロナ禍のストレスで悪化した症例はあったものの、概ね良好にコントロールされていたとの報告が多くみられた。このことは、歯科心身症患者の背景に、強度な不安症やうつ病などの精神科的疾患を伴ったものが比較的少ないことと一致しているものと考えられた。

一方、心理的増悪は認められなかったものの外出自粛に伴う受診控えがあったため、外出自粛に伴う心理社会的要因による歯科心身症患者の増加を懸念する報告があった。さらに、コロナ禍での歯科心身症患者の対応として、電話受診をはじめとした遠隔診療の有効性を示唆する報告もみられ、オンラインによる歯科心身症に特化した心理療法や、フォローアップシステム構築の必要性が訴えられている。今後、ポストコロナ禍での動向に関する調査研究が望まれる。

(文責：安彦 善裕)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

E-mail：jspd@onebridge.co.jp

【会員数】394名（2022年1月6日現在）

【設立年】1986年（昭和61年）

【機関誌】和文誌「日本歯科心身医学会雑誌」を年2回発行

【認定医・専門医など】認定医28名、指導医58名

特定非営利活動法人 日本臨床歯周病学会

理事長 高井 康博



<https://www.jacp.net/>

1. 学術大会・総会の開催について

2021年7月10日～25日、「歯周治療から始める健康長寿への道」をテーマに、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大防止のため、Web開催(オンデマンド)にて第39回日本臨床歯周病学会年次大会が開催された(大会長：鈴木道治 実行委員長：三宅宏之)。歯科医師セッションでは、小方頼昌教授(日本大学松戸歯学部)、村上伸也教授(大阪大学)により特別講演が行われ、予防処置、基礎疾患、摂食機能について教育講演が行われた。更に、4名の演者による臨床講演、3名の海外演者によるインターナショナルセッション、倫理利益相反委員会企画講演が行われた。歯科衛生士セッションでは、江澤庸博先生、西田互先生による歯科衛生士教育講演、4名の演者による臨床講演が行われた。Web開催の参加者は約2,000名、総ログイン回数は1万回以上、1人当たり5回以上ログインで総閲覧回数は22,798回であった。

日本臨床歯周病学会40周年記念大会(大会長：清水宏康、実行委員長：神成貴夫)は2022年7月30日～31日パシフィコ横浜にて開催される予定である。

2. 学会活動について

本学会には北海道、東北、関東、中部、関西、中国四国、九州の7支部があり、毎年数回の支部教育研修会を開催している。今年もWeb開催が中心となった。

姉妹提携をしている台湾歯周病学会年次大会が11月20日～21日台北で開催され、本学会からも木村文彦先生がオンラインプレゼンテーションを行った。

出版活動として、「ザ・クインテッセンス(クインテッセンス出版)」に「40周年記念大会に向けての座談会」を掲載予定(2022年5月号)。「歯科衛生士」(クインテッセンス出版)に歯科衛生士のリレー執筆を掲載予定(2022年1月～8月号)。

本年度のトピックス

本執行部の学会活動の柱として、学会運営のデジタル化推進と国民への歯周病啓発活動を掲げている。デジタル化については、各支部ごとに行っていた、支部教育研修会の参加登録、決済、Web配信、会議システムなどの一元化を進めていく予定である。国民への歯周病啓発活動は、日本歯周病学会と協調し、11月8日にプレスリリースを行ったところ、多くの反響を得ることができた。今後、キャラクター、国民向けビデオ制作等を進めていく予定である。

(文責：辻 光弘/常務理事)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
(一財)口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】4,926名(2021年12月1日現在)

【設立年】2006年(平成18年)

【機関誌】「日本臨床歯周病学会誌」年2回、「メールマガジン」月1回発行

【認定医関連】認定医421名、指導医98名、歯周インプラント認定医89名、歯周インプラント指導医61名、認定歯科衛生士377名、指導歯科衛生士24名

一般社団法人 日本歯科審美学会

理事長 大槻 昌幸



<https://www.jdshinbi.net/>

1. 学術大会・総会の開催について

定時社員総会は2021年5月30日に、新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン会議で開催した。2021年11月13日～14日には、第32回学術大会（宮崎真至大会長、日本大学）を「Challenge：歯科における審美の可能性を探る！」というテーマで、対面式で開催（TFTホール、東京）した。また、一部の講演は電子的方法を用いた「アーカイブ配信」と一般演題発表は「e-ポスター」の形式で行った。

2022年度の第33回学術大会（新海航一大会長、日本歯科大学新潟）は、10月15日～16日に、「形態・色彩・機能、三位一体の歯科審美」をテーマに、りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館（新潟）にて開催予定である。

2. 学会活動について

本学会は、歯科審美に関する学問の基礎ならびに臨床に関する研究の発展を期し、併せて審美歯科の進歩発展を図り、顎口腔の形態美・色彩美・機能美の調和が図られた歯科医療を実践することを目的に掲げている。機関誌として「歯科審美」の年2号の発行、学会活動に関する各種情報提供として「ニュースレター」を年2号発行している。また、迅速な情報提供手段としてホームページを活用している。昨年はホームページのリニューアルを行い、スタイリッシュなデザインに一新し、より快適に利用できるように改善した。学術大会の他に年数回の学術講演セミナーを開催しているが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催形式をオンライン形式に変更して行った。さらに、歯科医療従事者養成機関への出張講義や学会主導型研究も実施している。

認定制度としては、歯科医師を対象とした認定医、歯科衛生士・歯科技工士を対象とした認定士に加えて、歯の漂白治療に携わる歯科衛生士を対象にしたホワイトニングコーディネーター制度を設けている。また、専門医制度認証申請への準備を行うとともに、専門分科会への加入申請を行った。

本学会は国際交流事業として、国際歯科審美学会（IFED）およびアジア歯科審美学会（AAAD）に組織加盟している。また、American Academy of Cosmetic Dentistry（AACD）および韓国歯科審美学会（KAED）と姉妹協定を締結している。本年度は11月15日～22日にAACDが3年振りに開催され、大槻昌幸理事長が招待講演を、若林一道常任理事が国際ショーケース講演を行った。

本年度のトピックス

学会主導型研究事業として、「AI活用によるオンライン口腔健康度管理システムの構築」を実施している。本事業は、令和元年度日本歯科医学会プロジェクト研究事業に採択されたことを機に、現在も研究内容を継続して実施している。本研究は、口腔審美への関心が薄れることが口腔機能低下の前兆となる、という仮説の検証を目的としている。これまでに得られた成果は、昨年度開催された第31回学術大会において「AI活用によるオンライン口腔健康度管理システムの構築—調査方法について—」、本年度開催された第32回学術大会では「AI活用による新しい口腔健康度管理システム構築に関する研究—予測解析結果について—」という演題でポスター発表を行った。成果内容は、調査対象者の口腔内所見と自己記入式質問票による調査内容から、機械学習によるAI解析を行った結果、口腔の審美に関心があることに深く関与する質問項目を抽出することができたため、本手法を用いた効果的なエビデンスの獲得が期待された。しかしながら、さらなる調査対象者数の拡大が必要であることが明らかとなった。引き続き対象者の獲得およびデータの集積を行い、成果の充実度を高める予定である。

今年度の第1回学術講演セミナー（兼学会主導型研究報告会）は、2021年12月16日に、「口元の審美意識が健康寿命を延伸する」という講演内容で、オンラインによるライブ配信方式で開催した。会員向けに特別講演と学会主導型研究報告会を行い、本研究事業を広く公表することにより、さらなる調査協力施設の拡大を図る予定である。

（文責：三浦 貴子／総務担当常任理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
TE：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】5,354名（2021年9月30日現在）

【設立年】1988年（昭和63年）（2015年4月法人格取得）

【機関誌】「歯科審美」年2回、【ニュースレター】を年2回発行

【認定医・専門医関連制度】認定医171名、歯科技工認定士27名、歯科衛生認定士33名、ホワイトニングコーディネーター1,445名（2021年9月30日現在）

日本顎口腔機能学会

会長 津賀 一弘



<http://jssf.umin.ne.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

2021年度、本学会は総会および第65回および第66回の学術大会を開催した。

総会・評議会は2021年7月5日～7月19日までの会期でメール上での書面開催として実施された。

第65回学術大会は、2021年6月26日～27日の会期で、田中正夫教授（大阪大学）を大会長として、オンラインにて開催された。特別講演1として、和田成生先生（大阪大学大学院基礎工学研究科研究科長・教授）による「メカニクスを通じて理解する生体現象—個別化医療支援へ向けたシミュレーション科学—」、特別講演2として、林美加子先生（大阪大学歯学部附属病院病院長・大学院歯学研究科・教授）による「オーラル・デジタルトランスフォーメーションによる近未来の歯科診療」が行われ、会期を通じて8題の一般口演が行われた。

第66回学術大会は、2021年12月4日～5日の会期で、津賀一弘先生（広島大学）を大会長として、オンラインにて開催された。特別講演として、米田真康先生（広島大学大学院医系科学研究科・教授）による「広島発、糖尿病医療の明日へ！」および第64回学術大会優秀賞受賞者企画（シンポジウム）として、菅原圭亮先生（東京歯科大学口腔病態外科学講座・准教授）による「ロボットの3要素を備えた分子サイズのシステムが秘める可能性」が行われ、会期を通じて10題の一般口演が行われた。

2022年度は増田裕次先生（松本歯科大学）を大会長として、2022年5月28日～29日の会期で第67回学術大会を、小野高裕先生（新潟大学）を大会長として、2022年12月17日～18日の会期で第68回学術大会の開催が予定されている。

2. 学会活動について

本学会は原則、年2回の学術大会開催、年2回の学会雑誌の発行を行っている。本年もCOVID-19の感染拡大を鑑み、第65回および第66回学術大会はオンライン開催の運びとなった。

本年度のトピックス

本会は、1982年に下顎運動機能とEMG研究会を前身として発足した。当初は、日本ME（Medical Engineer）学会専門別研究会であった。その後、1986年に顎口腔機能研究会として、1993年には日本顎口腔機能学会となり、今日に至る。咀嚼、嚥下、発音などの顎口腔系の諸機能は、たいへん複雑である。本会は、基礎から臨床まで、歯科のみならず隣接医学や工学など、多様な専門家が学際的な活動を続け、多くの実績を残してきた。

新しい研究の芽を育て、その芽が大きな花として社会的貢献のできるよう、学術大会では一般口演で発表15分・質疑応答15分を設け、この多様な専門領域の専門家たちが喧々諤々と充実したディスカッションを行い、情報を共有している。これは初代の下顎運動機能とEMG研究会から綿々と引き継がれている本会の伝統である。本年度もCOVID-19の感染拡大を鑑み、第65回と第66回の学術大会はオンラインでの開催となった。しかしながら、両大会とも、対面開催と遜色のない、大変充実した内容となった。大会優秀賞を設け、その受賞者たちが次々回の学術大会では学術シンポジウムを企画・開催するなど、積極的に若手研究者が参加できる環境となっている。加えて若手研究者の育成を目的に、研究立案から実際の研究手技の習得、統計処理・発表方法までを学ぶことが可能である隔年開催の「サマーセミナー」に関しては、2022年10月開催の運びとなった。

（文責：吉川 峰加／会長幹事）

《問い合わせ先・事務局》

〒734-8553 広島市南区霞1丁目2-3
 広島大学大学院医系科学研究科
 先端歯科補綴学内
 TEL：082-257-5677

[会員数] 441名（2021年11月30日現在）
 [設立年] 1982年（昭和57年）（前身：日本ME学会）
 [機関誌] 和文誌「日本顎口腔機能学会誌」を年2回発行、学術大会抄録集を年2回発行

日本歯科東洋医学会

会長 柿木 保明



<https://jdtoyo.net/>

1. 学術大会・総会の開催について

2021年度は第39回学術大会を第24回日本歯科医学会学術大会併催として2021年9月23日～25日（オンデマンド配信：2021年9月26日～10月31日）に、オンライン開催にて砂川正隆大会長（昭和大学医学部教授・本会専務理事）のもとで開催された。本学会からの演題は、講演として「温故知新 オーラルフレイルに対応する歯科東洋医学」（山口孝二郎 昭和大学医学部客員教授・本会副会長）の1題、テーブルクリニックとして「歯科における漢方薬治療（基礎と臨床）」（久保茂正 くほ歯科院長・本会副会長）、「歯科領域へ鍼灸をどの様に利用できるか」（英保武志 ABO 歯科クリニック院長・本会常任理事）の2題が行われ、一般演題（e-ポスター）は23題の発表があった。

来年度も引き続き砂川正隆大会長のもと、2022年10月22日～23日の日程で第40回学術大会が昭和大学上條記念館にて開催される予定である。

2. 学会活動について

① 歯科東洋医学の学部教育の普及、② 漢方薬の保険適応の拡大、③ 歯科への東洋医学の普及をテーマにプロジェクトを進めていく予定である。

① 歯学教育モデル・コア・カリキュラムの平成28年度改訂版から、「薬物」の項目が「薬物（和漢薬を含む）」に改訂された。また、2023年の歯科医師国家試験から漢方薬に関する問題が出題されることが決まった。歯学部における歯科東洋医学教育のモデル講義の作成を行う。② 現在、「薬価基準による歯科関係薬剤点数表」に11方剤が記載されている。適応方剤拡大のために、漢方薬使用指針の作成を行う。③ 都道府県歯科医師会の会員を対象にした研修会の開催、市民への歯科東洋医学の啓発活動を行う。

本年度のトピックス

今年度の学術研修会を2022年2月13日～3月31日（オンデマンド配信期間含む）に本会役員10名を演者として開催した。柿木保明会長が「摂食・嚥下障害に東洋医学でアプローチ～リハビリ効果を向上させるために～」、砂川正隆専務理事が「薬理作用から考える漢方薬の使い方～漢方薬でこんなことができる～」、中村泰規理事が「ツボの探し方・鍼の打ち方～動画でわかりやすく解説します～」、英保武志常任理事が「自分の身体で鍼の打ち方練習する方法～自身の身体で練習すれば、患者様に自信をもって鍼が出来ます～」、秦光潤理事が「顎関節症に対する鍼灸療法～顎関節症における低周波、鍼灸の応用、簡単な整体応用～」、関根陽平理事が「明日からは始める歯科鍼灸～隔物灸篇（枇杷の葉灸・味噌灸）～」、椋梨兼彰常任理事が「漢方薬導入から処方まで～意外と知らない基本事項を解りやすく解説致します～」、久保茂正副会長が「舌診の極意！～意外に簡単！明日からやってみよう！～」、小坂峰雄理事が「口腔乾燥症の基本漢方薬～初心者の方にも～」、國司政則理事が「漢方で治す口内炎～難治性の口内炎に漢方で挑む～」と題して、東洋医学初心者にもわかりやすい講演が行われた。

（文責：砂川正隆／専務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

【会員数】574名（2021年11月30日現在）

【設立年】昭和58年（1983年）

【機関誌】和文誌「日本歯科東洋医学会誌」年1回発行

【認定医・専門医関連】専門医16名、指導医19名、認定医69名

特定非営利活動法人 日本顎変形症学会

理事長 高野 正行



<https://jaw-deform.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第31回特定非営利活動法人日本顎変形症学会総会ならびに学術大会を2020年6月11日～6月12日に東北大学大学院歯学研究科顎顔面・口腔外科学分野 高橋 哲 教授を大会長として「パンデミック後の顎変形症治療の新たな展開」のテーマのもとで開催した。本会は仙台市の仙台国際センターにおいて開催されたが、新型コロナウイルス感染予防のためWebinarを用いたインターネット開催とのハイブリッド開催となった。特別講演1題、教育講演1題、5つのシンポジウム、2つのランチョンセミナー、学会賞受賞講演2題に加えて、国内外から38題の一般演題口演と89題の示説展示、症例展示がプログラムされ、参加登録者は総計842名であった。また、学術大会の期間中に会員を対象とした第17回教育研修会を、「開咬症例に対する顎変形症治療」というテーマでWebinarを用いて開催し、341名の参加があった。学術集会では、インターネット開催にもかかわらず、多くの施設から顎変形症に関連する研究成果の報告があり、口腔外科、矯正歯科、歯科補綴科など臨床各科のみならず、多くの参加者を得て学際的な研究や討論の場となった。

2. 学会活動について

日本顎変形症学会は、1982年から9年間続いた顎変形症研究会が母体となり、1991年1月1日に発足した。その後、2005年に特定非営利活動法人日本顎変形症学会となり今日に至っている。本学会の目的は「顎変形症」についての学術研究および教育普及活動等を行うことにより、医療水準の高揚と次世代人材の育成を図り、国民の医療福祉の増進に寄与することである。その目的を達成するために、本学会では、①学術集会の開催等による顎変形症に関する研究発表事業、②顎変形症に関する機関誌等の発行事業、③ホームページ等による顎変形症に関する普及啓発事業、④国内外の顎変形症に関連する諸団体との連携事業、⑤その他目的達成に必要な事業、等の活動を行っている。また、韓国のKorean Association of Maxillofacial Plastic and Reconstructive Surgeonsとの間で2001年に姉妹提携を結び、毎年、相互の学術大会における学会会員の交流も活発に行われ、東アジア地域における顎変形症治療の情報交換、情報発信の場となっている。

本年度のトピックス

6月の学術大会は、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せないなか、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催された。まだ他の医学系学会の多くが対面を併用した学会開催に踏み切れない時期ではあったが、大会長以下準備委員のご努力により併用学会を遂行し、多くの参加者が得られたことは今後の学術大会開催への参考になるものと思われる。

本学会は口腔外科医と矯正歯科医などが連携して顎変形症の研究と治療にあたるために創設された多分野によるユニークな学会であり、その特徴を生かすべくさまざまな活動を行なっている。次年度に施行予定の認定医制度は、日本口腔外科学会専門医と日本矯正歯科学会専門医取得者を前提としたアドバンス資格となっており、2つの分野の専門医がそれぞれ高度な専門性をもって顎変形症治療にあたることを目的としている。多くの患者様にとって有益な制度と考える。

本学会の前身の日本顎変形症学会と韓国のKorean Association of Maxillofacial Plastic and Reconstructive Surgeons学会との間で2001年に姉妹提携を結んでから20周年にあたるのを記念して、メール会議の形ではあるが記念式典を行った。また今後10年の連携の継続を調印し、学術大会における学会会員相互の交流をさらに活発にすることを謳っている。このような活動を通じて、今後、会員の人的交流が国内のみならずアジアや世界へと広がることをサポートして行く。

(文責：高野 正行)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11
 一ツ橋印刷(株)学会事務センター
 特定非営利活動法人日本顎変形症学会
 TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

[会員数] 2,419名 (令和3年3月31日現在)
 [設立年] 2005年(平成17年)7月1日
 [機関誌] 日本顎変形症学会雑誌年4回発行
 [認定医・専門医関連制度] 認定医準備中

一般社団法人 日本顎顔面補綴学会

理事長 米原 啓之



<https://jamfp.sakura.ne.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

本年度の日本顎顔面補綴学会第38回総会・学術大会は2021年6月3日～5日に奥羽大学歯学部歯科補綴学講座(有床義歯補綴学)山森徹雄教授を大会長として、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況を鑑み、Web開催として行われた。大会テーマ「私たちが提供すべき顎顔面補綴治療」のもと、九州歯科大学鱒見進一教授による特別講演「私と顎顔面補綴との関わり」やシンポジウム「顎顔面補綴の最新エビデンス—診療ガイドライン2019年版より—」および「病院歯科における顎顔面補綴治療」の2題、e-Posterによる一般演題23の発表が行われた。さらに6月5日には第25回教育研修会「粒子線治療の基礎と臨床」も行われた。次回第39回総会・学術大会は、宮崎大学医学部感覚運動医学講座顎顔面口腔外科学分野山下善弘教授を大会長として、2022年6月23日～25日の日程で宮崎県宮崎市ニューウェルシティ宮崎において開催予定である。

2. 学会活動について

学術雑誌「顎顔面補綴」第44巻1号は2021年6月に原著論文1編、研究論文1編を掲載して発行した。第44巻2号は2021年12月に原著論文2編、研究論文3編、認定医症例報告3編、総説4編、解説1編を掲載して発行した。また、日本顎顔面補綴学会ニュースレターはNo.33が6月に発行され、No.34は12月に発行された。日本歯科医学会連合より医療問題関連事業「歯科医療制度と歯科医療問題に関する資料収集および調査研究」の「課題」について依頼があり「上顎欠損患者の印象採得にかかる時間についての調査研究」を申請して採択された。また、医療技術評価提案書を「歯科口腔リハビリテーション料算定制限の見直し」、「顎欠損症例への軟質材料による直接法有床義歯内面適合法の適用」、「顎欠損患者への口腔機能管理料適応拡大」、「広範囲顎骨支持型装置の残存骨への埋入」、「睡眠時無呼吸症候群に対する口腔内装置の調整」の5課題について共同提案学会と作成し提出した。

本年度のトピックス

口腔顎顔面領域には、口腔腫瘍の治療、口唇口蓋裂をはじめとする先天性疾患および外傷などにより様々な組織欠損が生じる可能性がある。生命予後が重要なことはもちろんであるが、患者が快適に社会生活を送るために機能と整容の回復も非常に重要である。しかし、複雑な機能の維持と高い審美性が求められるため、医療技術の進歩した現在においても、患者の十分な満足が得られる結果を得ることは容易ではない。この困難を克服するために、本学会には補綴科、口腔外科、形成再建外科、摂食機能療法科、歯科技工士、歯科衛生士、言語聴覚士など多くの分野の専門家が会員として集い、学際的な活動をしている。各専門家が広く結集して連携を行うことで、患者のためを考え、その希望が十分かない満足できる治療を目指している。学際的な学会である特徴を生かし認定制度においても各種認定を行っており、2021年度は認定医89名、認定歯科技工士10名、認定言語聴覚士1名、認定歯科衛生士7名が学会認定資格を有している。また、顎顔面補綴治療を普及させることを目的として、「顎顔面補綴診療ガイドライン2019年度版」を作成して学会ホームページで公開している。さらに、専門性を生かしたチーム医療を推進するとともに、機能検査、補綴装置の改良、材料開発、衛生指導、言語指導などの多岐に亘るアプローチを通して、機能回復とQOLの維持が行えることを目的として「顎補綴装置解説書」も作成して公開している。

(文責：米原 啓之)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川2-4-11

一ツ橋印刷株式会社

学会事務センター内

TEL：03-5620-1953、FAX：03-5620-1960

E-mail：max-service@onebridge.co.jp

【会員数】540名(2022年1月19日現在)

【設立年】1984年(昭和59年)1月

【機関誌】「顎顔面補綴」ならびに「日本顎顔面補綴学会ニュースレター」を年2回発行

【認定医・専門医制度】顎顔面補綴認定医、同認定歯科衛生士、同認定歯科技工士、同認定言語聴覚士

特定非営利活動法人 日本顎咬合学会

理事長 黒岩 昭弘



<http://www.ago.ac/>

1. 学術大会・総会の開催について

第38・39回日本顎咬合学会学術大会・総会はWeb配信にて2021年6月12日～21日、「真・顎咬合学 今こそ団結！臨床力を磨く」をメインテーマに特別講演はBrian Mealey（テキサス大学サンアントニオ校）教授による特別講演、依頼講演112題、会員発表224題を配信、公開フォーラムは2021年7月17日～26日、「超高齢社会における歯科の役割」と「口腔がん」をテーマにWeb配信した。

学術大会参加登録数は6,200名であった。

2. 学会活動について

学術雑誌「咬み合わせの科学」第41巻は2021年5月（1・2号）に総説2編、原著論文3編、症例報告6編、依頼論文5編の論文を掲載した。2021年12月下旬に第3号発刊した。

提携英文誌であるJournal of Interdisciplinary Clinical Dentistry 2021年（vol.2 no.2）に1編掲載。また、第20回咬合フォーラム（8月7日～14日：Web配信）デジタルデンティストリーと咬合との接点を求めてをテーマとし、527名が参加。6支部合同で支部学術大会（10月29日～11月7日：Web配信）テーマは「真・顎咬合学の新たな展望」として1,972名参加、認定医教育研修会（11月26日～28日、12月17日～19日：Web配信）は第2弾「義歯を極める—咬合の与え方と咬合調整を考える—」のテーマで開催。

歯科衛生士認定研修I（2021年11月26日～28日：Web開催）テーマ「歯周病・歯周治療の基本」と「咬合の基本」で開催。

本年度のトピックス

今後の予定として、第38・39回学術大会振り返り配信（2022年1月14日～20日：Web配信）テーマを「あの感動をもう一度 ニチガクリターンズ」にて配信する。

第9回指導医研修会（2022年2月11日～13日、2022年2月18～20日：Web配信）テーマは「アフターコロナ時代を見据えた歯科医療を目指して」として配信予定。

次期大会は40回記念大会でテーマは「シン・顎咬合学最先端歯科治療と踏まえるべき歯科的伝統の融合を再考する」（2022年6月18日～19日：ハイブリットにて開催）特別講演：Dr. Edward Pat Allen教授公演予定。

会の運営方針として—『臨床力』を磨き国民の口腔機能を整える—をスローガンに、会員が咬合のエキスパートとして、分野に関わらずどの患者にも長期に安定した結果をもたらす治療ができる『臨床力』を絶えず研鑽するため、若手に教育研修体制を用意し、指導医や認定医には技術を支えるエビデンスを構築する体制を整えている。中長期的な目標として広告開示可能な日本歯科専門医機構が認定する歯科専門医制度の認証へ向け準備している。さらに日本歯科医学会専門分科会へのアプローチを考えている。アカデミアの一員としてさらなるグローバル化を目指したい。

（文責：黒岩 昭弘）

《問い合わせ先・事務局》

〒102-0093 東京都千代田区平河町1-8-2
山京半蔵門パレス 201
TEL：03-6683-2069, FAX：03-6691-0261

【会員数】 8,284名（2021年11月18日現在）

【設立年】 1979年（昭和54年）3月

【機関誌】 和文誌「咬み合わせの科学」年2回発行

【認定医・専門医関連】 認定医3,014名、指導医258名
（2021年11月18日現在）

日本磁気歯科学会

理事長 高田 雄京



<http://www.jsmad.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第31回日本磁気歯科学会学術大会は、大山哲生診療准教授（日本大学歯学部歯科補綴学第Ⅱ講座）を大会長として、去る2021年9月23日～25日にかけて第24回日本歯科医学会学術大会と併催で開催された。新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、Zoom会議システム（Zoomミーティング）を利用した開催形式で行われた。特別講演が1演題、テーブルクリニックが1演題、一般演題（eポスター）が10演題であった。特別講演では「磁性アタッチメント義歯を成功させるための術式と考え方」と題して、鶴見大学歯学部の大久保力廣教授にご講演いただいた。

2021年度総会（2021年9月24日）では、各委員会の事業報告後、本年度決算案と会計監査報告、次年度事業と次年度予算案が承認された。なお、次期第32回学術大会は、2022年11月4日～5日に北海道札幌市において、會田英紀教授（北海道医療大学歯学部高齢者・有病者歯科学分野）を大会長として開催される予定である。

2. 学会活動について

本学会は、磁気歯科学の進歩普及および歯科医療の発展向上を目的として、磁性アタッチメントのみならず、磁界や磁力に関する基礎的研究から臨床応用の実践まで、幅広く活動している。現在、磁性アタッチメント応用症例の長期的術後調査による臨床評価、磁気歯科学に関する用語集の作成、磁性アタッチメントの診療ガイドライン（HP上にアップ）の周知、磁性アタッチメント装着者を対象としたMRI安全基準マニュアル（2013年度版）および患者説明用リーフレット“ピタッと吸いつく磁石の入れ歯”（HP上にアップ）の周知活動等を行っている。国際規格化（2012年7月15日にISO13017の取得、2020年7月16日に第2版発行）を機に、今後も磁性アタッチメントの普及推進に向けて、本学会から国内外へと展開していく予定である。

本年度のトピックス

歯科用磁性アタッチメントが9月1日に保険収載になった。本学会が現在、そして未来に向けて進めてきた活動によって、最も高いハードルを越えた年となった。同時に、製造企業の一つであるNEOMAX エンジニアリング(株)から(株)ケディカに磁性アタッチメント製造の移譲が行われ、保険収載を機に製造企業も更新された。販売元はモリタ(株)で、保険収載の製品の「フィジオマグネット」は以前と同様であり、性能面でも全く変わらない。保険収載を受けて、学会員に留まらず多くの一般歯科医師からも推奨する術式や詳細な使用法など数多くの新たな質問が寄せられている。それに対応するため、磁性アタッチメントの術式の統一を推進するワーキンググループを新たに結成した。保険収載における「基本的考え方」の原稿案を作成するとともに、技工から臨床術式まで対応できる動画の作成と様々な質問への回答を可能にするHPの充実を推進中である。動画については、本学会のHPあるいは、日本歯科医師会で閲覧できるようになる予定である。また、本学会に各都道府県の歯科医師会等からの要請があれば、磁性アタッチメントに精通した講師の派遣も行っている。本学会では、保険収載により磁性アタッチメントが正しく臨床利用され、多くの患者さんに普及するよう術者側の立場に立ってより多くの情報を提供できるようにサポートしていく所存である。そのため、本学会の運営がスムーズで継続的になるよう学会事務局の業者委託運営を本年に実現し、学会運営体制の強化やHPの充実を推進する予定である。現在、本学会のHP上で学会費の支払いや新規会員登録も可能である。

（文責：高田 雄京）

《問い合わせ先・事務局》

〒160-0022 新宿区新宿 1-27-2-2F

(株)ケイ・コンベンション内

TEL：03-5367-2409, FAX：03-5367-2187

【会員数】 329名（2021年9月30日現在）

【設立年】 1991年（平成3年）

【機関誌】 和文誌「日本磁気歯科学会雑誌」年1回、英文誌「The Journal of the Japanese Society of Magnetic Applications in Dentistry」を年1回発行

【認定医・専門医関連】 日本磁気歯科学会認定医 27名、認定歯科技工士 1名（2021年10月15日現在）

一般社団法人 日本小児口腔外科学会

理事長 金子 忠良

<http://www.jspoms.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第33回日本小児口腔外科学会総会・学術大会を日本大学歯学部口腔外科学第Ⅱ講座教授 金子忠良大会長のもと、「新時代の小児口腔外科—新たなる環境への対応—」をテーマに、連合会館（公益財団法人総評会館）を現地会場とし、Webによるライブ配信とオンデマンド配信（一般演題・教育講演）形式にて開催された。2021年10月30日にライブ配信、10月30日～11月30日にかけて、オンデマンド配信が行われた。

特別講演Ⅰは東京医科大学小児科学・思春期学分野主任教授の河島尚志先生による「小児のウイルス感染症—インフルエンザを中心として—」、特別講演Ⅱは、東京医科大学名誉教授の三木保先生による「医療安全文化、そして歯科・口腔外科診療における医療事故調査制度の対応」が講演された。教育講演Ⅰは日本大学歯学部長、歯科放射線学講座教授の本田和也先生による「画像診断の有効性と摘要基準について」、教育講演Ⅱは楽山名誉院長、東京大学名誉教授の久保木富房先生による「小児後半期の口腔外科診察—SAD・PDを中心に—」が講演された。

さらに、一般演題、リフレッシュセミナーに加え、第9回認定医・指導医の申請・更新のための教育講演会も併催された。

●次年度の学術大会予定

大会長：矢郷 香（国際医療福祉大学三田病院歯科口腔外科教授）

期 日：2022年10月21日～22日

場 所：国際医療福祉大学 東京赤坂キャンパス

テーマ：「未来を拓く小児歯科医療」

2. 学会活動について

主な事業計画は以下の通りである。

①学術大会および総会の開催、②機関誌の発行、③各種委員会の開催、④研修会の開催、⑤認定医制度、⑥教育講演会の開催

本年度のトピックス

小児口腔外科認定医が子どもたちに最高水準の医療を提供するために、最新知識を受容できる場である教育講演会の重要性を鑑み、2021年度より教育講演会を年2回開催することにした。初のオンデマンド配信により、第8回認定医・指導医の申請・更新のための教育講演会を2021年6月21日～8月31日まで開催した。神奈川歯科大学副学長・大学院歯学研究科環境病理学教授の榎木恵一先生ならびに明海大学歯学部形態機能成育学講座口腔小児科学分野教授の星野倫範先生には、医療従事者にとって貴重な新型コロナウイルスに関する最新情報を講演いただいた。九州歯科大学健康増進学講座口腔機能発達学分野教授の牧憲司先生には「小児歯科医療について」、東京大学医学部感覚・運動機能医学講座口腔顎顔面外科学分野准教授の西條英人先生には「口唇口蓋裂治療における歯科医師の役割」と題して小児歯科と口腔外科との連携の重要性について講演いただき、合わせて4演題をオンデマンド配信で行った。コロナ禍で外出が制限される中、多数の参加をいただいた。

2021年10月29日～30日に開催された第33回学術大会ではライブならびにオンデマンド配信を併用し、参加者の安全と新型コロナの感染防止を最優先に考えた方式で行った。質疑討論についてはチャットの利用、HPによるフォームでの受付を行い、活発な議論ができる体制を整備した。

いずれも新たな形式での開催となったが、コロナ禍での学会活動の開催形式を模索し、小児口腔外科が進むべき指針を活発に議論し、共有できる環境作りに努めて参りたいと考えている。

（文責：金子 忠良）

《問い合わせ先・事務局》

〒115-0055 東京都北区赤羽西 6-31-5 (株)学術社内)

TEL：03-5924-1233, FAX：03-5924-4388

【会員数】 正会員 618 名 (2021 年 10 月現在)

【設立年】 1989 年 (平成元年)

【機関誌】 和文誌「小児口腔外科」年 3 回発行

【認定医・専門医など】 指導医 128 名, 認定医 68 名, 認定施設 55 施設

公益社団法人 日本顎顔面インプラント学会

理事長 嶋田 淳



<https://www.jamfi.net/>

1. 学術大会・総会の開催について

年1回の学術大会・総会を開催している。2021年12月11日～12日、第25回日本顎顔面インプラント学会学術大会・総会がメインテーマを「インプラント治療の安全哲学—新型コロナ時代の新たな取り組み」と題し、長尾徹先生を大会長として名古屋国際会議場で開催された。招聘講演は「患者に寄り添う」(小宮山彌太郎氏)、教育講演は「医療現場における「倫理教育」の困難さ～“moral sensitivity”を遅くするために～」(西村高宏氏)、理事長招聘講演「日本歯科専門医機構の現況と今後の展望」(今井裕氏)が企画された。また、日本学術会議と共催で市民公開講座や、シンポジウム、一般演題およびポスター発表が開催された。また、本大会はPan Pacific Implant Societyが併催された。次回第26回学術大会・総会は東京医科大学近津大地大会長のもとで行われる。

2. 学会活動について

本学会では、口腔顎顔面領域におけるインプラントに関する基礎的ならびに臨床的研究を推進し、この領域における口腔顎顔面外科を基盤とした正しいインプラントの知識と国民から信頼される良質なインプラント治療の普及を図り、もって我が国の学術の発展と口腔機能の回復による国民の健康増進に寄与することを目的として活動が行われている。活動内容は学術大会・総会を年1回、研修会を年3回開催し、適時理事会を開催して活動を行っている。現在の主な学会活動は「専門医制度の確立」「研修会の開催」「学術大会の充実」「学会誌・ニューズレターの定期的発刊」「調査研究」「診療ガイドライン策定」等である。専門医制度においてはエビデンスに基づいた高度で安全確実なインプラント外科医を目指している。また国民の医療の安心・安全を目的に「国際インプラント手帳」の発行や、口腔疾患と大きな関連のある喫煙について、口腔関連9学会と協同し脱タバコ社会実現に向けて取り組んでいる。日本歯科医学会のもと、診療報酬改定に向けた医療技術評価について提案した。

本年度のトピックス

1. 広告可能なインプラント歯科専門医への取り組み
（一社）日本歯科専門医機構の指導のもと、「国が広告可能と認める専門医制度」の確立にむけて取り組んでいる。
2. 論文投稿の電子化
2022年1月より論文投稿を電子化した。
3. 赤坂庸子若手研究奨励基金
名誉会員赤坂庸子先生（物故）の寄付により、若手研究者の育成のため奨励基金をスタートした。
(文責：又賀 泉/理事)

《問い合わせ先・事務局》

〒108-0014 東京都港区芝5-29-22-805
TEL：03-3451-6916, FAX：03-5730-9866
E-mail：jamioffice@gmail.com

[会員数] 1,420名 (2021年9月末現在)
[設立年] 1993年(平成5年)11月
[機関誌] 和文誌：日本顎顔面インプラント学会雑誌を年4回発行
[認定医・専門医] 指導医数215名, 専門医72名 (2021年9月現在)
[認定研修施設] 研修施設110施設, 准研修施設27施設 (2021年9月現在)

一般社団法人 日本外傷歯学会

理事長 木村 光孝



<http://www.ja-dt.org/>

1. 学術大会・総会の開催について

第21回学術大会は、2021年9月18日～19日の2日間、九州歯科大学において、大会長 細川隆司教授（九州歯科大学）のもとでコロナ禍で事前に抄録集を収録し策定し誌上開催とした。テーマは、「外傷歯の予防と治療の最前線」と題して、大会長講演は細川隆司教授による「インプラント補綴治療における力のコントロール—対合歯に生じる咬合性外傷をどう防ぐか—」、基調講演は八若保孝教授（北海道大学）による「外傷歯における歯根外部吸収への対応」、教育講演は森本泰宏教授（九州歯科大学）による「外傷歯を含めた歯科用コーンビームCTの読像と放射線被ばく」、特別講演Ⅰは岡藤紀正教授（松本歯科大学）による「歯の移動モデルを用いた外傷性ストレスに対する歯周組織変化」、特別講演Ⅱは川鍋仁准教授（奥羽大学）による「外傷歯治療に対する歯科矯正対応について考察する」、さらにシンポジウムⅠ～Ⅳ、一般口演14題が報告された。本学会は成長期から老年期に至るまで、長期臨床データを含めて、学術的根拠に基づいて教育・研究・臨床の立場から口腔から全身を診ている。

2. 学会活動について

外傷歯学は「口腔医学の立場から全身を診る」ことにある。成長期から老年期に至る外傷歯に関する咬合、咀嚼、嚥下機能による感覚受容器の重要性、さらに脳中枢の神経回路は口腔が入口でもあり、着地点でもあることを学術的根拠に基づいて教育・研究・臨床の立場から本学会の認定医、指導医により専門分野のご協力により活動を行っている。

さらに認定医、指導医は学会と併催して行われている認定医更新セミナーに出席し、長期臨床データの重要性を一般会員に指導している。生涯学習教育を含め一般臨床医と共に国民にハイレベルの医療を提供するためにも活躍している。

本年度のトピックス

第41巻から学会活動報告は「トピックス」として注目している国内外の一端を報告することとなった。今回は最初の報告であることから本学会活動の流れを報告する。日本歯科医学会には学術研究団体として5年に1度の審査があり専門分科会と認定分科会の2つが存在している。本学会は外傷歯学に基づいて成長期から老年期に至る最新の治療を行っている。そのためには専門分野のご指導とご協力を仰ぎながら前進している。本学会はアジア諸国を含めて世界に注目し、学会活動を行っている。木村光孝理事長のご指導によりアジア国際外傷歯学会（Asian International Association of Dental Traumatology (AADT)）を開催しており、2004年（北京大学）からスタートし、2005年（岡山大学）、2007年（台北医科大学）、2009年（北京大學）、2011年（愛知学院大学）、2013年（インドネシア大学）、2015年（九州歯科大学）、2017年（マヒドール大学）、2020年（サウスウエスタン大学フィリピン）で開催された。2022年はインド医科学研究所により10月1、2日（Hotel Hyatt Regency, New Delhi, India）で開催が決定している。基本的には2年に1度開催している。国際外傷歯学会（International Association of Dental Traumatology）は本学会からも発表し、常にNews Letterを通し活動している。本学会雑誌には外国からの投稿もあることから、第17巻第1号から英文の投稿規程を掲載することに決定した。認定医研修会は1、3、5月は西日本地区（大阪）で7、9、11月は東日本地区（東京）で実施している。コロナ禍で、人数を10～20名に限定、感染対策を厳重に実施しており、感染者は皆無である。認定医研修会は午前中講義、午後は実習を実施することにより、外傷歯処置に関して講義と実習を実施し成功裡に修了している。

（文責：岡藤 範正／理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒803-0862 福岡県北九州市小倉北区今町2丁目12-13
事務センター内（一社）日本外傷歯学会
TEL：093-562-6886, FAX：093-562-6887
E-mail：japan.assoc.dt@gmail.com

【会員数】1,048人（2021年11月30日）

【設立年】1998年（平成10年）

【機関誌】和文誌「日本外傷歯学会雑誌」年2回発行

【認定医・専門医など】認定医549人、指導医204人（2021年11月1日）

一般社団法人 日本口腔診断学会

理事長 伊藤 孝訓



<http://www.jsodom.org>

1. 学術大会・総会の開催について

第34回日本口腔診断学会学術大会および総会は、日本口腔内科学会と合同開催となり、外木守雄教授（日本大学歯学部口腔外科学第1講座）のもと、2021年9月9日～9月10日に「エッサム神田ホール」にてライブ配信で開催した。企画演題や一般演題は9月17日～9月30日までオンデマンド配信した。日本口腔内科学会との合同開催は今回で11回目を迎え、会員は両学会の講演・シンポジウム・会員発表を学ぶことができるために好評を得ている。

今回のテーマは、「口腔医療最前線」として、特別講演「睡眠医療最前線～まだ夢中～」、教育講演「クルーズ船～未知のウイルスとの闘いの序章～」 「100年企業カンロのブランド戦略」 「口腔診断・内科医療における安全上の注意点～カルテ記載・せん妄リスク～」、シンポジウム「COVID-19を不活化するMA-Tシステムを用いた口腔ケアと環境ケア方法の開発」 「頭頸部癌の新規治療法」 「舌痛症患者対応の最前線」、公開CPC「この病変、診断がつかますか」を組み込み盛会に行われた。広義なテーマで研修する機会を提供することで、従来の臓器別診療や専門診療の枠組みにとらわれることなく、症状を起点に幅広い疾患を診断するという特徴から、本学会が担う社会的役割を果たし、今後の歯科界への影響は大きいと考える。

2. 学会活動について

本学会の会員数、機関誌発行状況、認定医・指導医等については右段文末の通りである。口腔診断学は縦割りな専門科の学問体系を横断的に結びつける臨床歯科医学として、口腔外科系および診断系を中心に放射線系、保存系、補綴系と様々な専門分野の会員がその専門性を活かし、互いを尊重しながら研究のみならず教育および臨床を探求する学問として前進し続けている。日頃の学会活動に加えて、専門が近似する学会との合同開催も基本理念に基づいて実施している。本年は、代議員、理事、監事が任期満了を迎え、選出規定に基づき選挙を行い、2021・2022年度次期役員を決定し、伊藤理事長が第3期活動を開始した。

本学会は、機関誌において発刊当初より症例報告について多くの掲載を勧めている。その理由は中核となる診断（臨床）推論や診査法について、総論だけでは理解がしにくいいため、最適な学修法である「症例カンファレンス」を紙面で表せるように努め、会員がより理解しやすくすることで多くの症例を学修できるのが特徴である。

本年度のトピックス

学術集会・総会、機関誌の発行、認定制度の施行、関連学会との連携等の事業活動は、新型コロナの蔓延による活動制限がかかっているが、ほぼ順調に継続している。

令和3年度日本歯科医学会プロジェクト研究費に応募申請して、これからの歯科医療のDX（AI・デジタルテクノロジーの応用）の分野で、東京歯科大学口腔病態外科学講座片倉 朗教授が獲得した。研究題名は「Extended Reality技術を応用し sustainable な歯科教育を確立する」である。卒前における臨床実習で直接的な患者実技実習の実施が難しくなり、患者体験前の技術の獲得をより確かなものとするために、急速に普及している Extended Reality（XR）技術が重要な教育研修手法となっている。Augmented Reality（AR：拡張現実）・Mixed Reality（MR：複合現実）・Virtual Reality（VR：仮想現実）は、医療分野でも3次元的空間認識の向上が、医療分野の技術修得・習熟においてその有用性が注目されている。

また、基本的技能修得に加えて、診断力の修得は極めて重要である。現在、本学会の目途を表す教科書の意味合いの「新口腔診断学」について、日本口腔診断学会が監修して作成を進めている。臨床（診断）推論を基礎知識とした症候学を中心として、多くの臨床歯科医が現場で活用できるバイブルを目指している。初診外来における診断の流れに関わる歯科医学知識として、医療面接、臨床診断、検査、診察等を具体的に明示している

（文責：伊藤 孝訓）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷株式会社 学会事務センター内
一般社団法人日本口腔診断学会

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

E-mail：info@jsodom.org

【会員数】正会員 1,302 名、名誉会員 8 名（2021 年 7 月 31 日現在）

【設立年】1988 年（昭和 63 年）

【機関誌】和文誌「日本口腔診断学会雑誌」年 3 回発行
【認定医など】認定制度を 2007 年（平成 19 年）1 月 1 日より施行。認定医 221 名、指導医 89 名、研修機関指定 42 施設

一般社団法人 日本口腔腫瘍学会

理事長 太田 嘉英



<https://jsoo.org/>

1. 学術大会・総会の開催について

第39回日本口腔腫瘍学会総会学術大会は“「口腔がん わかっていること わからないこと」—既知の世界と未知への扉—”をメインテーマに、栗田浩大会長（信州大学医学部歯科口腔外科学教授）のもと、1月28日～2月21日にWeb開催された。海外招待講演1題、特別講演（兼教育研修会）1題、教育セミナー（兼教育研修会）5題、今回の看板企画であるミニレクチャー「わかっていること、わからないこと」を10題、臨床研究オーディション「未知への扉」は公募にて行われ4研究がエントリーされた。ビデオセッション7題、一般演題も多数、その他盛りだくさんの企画で盛会裏に終了した。コロナ禍によりWebとなったが、特に手術やレクチャーなど繰り返し見ることができることから大変好評であり、今後の方向性を示す大会となった。第40回総会・学術大会のテーマは「口腔がん エビデンスとセンス」、2022年2月14日～3月13日にオンデマンドおよびライブ配信で横尾聡大会長（群馬大学大学院医学系研究科 口腔顎顔面外科学講座・形成外科学講座 教授）のもと開催される予定である。

2. 学会活動について

学術雑誌「日本口腔腫瘍学会誌」は年間4号（3月、6月、9月、12月）発行されている。第33巻は総説2編、原著4編、症例報告21編の全27編の論文を掲載した。特に今年度は論文の査読を迅速化し、原則として1週間程度で採否の方向性を示すことにより日進月歩のがん治療に対して速やかな学術活動を行うことができるような環境を整備した。口腔癌取り扱い規約、口腔癌診療ガイドライン、領域横断的癌取り扱い規約は日本癌治療学会のオフィシャルとして広く公開されている。また本学会は口腔がん治療の世界的な学会である International Academy of Oral Oncology の日本におけるオフィシャルパートナーであり、国際的な学術交流も盛んに行っている。本学会は、主に口腔がんや歯原性腫瘍、口腔ケア、口腔機能管理などの臨床および基礎研究をメインに、広く学術活動を行っている。

本年度のトピックス

がんの発生原理は細胞が新陳代謝をする際のコピーミスである。以前は臓器ごとに別な疾患としてとらえられてきたが、現在では遺伝子変異が同一であれば発生部位や病理組織型が異なっても共通なもの、という考え方が常識的になってきている。すなわち「がんはどこにできてでも全身病」。これらに対応し、「口腔がんはどこで診てもらったらいいいのかわからない」という国民の声にこたえるため日本口腔腫瘍学会は口腔がんの専門学会として、2013年より口腔がん専門医制度をスタートさせ認定を行ってきた。認定要件は3階建てで、日本口腔外科学会の「口腔外科専門医」を1階、医科歯科共通のカリキュラムおよび試験によって認定されるがん治療認定医機構「がん治療認定医」を2階とし、さらに口腔がん診療について研鑽を積んだスペシャリストとしての「口腔がん専門医」を認定し質の高さを担保している。

口腔がんの7割以上は歯科医によって発見され口腔外科（腫瘍）医によって治療されるといわれている。歯科医師の診断能力が口腔がんから国民を守る、本学会では歯科医師会等によって行われる口腔がん検診や口腔癌診断能力向上のためのサポートも重要な事業と考えている。

ご要望がありましたら学会事務局までお気軽にお声かけください。皆様と一緒に働けますことを楽しみにお待ちしております。

（文責：太田 嘉英）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11
 一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内
 TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

【会員数】 1,901名（2021年12月31日現在）

【設立年】 1983年（昭和58年）

【機関誌】 「日本口腔腫瘍学会誌」年4回発行

【認定医・専門医制度】 口腔がん専門医 49名、暫定口腔がん指導医 106名、指定研修施設 75施設

一般社団法人 日本口腔リハビリテーション学会

理事長 覚道 健治



<http://www.jaor.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第35回一般社団法人日本口腔リハビリテーション学会総会・学術大会は、大阪歯科大学歯学部高齢者歯科学講座高橋一也教授を大会長、川本章代准教授を実行委員長、井上太郎助教を準備委員長に、「睡眠から考えるリハビリテーション医学」のテーマで、2021年11月20日～12月3日にオンデマンド配信でWeb開催がなされた。特別講演は和歌山県立医大の田島文博教授、基調講演は日本大の外木守雄教授、教育講演は関西電力病院立花直子センター長がそれぞれ講演され、「睡眠と口腔リハビリテーション」のシンポジウムが奥野健太郎、山口泰彦、佐々生康宏諸氏により発表された。口演12題、e-ポスター9題の一般演題と認定医研修セミナー（北海道大 山口泰彦教授）及び認定関連専門職セミナー（県立広島大 栢下 淳教授）が配信された。大会参加登録者は168名であった。

第36回大会は、北海道大学大学院高齢者歯科学教室山崎 裕教授のもと「診療室と地域を繋ぐ口腔リハビリテーション」をテーマに2022年11月19日～20日に北海道大学学術交流会館で開催される予定である。

2. 学会活動について

理事長1名、副理事長2名、理事22名、監事2名で理事会が構成され、その傘下に認定委員会、編集委員会、医療委員会、COI委員会、専門医制度準備委員会、表彰委員会および用語委員会の7常置委員会と、専門分科会昇格申請準備委員会および咀嚼・食塊形成機能検査のエビデンスに関する委員会の2特別委員会があり活動を行っている。学会誌「日本口腔リハビリテーション学会雑誌」を年1回発刊し、原著4編、症例報告3編計7編の論文を掲載している。令和2年度日本歯科医学会プロジェクト研究の公募に本学会は応募し、日本歯科大学菊谷 武教授を研究代表者に「ウイズコロナ時代、人口減時代の歯科診療におけるICT技術導入の有効性に関する研究」の題目で採択された。

分野の医科・歯科連携の大きな第一歩となった。

第24回日本歯科医学会学術大会がパシフィコ横浜で、ライブ/オンデマンドのハイブリッド配信で開催され、2021年9月23日に本学会からシンポジウム『「食べる・飲む」機能の障害と口腔リハビリテーション その仕組みと展望』が企画・配信された。井上 誠先生には、近年の新知見を加えた「食べる・飲む」機能の仕組みの概略について、野原幹司先生には、歯科が行う「食べる・飲む」機能の検査法と食塊形成機能の内視鏡による3つの評価基準と評価法について、菊谷 武先生には、「食べる・飲む機能」が障害された患者さんに対して在宅などの実践の場における歯科からの介入の活動と臨床の実態について、栢下 淳先生には、「食べる・飲む」ための食形態と栄養管理と本年改訂された嚥下調整食の学会分類2021の内容がそれぞれ発表された。

令和4年度診療報酬改定に関する医療技術評価提案書「咀嚼・食塊形成機能検査（内視鏡を含む）」を本学会が提案・作成し、厚生労働省に提出した。経鼻内視鏡下での嚥下機能検査が医科点数として存在しているが、この機器を使用した検査を「咀嚼・食塊形成機能検査」として歯科点数の中に組み入れ、実際に行われている口腔リハビリテーション業務を歯科点数の中で報酬化したいことが趣旨である。

（文責：覚道 健治）

本年度のトピックス

2021年6月10日～13日に国立京都国際会議場で第58回日本リハビリテーション医学会が、和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座田島文博教授のもとで開催され、同学会から日本口腔リハビリテーション学会に合同シンポジウム開催の申し入れがあった。菊谷 武、糸田昌隆、梅本安則、白石 愛の諸氏が「リハビリテーション医療を支える口腔機能と歯科治療」のテーマの基にリハビリテーション医療における口腔リハビリテーションの役割と意義について討議された。学会レベルでのリハビリテーション

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

【会員数】600名（2021年11月1日現在）

【設立年】1987年（昭和62年）

【機関誌】「日本口腔リハビリテーション学会雑誌」年1回

【認定医・専門医など】認定医123名、指導医41名、暫定指導医9名、認定歯科衛生士40名、認定言語聴覚士1名（2021年11月19日現在）

一般社団法人 日本口腔顔面痛学会

理事長 松香 芳三



<https://jorofacialpain.sakura.ne.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第26回日本口腔顔面痛学会学術大会は、ハイブリッド形式（現地開催＋後日オンデマンド）で2021年11月20～21日に、井川雅子大会長（静岡市立清水病院）により、「No Brain No Pain」をメインテーマに開催された。特別講演「Nociplastic pain—神経可塑性と痛みをつなぐ脳機構」をはじめ、17もの講演・セミナー・シンポジウム等が行われ、感染対策に配慮しながら会場では多くのディスカッションが行われた。

本学術大会は日本頭痛学会と同会場での開催で、展示会場も共通で相互に情報交流ができた。頭痛の発症メカニズムは口腔顔面痛とも類似点が多く、会期中には三叉神経系疼痛処理の特異性に関するシンポジウムや一次性頭痛に関する共同企画も開催された。

後日オンデマンドは学会の運営する専用アプリにて12月15日から1か月間視聴可能とし、地方在住や子育て世代の会員に好評であった。

2. 学会活動について

本学会は本邦歯科領域では唯一の疼痛専門学会であり、痛みの発症メカニズムの研究、診断・マネジメントに関する臨床研究、診療基盤の構築、教育活動を行っており、関連医科や多職種との合同活動や国際学会との連携も非常に活発である。会員のための資質向上セミナーも多数開催し、COVID-19感染拡大時その活動を止めることなく、早期からオンデマンドやオンライン形式で継続した。2021年は、1月にオンデマンドで心理社会的因子と慢性疼痛に関する「精神医学セミナー」を開催し、3月にはオンラインで4学会による神経障害性疼痛関連歯科学会合同シンポジウムを、7月はオンデマンドで口腔顔面痛ベーシックセミナーを開催した。Web上では多くの質疑応答やディスカッションが交わされた。

歯科の中での境界領域、また医科と歯科の境界領域を扱う本学会では、今後も積極的に本邦の口腔顔面痛診療の質の向上に取り組むと考えている。

本年度のトピックス

国際口腔顔面痛分類第1版（国際疼痛学会）が本学会員も参画して出版され、その翻訳を日本頭痛学会と連携し実施した。その中で口腔顔面痛は、①歯と歯槽部および解剖学的に関連する構造の障害によるもの、②筋膜性口腔顔面痛、③顎関節痛、④脳神経の病変または疾患によるもの、⑤一次性頭痛の症状に類似するもの、⑥特発性口腔顔面痛、⑦心理社会要因によるもの、に分類された。今後、この新たな分類に沿った臨床統計や研究が期待される。

国際疼痛学会／日本疼痛学会／ファイザーによる「日本における疼痛治療の抜本的改革を支援する教育プログラム」に本学会の申請が採択され、慢性口腔顔面痛の学習管理システムの開発を継続しているが、まもなくアプリが公開予定である。多くの歯科医師、医療従事者に利用していただき、口腔顔面痛の啓発に役立つ事を願っている。

今般のCOVID-19感染拡大により注目されたテレビ電話等を用いた遠隔診療は、投薬、運動療法やカウンセリングによる疼痛マネジメントに応用可能と考え、「歯科診療における情報通信機器等を用いた診療についてのルール整備に向けた研究」（厚生労働行政推進調査事業補助金）において、口腔顔面痛の遠隔診療の可能性に関する調査を実施した。その結果、口腔顔面痛マネジメントにおける遠隔診療の重要性が示された。

また、医科において痛みに関する基礎・臨床研究を進めている7学会と共同で「日本痛み関連学会連合」を設立し、連合設立シンポジウムを開催するとともに、痛みの新しい概念であるNociplastic pain（痛覚変調性疼痛）の定義・翻訳などを行った。

（文責：村岡 渡／総務担当常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷株式会社

学会事務センター内

TEL：03-5620-1953 FAX：03-5620-1960

E-mail：jsop-service@onebridge.co.jp

【会員数】 881名（2021年12月20日現在）

【設立年】 2009年（平成21年）

【機関誌】 和文誌「日本口腔顔面痛学会誌」年1回発行、
News Letter 年16回発行

【認定医・専門医など】 認定医174名、専門医105名、
指導医74名、認定研修施設39施設

一般社団法人 日本口腔検査学会

理事長 福本 雅彦



<https://jsedpl.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第14回日本口腔検査学会総会・学術大会は2021年8月21日～22日の両日に柴 秀樹大会長（広島大学大学院医系科学研究科歯髄生物学研究室 教授，広島大学病院 口腔検査センター長）のもと、「次世代歯科医療の実現に向けたチャレンジ～遺伝子検査の導入を探る～」をテーマにWeb開催された。理事長講演として福本雅彦先生により「なぜ歯科医療に検査が必要か？」，特別講演1として「遺伝子検査」を演題とした川上秀史先生（広島大学原爆放射線医科学研究所分子疫学研究分野 教授），特別講演2として「口腔検査によるテロメア・マイクロRNA検査の未来」を演題に田原栄俊先生（広島大学大学院医系科学研究科細胞分子生物学研究室 教授）のご講演を賜った。シンポジウムでは「口腔・顎顔面領域疾患への遺伝子学的検査導入の展望について」をテーマに4名のシンポジストによりプレゼンテーションが行われた。今回は一般演題26題が発表され，盛会のなか終了した。

●次年度の学術大会予定

- 第15回日本口腔検査学会学術大会
- 会 期：2022年11月12日～13日
- 会 場：神奈川県歯科医師会館
- 大会長：武内博朗先生（(医) 武内歯科医院理事長，日本大学歯学部臨床教授）

2. 学会活動について

本学会は「歯科医療に検査を根付かせる。」を目的として学会活動を行っている。この目的達成のため以下のような活動を実施した。学術大会の開催に関しては前項参照していただく。2021年3月に学会誌を発行し，会員への各種検査の有用性を周知した。更にHPを全面リニューアルすることにより会員や社会への発信力の強化を図った。2021年6月からは会員の資質向上のため，「歯科医療に検査を活かすシリーズ研修」として2021年度末までに11回の講習会の実施を予定している。「検査は医療従事者の共通言語」であり歯科医療従事者は口腔領域のみならず全身的検査項目に関しても幅広い知識を持ち，口腔と全身状態を連動させる能力を身につけることは現代医療において不可欠であると考え。本学会はこのような人材の育成に注力していく。

本年度のトピックス

近年の社会におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）分野の発展成長は著しい。しかしながら歯科医療において，その発展は十分にフィードバックされているとは言えない。そこで，2022年度の第15回学術大会において「全方位の臨床検査は歯科医療を変える。～検査におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）に向けて～」をテーマに掲げたように歯科医療へのデジタル技術の導入に力を注ぐ戦略を立案している。具体的には口腔領域で使われている各種検査機器に，統一した通信機能を搭載し，統一された検査方法で実施した検査結果を電子カルテや開業歯科診療所のレセプトコンピューターで一元管理できるようにする。そのために本学会が各検査機器メーカーや関連各所など産・官・学・民の調整役を担うことで具現化を図る。このことにより患者検査結果管理を容易にすること，各検査機器での測定結果データをレセコンなどに再入力する時間的な無駄および転記ミスを防止できるなど大きなメリットがある。なにより最大の目的は，これらのビッグデータを活用することにより口腔領域の環境の変化が全身に及ぼす影響を解析することを可能にすることである。これにより糖尿病をはじめとした口腔領域の状況と全身疾患が相互に密接に関連していることが明らかにされてきている現代において，口腔管理が国民の健康維持ひいては健康寿命の延伸に大きく寄与することが可能であると考え。

（文責：福本 雅彦）

《問い合わせ先・事務局》

〒277-0872 千葉県柏市十倉二 155-17
株式会社ディーアソシエイツ内
TEL：050-1741-4075
E-mail：info@jsedpl.jp

【会員数】270名（2022年1月19日現在）

【設立年】2007年（平成19年）

【機関誌】「日本口腔検査学会雑誌」年1回

【認定医・専門医など】認定医46名（2022年1月19日現在）

一般社団法人 日本口腔内科学会

理事長 中村 誠司

<https://jsom.sakura.ne.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

2021年度第31回日本口腔内科学会学術大会は日本口腔診断学会と合同で、外木守雄大会長（日本大学歯学部口腔外科第1講座・教授）のもと、「口腔医療最前線」というテーマで開催した。開催形式はWebでのライブ配信ならびにオンデマンド配信のハイブリッド、会期は2021年9月9日～10日とした。内容としては、特別講演：1演題（塩見利明先生・広島大学）、教育講演：3演題（櫻井滋先生：SMD/静眠室メディカルデザイン・静眠堂スリープラボシステムズ、三須和泰様：カンロ株式会社、水沼直樹先生：東京神楽坂法律事務所）、シンポジウム：4企画・計12演題、一般口演：35演題、ポスター発表：57演題であった。

2. 学会活動について

従前どおり、年1回の学術大会を前述のような内容で開催した。本学会は、日本口腔診断学会、日本口腔検査学会、日本臨床口腔病理学会などの関連学会との交流を目的として積極的に合同で学術大会を開催しており、今年度は日本口腔診断学会との合同開催となった。他学会との連携を深めることにより、より活発で有意義な学術大会となっている。

一方、和文誌である日本口腔内科学会雑誌は2回、英文誌であるJournal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology（本学会はOral Medicineのセクションを担当）は6回発行した。

令和元年度に開始した専門医制度は、指導医：14名、専門医：9名、認定医：17名、研修施設：6件の申請を受け付けているが、コロナ禍の影響により認定医試験は延期している状況である。

特筆すべきこととしては、日本歯科薬物療法学会、日本老年歯科医学会、日本口腔ケア学会との4学会合同で口腔乾燥症の新分類案を作成しており、既にパブリックコメントを受けての修正を終え、現在は4学会による最終承認を求めている状況である。

本年度のトピックス

本年度のトピックスは、何よりも本学会が日本歯科医学会の認定分科会に認定され、初めての活動報告の機会を与えていただいたことである。口腔内科学という学問領域は、口腔診断学、歯科放射線学、口腔病理学、臨床検査学、口腔薬理学、口腔微生物学など、多くの領域にまたがっているが、口腔内科学が基本的には口腔粘膜疾患を主とする口腔疾患を系統的に診断する診断学および治療学である点で、他の学問領域とは明確に異なっている。また、口腔内

科学や歯科薬物療法学とも、治療学としての目的・方針および対象となる疾患・病態が異なる。さらに、口腔内科学で対象とする疾患は、前述のように口腔粘膜疾患が主であるが、ドライマウス、ウイルスや真菌による感染症、味覚異常などの多彩な疾患を含む。それらの疾患の診断、病態の理解、治療の際には全身状態の把握が必須であり、有病者や周術期の口腔機能管理においても重要であることから、医科に最も隣接した歯科領域とも言える。今後は、日本歯科医学会の認定分科会として、歯科臨床、歯学研究、歯学教育の全てにおいて、独自かつ重要な役割を担っていく所存である。

また、密な情報交換や連携を通して学術活動の活性化を図ることを目的として、今後も学術大会は他学会との合同開催を積極的に行う方針としており、新たに日本歯科薬物療法学会や日本口腔感染症学会等を加えた、コンソーシアム的な合同開催を検討している。この新たな学術大会の開催形式により、学会会員にとってより有意義なものになり、ひいては学術活動の活性化に繋がればと期待している。

(文責：中村 誠司)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

[会員数] 総会員数：852名（正会員821名、名誉会員28名、図書館会員3名、2021年10月1日現在）

[設立年] 1991年に口腔粘膜疾患研究会として設立され、1995年に日本口腔粘膜学会に、さらに2011年に現在の日本口腔内科学会に改称し、2014年には一般社団法人日本口腔内科学会に改組

[機関誌] 年2回学会雑誌を発行（J-STAGE 電子発行同時）

[認定医・専門医制度] 2019年10月1日より施行（現時点で指導医：113名、専門医：127名、認定医：31名、研修施設：51施設）

特定非営利活動法人 日本睡眠歯科学会

理事長 外木 守雄



<https://jadsm.jp/index.html>

日本睡眠歯科学会は2021年4月日本歯科医学会認定分科会に登録を認められた。本会は口腔と関連する睡眠障害の研究と臨床を推進し治療に関わる歯科医師、医師、デンタルスタッフの教育を進め、高度で専門的な睡眠歯科医療を提供して、広く国民の健康増進と福祉に貢献することを目的に2003年設立された。宜しくお願ひします。

1. 学術大会・総会の開催について

現在まで、20回の学術集会、総会、各種セミナーを開催し、2021年11月26日～28日北九州国際会議場にて、九州歯科大学の鱗見進一大会長のもと、第20回集会がハイブリッド開催された。

2. 学会活動について

本学会機関誌には、年4回刊行の『睡眠口腔医学』と海外学会との連携誌である『Sleep and Breathing』がある。また本学会は関連学会である医科系の日本睡眠学会、日本睡眠検査学会と密接に連携し、日本睡眠学会で認定する「睡眠医療歯科専門医」に加え、本会独自の「睡眠歯科学会認定医・指導医」の取得が可能である。

本年度のトピックス

2022年11月18日～20日沖縄県名護市万国津梁館で沖縄県歯科医師会、北部歯科医師会の後援を得て第21回集会を開催予定である。特別講演には、首里城再建委員会委員長で再建の先頭に立っている琉球大学名誉教授 文学博士 高倉倉吉先生をお願いしている。また、市民公開講座、子供を対象とした『子供睡眠歯科学会』を開催し、多くの市民に睡眠歯科医療を知ってもらう機会を作る。多くの参加をお待ちしている。

(文責：外木 守雄)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷株式会社

学会事務センター内

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

[会員数] 867名 (2022年1月6日現在)

[機関誌] 和文誌「睡眠口腔医学」年3回、抄録号1
回発行、関連英文誌「Sleep and Breathing」

[認定医] 91名 (2021年11月現在)

[指導医] 64名 (2021年11月現在)

令和4年度日本歯科医学会専門分科会総会一覧表

(令和4年1月現在)

専門分科会名	総会(学会)	開催期間・場所	責任者	連絡先・電話
歯科基礎医学会	第64回学術大会・総会	9月17日(土)~19日(月) 徳島大学蔵本キャンパス	徳島大学大学院医歯薬学研究所 口腔顎顔面形態学分野 馬場 麻人 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873 e-mail: jaob63@kokuhoken.jp
日本歯科保存学会	2022年度春季学術大会 (第156回)	6月16日(木)~29日(水) Web開催	奥羽大学歯学部歯内療法学 木村 裕一 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873
	2022年度秋季学術大会 (第157回)	11月10日(木) ・11月11日(金) 岡山コンベンションセンター	岡山大学大学院歯周病歯学 高柴 正悟 教授	株式会社日本旅行 大阪法人営業統括部 MICE 営業部 岡山 TEL: 086-225-9281 / FAX: 086-225-9305
日本補綴歯科学会	第131回学術大会	7月15日(金)~17日(日) 未定	岡山大学大学院歯周病歯学岡山大学大学院 窪木 拓男 教授	未定
日本口腔外科学会	第67回総会・学術大会	11月4日(金)~6日(日) 幕張メッセ	日本大学歯学部口腔外科学第1講座 外木 守雄 教授	(株)日本旅行 東日本法人支店 TEL: 03-6892-5104 / FAX: 03-6892-1830 E-mail: jsoms2022@nta.co.jp
日本矯正歯科学会	第81回学術大会	10月5日(水)~7日(金) 大阪国際会議場	大阪歯科大学歯科矯正学講座 松本 尚之 教授	第81回日本矯正歯科学会学術大会運営事務局 TEL: 03-5549-6913 / FAX: 03-5549-3201 E-mail: jos-meeting@intergroup.co.jp
日本口腔衛生学会	第71回総会	5月13日(金)~15日(日) Web開催	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 予防歯科学分野 於保 孝彦 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873 E-mail: jsob69@kokuhoken.jp
日本歯科理工学会	第79回学術講演会 (春期)	5月21日(土)・22日(日) いわて県民情報交流センター アイーナ	岩手医科大学歯学部医療工学講座 武本 真治 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873
	国際歯科材料会議 2022/IDMC2022 第80回学術講演会併催	11月4日(金)・5日(土) Chang Yung-Fa Foundation International Convention Center, Taipei, Taiwan	未定	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873
日本歯科放射線学会	第62回学術大会・ 第18回定例総会	6月3日(金)・4日(土) Web開催	朝日大学歯学部 勝又 明敏 教授	日本歯科放射線学会事務局 TEL: 03-5620-1953 / FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsomr@onebridge.co.jp
日本小児歯科学会	第60回大会	5月19日(木)・20日(金) 幕張メッセ国際会議場	日本大学歯学部小児歯科学講座 白川 哲夫 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873 E-mail: jsdp60@kokuhoken.jp
日本歯周病学会	第65回春季学術大会	6月3日(金)・4日(土) 京王プラザホテル	日本大学歯学部保存学教室歯周病学講座 佐藤 秀一 教授	(株)日本旅行 大阪法人営業統括部 MICE 営業部 TEL: 06-4256-3869 / FAX: 06-6204-1763 E-mail: jsps65@nta.co.jp
	第65回秋季学術大会	9月2日(金)・3日(土) 仙台国際センター	東北大学大学院歯学研究科歯内歯周治療学分野 山田 聡 教授	(株)日本旅行 大阪法人営業統括部 MICE 営業部 TEL: 06-4256-3869 / FAX: 06-6204-1763 E-mail: jsps65@nta.co.jp
日本歯科麻酔学会	第50回総会・学術集会	10月27日(木)~29日(土) 昭和大学上條記念館	昭和大学歯学部全身管理歯科学講座 歯科麻酔科学部門 飯島 毅彦 教授	(株)ピーシーオーワークス TEL: 03-3291-3636 / FAX: 03-3291-3635 E-mail: jsa50@pcoworks.jp
日本歯科医史学会	第50回総会・学術大会	10月1日(土) 東京ガーデンパレス	日本歯科医史学会 高山 直秀 先生	日本歯科医史学会事務局 TEL: 047-360-9440 / FAX: 047-360-9439 e-mail: jsdh1967@gmail.com
日本歯科医療管理学会	第63回総会・学術大会	6月18日(土)・19日(日) いわて県民情報交流センター アイーナ	岩手医科大学 口腔医学講座予防歯科学分野 岸 光男 教授	(有)ヤマダプランニング TEL: 019-635-6011 / FAX: 019-635-6033 E-mail: jsdpa63@yamada-plammomg.co.jp
日本歯科薬物療法学会	第42回総会・学術大会	10月1日(土)・2日(日) 鹿児島大学稲盛会館	鹿児島大学歯学部 上川 善昭 准教授	未定
日本障害者歯科学会	第39回総会および 学術大会	11月4日(金)~6日(日) 倉敷アイビースクエア・ 倉敷市民会館	岡山大学病院 江草 正彦 教授	株式会社JTB コミュニケーションデザイン TEL: 092-751-3244 / FAX: 092-751-3250 E-mail: jsdh39@jtbcom.co.jp
日本老年歯科医学会	第33回学術大会	6月10日(金)~12日(日) りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館	新潟大学大学院医歯学総合研究科 包括歯科補綴学分野 小野 高裕 教授	(株)シンセンメディカルコミュニケーションズ TEL: 025-278-7232 / FAX: 025-278-7285 Email: 33jsjg@shinsen-mc.co.jp
日本歯科医学教育学会	第41回学術大会	7月23日(土) ~8月20日(土) Web開催	日本歯科大学 藤井 一維 学長	(株)シンセンメディカルコミュニケーションズ TEL: 025-278-7232 / FAX: 025-278-7285 Email: jdea41@shinsen-mc.co.jp
日本口腔インプラント学会	第52回学術大会	9月23日(金)~25日(日) 名古屋国際会議場	愛知学院大学歯学部高齢者・ 在宅歯科医療学講座 口腔インプラント科 村上 弘 教授	(株)コングレ中部支社内 TEL: 052-950-3430 / FAX: 052-950-3370 e-mail: jsai52@congre.co.jp
日本顎関節学会	第35回総会・学術大会	7月2日(土)・3日(日) 札幌市教育文化会館	北海道大学大学院歯学研究院 口腔機能学分野冠橋義歯補綴学教室 山口 泰彦 教授	(株)コンベンションワークス内 TEL: 011-827-7799 / FAX: 011-827-7769 E-mail: jsst35@c-work.co.jp
日本臨床口腔病理学会	第33回総会・学術大会	9月22日(木)~24日(土) 札幌市教育文化会館	北海道医療大学歯学部生体機能・病態学系 臨床口腔病理学分野 安彦 善裕 教授	北海道医療大学歯学部臨床口腔病理学 TEL: 046-822-9537 / FAX: 046-822-9537 e-mail: jsop-info@sksp.co.jp
日本接着歯学会	第41回学術大会・ 国際接着歯学会 (IAD2022@sapporo)	6月3日(金)~5日(日) 北海道大学学術交流会館	第41回日本接着歯学会学術大会 朝日大学歯学部口腔機能修復学講座 歯科保存学分野歯冠修復学 二階堂 徹 教授 国際接着歯学会 (IAD2022@sapporo) 大会長 北海道大学大学院歯学研究歯科保存学教室 佐野 英彦 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873 e-mail: iad.jsad41@kokuhoken.jp
日本歯内療法学会	第43回学術大会	7月9日(土)・10日(日) 札幌グランドホテル	坂東歯科医院 坂東 信 先生	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873 e-mail: jea43@kokuhoken.jp
日本レーザー歯学会	第34回総会・学術大会	11月26日(土)・27日(日) 東京医科歯科大学 M&Dタワー2階	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 歯周病学分野 歯周光線治療学担当 青木 章 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873 E-mail: jsld34@kokuhoken.jp
日本スポーツ歯科医学会	第33回総会・学術大会	12月3日(土)・4日(日) 銀座プロサラム中央会館	東京歯科大学口腔健康科学講座 スポーツ歯学研究室 武田 友孝 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873
日本有病者歯科医療学会	第31回記念学術大会	4月29日(金)~5月1日(日) 沖縄コンベンションセンター	日本歯科大学生命歯学部歯科麻酔学講座 砂田 勝久 教授	沖縄 MICE サービス (株式会社アカネクリエーション内) TEL: 098-862-8280 / FAX: 098-862-8891 e-mail: jsdmcp31@akane-ad.co.jp

令和4年度日本歯科医学会認定分科会総会一覧表

(令和4年1月現在)

認定分科会名	総会(学会)	開催期間・場所	責任者	連絡先・電話
日本口腔感染症学会	第31回総会・学術大会	10月22日(土)・23日(日) 名古屋市立大学 桜山キャンパス	名古屋市立大学大学院医学研究科 生体機能・構造医学専攻感覚器・形成医学講座 口腔外科学分野 洪谷 恭之 教授	名古屋市立大学病院歯科口腔外科学講座 TEL: 052-858-7549 / FAX: 052-851-5511
日本歯科心身医学会	第37回総会・学術大会	6月25日(土)・26日(日) ソニックシティ市民ホール	自治医科大学附属さいたま医療センター 小佐野 仁志 先生	自治医科大学附属さいたま医療センター TEL: 048-647-2111 (代表)
日本臨床歯周病学学会	40周年記念大会・総会	7月30日(土)・31日(日) パシフィコ横浜	清水歯科クリニック 清水 宏康 先生	株式会社インターベント内 TEL: 03-3527-3890 / FAX: 03-3527-3889 E-mail: jacp40th@intervent.co.jp
日本歯科審美学会	第33回学術大会・総会	10月15日(土)・16日(日) りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館	日本歯科大学新潟生命歯学部 歯科保存学第2講座 新海 航一 教授	㈱シンセンメディカルコミュニケーションズ TEL: 025-278-7232 / FAX: 025-278-7285 E-mail: jaed33@shinsen-mc.co.jp
日本顎口腔機能学会	第67回学術大会	5月28日(土)・29日(日) 松本歯科大学学生ホール(仮)	松本歯科大学総合歯科医学研究所 顎口腔機能制御部門 増田 裕次 教授	松本歯科大学歯学部 地域連携歯科学講座内 TEL: 0263-51-2116 / FAX: 0263-51-2115 E-mail: jssf67th@yahoo.co.jp
日本歯科東洋医学会	第40回学術大会・総会	10月22日(土)・23日(日) 昭和大学上條記念館	昭和大学医学部生理学講座生体制御部門 砂川 正隆 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL: 03-3947-8761 / FAX: 03-3947-8873
日本顎変形症学会	第32回総会・学術大会	6月9日(木)・10日(金) 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター	新潟大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面再建学講座 組織再建口腔外科学分野 小林 正治 教授	㈱シンセンメディカルコミュニケーションズ TEL: 025-278-7232 / FAX: 025-278-7285 E-mail: jsjd2022@shinsen-mc.co.jp
日本顎顔面補綴学会	第39回総会・学術大会	6月23日(木)～25日(土) ニューウェルシティ宮崎	宮崎大学医学部感覚運動医学講座 顎顔面口腔外科学分野 山下 善弘 教授	アンプロデュース株式会社 TEL: 092-401-5755 / FAX: 050-3488-2692 E-mail: info@jamp39.jp
日本顎咬合学会	第40回学術大会・総会	6月18日(土)・19日(日) 東京国際フォーラム	日本顎咬合学会 黒岩 昭弘 理事長	日本顎咬合学会学術大会事務局 TEL: 03-3261-0474 / FAX: 03-6675-9539 E-mail: gakujuitsu@ago.ac
日本磁気歯科学会	第32回総会・学術大会	11月4日(金)・5日(土) ガトーキングダムサッポロ (予定)	北海道医療大学高齢者・有病者歯科学分野 會田 英紀 教授	未定
日本小児口腔外科学会	第34回総会・学術大会	10月21日(金)・22日(土) 国際医療福祉大学 東京赤坂キャンパス	国際医療福祉大学三田病院歯科口腔外科 矢郷 香 教授	第34回総会・学術大会運営事務局 ㈱学術社内 TEL: 03-5924-1233 / FAX: 03-5924-4388 E-mail: jspoms34@gakujuitsu.co.jp
日本顎顔面インプラント学会	第26回総会・学術大会	11月26日(土)・27日(日) 東京医科大学病院	東京医科大学口腔外科学分野 近津 大地 教授	㈱JTB 茨城南支店 TEL: 029-860-2872 / FAX: 029-854-1664 mail: mice-tsukuba@jtb.com
日本外傷歯学会	第22回総会・学術大会	7月16日(土)・17日(日) 神奈川県歯科医師会館	神奈川リハビリテーション病院歯科口腔外科 河合 毅師 先生	関内馬車道デンタルオフィス TEL: 045-299-0488 / FAX: 045-299-0488 mail: kbidental2016@gmail.com
日本口腔診断学会	第35回総会・学術大会	9月23日(金)・24日(土) 札幌市教育文化会館	北海道医療大学歯学部顎顔面口腔外科分野 永易 裕樹 教授	株式会社 MONS TEL: 011-824-8805 / FAX: 011-826-4556 E-mail: convention@mons-sapporo.co.jp
日本口腔腫瘍学会	第41回総会・学術大会	2023年 1月26日(木)・27日(金) 岡山コンベンションセンター	岡山大学学術研究院医歯薬学域 口腔病理学分野 長塚 仁 教授	株式会社キョードープラス TEL: 086-250-7681 / FAX: 086-250-7682 E-mail: js0041@kwcs.jp
日本口腔リハビリテーション学会	第36回学術大会	11月19日(土)・20日(日) 北海道大学 学術交流会館	北海道大学大学院歯学研究院高齢者歯科学教室 山崎 裕 教授	北海道大学大学院歯学研究院 高齢者歯科学教室 TEL: 011-706-4582 / FAX: 011-706-4582 E-mail: jaor36@den.hokudai.ac.jp
日本口腔顔面痛学会	第27回総会・学術大会	10月9日(日)・10日(月・祝) 日本大学松戸歯学部 キャンパス(調整中)	日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座 大久保 昌和 専任講師	日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座 TEL: 047-368-6111 (代表) FAX: 047-364-6295
日本口腔検査学会	第15回総会・学術大会	11月12日(土)・13日(日) 神奈川県歯科医師会館	日本大学歯学部 武内 博朗 臨床教授	日本大学松戸歯学部有病者歯科検査医学講座 TEL: 047-360-9465 / FAX: 047-361-2712 E-mail: fukatsu.akira@nihon-u.ac.jp 担当: 深津 晶
日本口腔内科学会	第32回総会・学術大会	9月23日(金)・24日(土) 札幌市教育文化会館	北海道医療大学歯学部生体機能・病態学系 臨床口腔病理学分野 安彦 善裕 教授	株式会社 MONS TEL: 011-824-8805 / FAX: 011-826-4556 E-mail: convention@mons-sapporo.co.jp
日本睡眠歯科学会	第21回総会・学術大会	11月18日(金)～20日(日) 万国津梁館	日本大学歯学部口腔外科学第1講座 外木 守雄 教授	㈱日本旅行 TEL: 03-6892-5104 / FAX: 03-6892-1830 E-mail: jadsm2022@nta.co.jp

日本学術会議・歯学委員会

委員長 市川 哲雄

<http://www.scj.go.jp/>

1. 第25期歯学委員会および3分科会について

日本学術会議は、政策提言、国際的な活動、科学者間ネットワークの構築、科学の役割啓発などを目的として、内閣府所轄の下、政府から独立して職務を行う「特別の機関」である。歯学委員会は常置の分野別委員会の一つである。

2020年10月1日に日本学術会議25期（3年間）がスタートしている。今期は会員任命見送りの問題が生じ、マスコミ等で取り上げられ、日本学術会議が広く国民に知られるものとなった同時に、多くの改革が進められている。

歯学委員会（市川哲雄委員長）のもと基礎系歯学分科会（西村理行委員長）、病態系歯学分科会（村上伸也委員長）、臨床系歯学分科会（市川哲雄委員長）の3分科会が設置されている。歯学領域の委員は、二部会員の西村理行、村上伸也、市川哲雄の3名、連携会員26名、および3部の会員として任命された埴隆夫で構成されている。

2. 学会活動について

●報告／提言の作成

現在2つの報告／提言を作成中である。

1つは、2013年に発出した報告「我が国における歯科医学の現状と国際比較2013」後の歯学領域の学術の進歩について、「歯学・口腔科学分野の課題と展望（仮題）」としてまとめるものである。他学術領域、行政、社会に対して歯学・口腔科学の意義と重要性を広く認識、理解を促すことが期待されると共に、日本学術会議第25期に募集が想定されている学術計画作成にあたっては、その重要な根拠資料となる。

もう1つは、日本歯科医学会及び所属の分科会の協力を得て、「新型コロナウイルス感染症およびコロナ禍における口腔に関連した諸問題とその対応」をまとめる予定である。

●公開シンポジウム・講演会の開催

- 歯と口と健康のための体制作り：歯学における学術活動および国民への周知活動の方向性。2020年11月30日17:00～18:45。日本学術会議歯学委員会・臨床系歯学分科会、Web開催。
- 新型コロナウイルス感染症対策の現状と今後 ―歯科からの発信―。2021年6月29日17:00～19:30。日本学術会議歯学委員会、臨床系歯学分科会、Web講演会。
- 進化・発生・メカニカルストレスから探る顎顔面形成・維持機構最先端。2021年11月5日10:30～12:30。日本学術会議歯学委員会・臨床系歯学分科会、Web開催。
- 歯学分野におけるジェンダー・ダイバーシティ～課題と展望について～。2022年1月13日17:00～19:00。日本学術会議歯学委員会、病態系歯学分科会、第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会、Web開催。

本年度のトピックス

日本学術会議は、任命見送りに端を発して、以下の5項目、①国際活動の強化、②日本学術会議の意思の表出と科学的助言機能の強化、③対話を通じた情報発信力の強化、④会員選考プロセスの透明性の向上、⑤事務局機能の強化について改革を進めている。

③については、学協会、とくに各領域の学会連合体との連携強化が求められている。すでに多くの学会は、日本学術会議の協力学術研究団体として登録されている。歯学領域の学会連合体としては、日本歯学系学会協議会は協力学術研究団体として登録されているが、日本歯科医学会連合は未登録のままであった。今回、会員見送りに際して、日本医学会連合、日本歯科医学会連合、日本薬学会、日本看護系学会協議会の4団体には共同声明を出していただき、その後日本歯科医学会連合は協力学術研究団体として登録いただいた。

ジェンダー・ダイバーシティは、国を挙げての大きな課題である。歯学領域において、女性教員の上位職登用は、学生比率から見ても非常に低い。これは情報共有すべき事項と考え、歯学委員会と日本歯科医学会連合とで2022年1月に歯学領域全体で初めてのこの問題を取り上げるシンポジウムを行った。

歯学領域については、自らの領域だけで完結してしまうことが多く、他領域への発信力は低い。今回、カーボンニュートラルに関する連絡会議、パンデミックと社会に関する連絡会議、脱タバコ社会の実現分科会、第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会、老化分科会などに委員を送っており、日本学術会議という国の機関で歯学・口腔科学の意義と重要性を広く認識、理解を求めていきたいと考えている。新型コロナウイルス感染症についても、PCR検査やワクチン接種への協力、歯科治療におけるクラスターの発生報告が見られなかったことなどの歯科の貢献は他領域へ発信すべきことであると考えている。現在作成中の2つの報告／提言の作成を含め、引き続き日本歯科医学会および所属分科会のご支援、ご協力をお願いする次第である。

（文責：市川 哲雄）

《問い合わせ先・事務局》

〒106-8555 東京都港区六本木7-22-34

TEL：03-3403-3793, FAX：03-3403-6224

【会員数】204名、連携会員約1,900名（2020年11月18日現在）

【設立年】1949年（昭和24年）、内閣府

【機関誌】日本学術会議ニュース・メールなどの電子情報発信、地区会議ニュースなど

国際歯科研究学会日本部会 (JADR)

会長 中村 誠司



<http://jadr.umin.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第69回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会 (大会長、西村英紀 九州大学教授) を10月24日～25日の2日間にわたり、対面とオンラインのハイブリッド形式にて開催した。特別講演とシンポジウムに加え、海外からの演題を含むポスター演題数は79題であった。学術大会では清野 宏 教授 (東京大学医科学研究所粘膜免疫学部門) による特別講演、IADR 会長の Dr. Eric Reynolds による祝辞、KADR 会長の Dr. Kung-Rock Kwon による祝辞および特別講演、ならびに4つのシンポジウムが行われた。シンポジウムのテーマは「Japan-Originated Next Generation Biomedical Materials」, 「Current progress of Stem Cell Biology and Regenerative Medicine in Dental Science」, 「Regenerative medicine/Dentistry」 (日韓合同シンポジウム), および「Periodontal Medicine」 (若手シンポジウム) であった。

2. 学会活動について

米国に次ぐ世界第2位の規模の部会として、IADR の各種委員会に JADR から15名の委員を送り、IADR 全体の運営に積極的に関わるとともに、活発な情報発信を通して、世界及びアジア太平洋地区における日本のプレゼンスの向上に努めている。さらに、IADR-Asia Pacific Region (APR) では、2021年はJADRの会長がPresidentを務め、若手研究者の発表と討論を行う IADR APR Young Researchers Forum が、1月21日 (Korean Division 主催) および8月16日 (Chinese Division 主催) に、オンラインで開催された。APR の各 Division/Section より1名の発表者と2名のパネリストを迎え、いずれも約3時間にわたり活発な討論がなされた。本活動は今後も約3ヵ月に1回の頻度で定期的開催する予定となっている。また、2022年には、本forumに加えて、准教授以上の演者による IADR APR Senior Researches Forum も新たに開催することになり、初回は IADR-Pan European Region (PER) との合同で開催する予定で鋭意準備を進めている。

た。一方、Web を駆使した100% virtual な大会の運営は素晴らしく、その後も、ほぼ毎日のように IADR Member Discussion Forum の案内が届いている。現時点では Web を活用した会議を積極的に開催して、何とか学会活動を維持するしかない状況である。

また、昨年より、IADR- Asia Pacific Region (APR) では、Web の Board Meeting を頻繁に開催して交流を深めており、Young Researchers Forum (YRF) の定期的な Web 開催を始め、今年は Korean division の担当で1月21日に第3回を、Chinese division の担当で8月16日に第4回を開催した。テーマは、第3回は「Tissue Engineering and Regenerative/Restorative Dentistry」、第4回は「Craniofacial development and associated diseases」とし、JADR からはそれぞれ新部邦透先生 (東北大学) と小川卓也先生 (東京医科歯科大学) に発表していただいた。いずれも素晴らしい発表と活発な質疑応答がなされ、大変有意義な会であった。さらに、その勢いを駆って、来年度には Senior Researchers Forum (SRF) の定期開催を開始するべく企画している。このように、コロナ禍の副産物ではあるものの、Web 開催の会議などが開催できるようになり、IADR-APR の活発な交流が始まった。今後は、全ての会員が参加できるような規模へ拡大するよう考えているところである。IADR-APR の活性化はもちろんのこと、その中で JADR のプレゼンスを存分に発揮し、ひいては世界に向けて JADR のプレゼンスを示すことができると期待している。

(文責：中村 誠司)

本年度のトピックス

2021 IADR General Session & Exhibition は100% virtual での開催となった。世界各国から会員が集まることは不可能な状況であったためにやむを得ない対応であったが、国際会議では時差の問題もあって出席するのが大変であった。例えば、Council Meeting は日本時間で朝の5時から、ある Committee Meeting は夜中の0時からの開催など、多くの会議が集中した頃は少々寝不足にならざるをえなかつ

《問い合わせ先・事務局》

〒612-8082 京都市伏見区両替町2-348-302
国際歯科研究学会日本部会 (JADR)
事務局

TEL : 075-468-8772, FAX : 075-468-8773

【会員数】981名 (2021年10月20日現在)

【設立年】1954年 (昭和29年) 11月16日

【機関誌】「JADR ニュースレター」年2回、「Mail News」を年4回発行

公益社団法人 日本歯科医師会
 スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム

令和4年度
 SCRP

日本代表選抜大会

大学代表学生 募集案内

スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム (SCRP) は、
 歯科学学生によるグローバルな研究発表大会です。

歯科学学生時代の貴重な経験である研究発表は、研究発表抄録集に掲載して日本歯科医師会ホームページ上で公開し、大会の記録として残します。

日本代表選抜大会の優勝者は、2023年3月に予定されている国際歯科研究学会米国部会 (AADOCR) 主催による学術大会 (米国・オレゴン州ポートランド市) に日本代表として招待され、発表する機会を得られます。

全国からの代表学生と研究発表を競い合いながら、各国代表並びに一流の歯学研究者との交流を通じて、将来の可能性を更に広げていく大きな経験を掴むことができます。

研究活動を行う充実感と大学代表としての名誉に満ち溢れた日本代表選抜大会にぜひチャレンジしてください。

審査日

一次審査書類等提出締切日：2022年7月1日(金)

一次審査：2022年7月中旬
 書類 (研究発表抄録等) およびビデオ審査

二次審査：2022年8月26日(金)
 オンライン発表または対面発表・質疑応答 (一次審査通過者のみ)

※新型コロナウイルス感染症の状況を考慮し、開催形式 (審査方法) が「手引き」から変更になる場合がありますので、ご了承ください。

お問い合わせ先 ●各大学 教務課 / 学生課
 ●(公社)日本歯科医師会 事業部学術課・日本歯科医学会事務局
 TEL : 03-3262-9212 Email : scrp@jda.or.jp

参加登録締切日

2022年 5月9日(月)

・詳細に関しては、令和4年度 SCRP 手引き
 もしくは本会ホームページをご覧ください。
 URL : <https://www.jda.or.jp/dentist/scrp/>



編集後記

▶新型コロナウイルス感染拡大により強いられてきた不便な生活も、気が付けば2年になりなるとしています。この間、我が国は緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置の発出を幾度となく繰り返し、今や感染力が強いとされるオミクロン株に翻弄されています。とはいえ、ワクチン接種率の増加、特に3回目の接種の開始、新薬の開発など、散々恨めしく思ってきたウイルスとの共存も達成できるのではないかと期待も高まりつつあるように思います。

▶ウイルス発祥地である中国では、ゼロコロナというスローガンのもと、わずかな感染者の存在も許さないとしており、さぞかし住民の不満も募っているのではなかろうかと拝察しております。冬季オリンピック開催を目前に控え、コロナに対して厳しい姿勢を見せなければならないという事情は理解できますが、「そもそも発生元はどこでしたっけ？」と改めて問いたくなるのは私だけでしょうか？

▶さて、2021年9月23日（木）から3日間、第24回日本歯科医学会学会大会がオンライン開催されました。今やすっかりおなじみとなったオンデマンド開催は9月26日（日）からの約1か月間でした。「逆転の発想 歯科界 2040年への挑戦」というメインテーマのもと、なんと9つのチャンネルを同時に配信するという離れ業でした。演題は556に上り、参加者は2万人を超えました。数字だけを見ても、これは大成功だったことを雄弁に物語っていると思います。特に歯科学生の参加がこれまでに比較して格段に多かったという事実は驚くべきことで、コロナがどう影響したのかを考察する必要はあるにせよ、「こうしてみるとコロナも悪くないのかな？」などと不謹慎にも考えてしまいます。

▶最近、持続可能な開発目標 SDGs という言葉をよく耳にするようになりました。これは、環境破壊や貧困、飢餓などの世界が直面する問題にみんなで協力して取り組み、これを解決していこうという17の目標のことです。これまでに日本歯科医学会では、健康長寿の延伸に向けた「2040年への歯科イノベーションロードマップ」について討議し、これを決定してきました。これにより示されたそれぞれの目標は、SDGsの方向性に合致したものでなくてはならないはずですが。こうした情勢下で開催された第24回の学会大会を、運営に携わられた先生方に振り返っていただき、「第24回日本歯科医学会学会大会からみえてきたこれからの歯科界」、そして「歯科界をさらなる高みへ」というテーマでご議論いただきました。「歯科が日本を救う」という逆転の発想を如何にしたら具現化しうるのか。本号掲載の特集を是非お読みいただき、読者の皆様に共にお考えいただくためのヒントとなることを期待しております。

▶またプロジェクト研究では、「人生100年時代を見据えた歯科治療指針に関する研究」および「オンラインシステム等を用いた新規診断法の確立」として、まさにSDGsの方向性に沿った研究成果が掲載されています。合わせてお読みいただきたいと思います。

▶新年は、鹿児島錦江湾に浮かぶ桜島から昇るご来光と共に迎えました。初日の出と向き合いながら、これまでに幾度となく危機を乗り越えてきた人類の偉大さを改めて思いました。如何にコロナが猛威をふるおうとも、やがて季節は廻り、咲き乱れる花々に人々の心が温められることなのでしょう。そんな穏やかな日常が訪れることを心から願っています。

▶本号の出版にあたりご尽力賜りました、日本歯科医学会事務局ならびに一世出版の皆様へ、心からの感謝を申し上げます。

(浅野 正岳)

●表紙イラストコンセプト●



これからの歯科界が明るく、未来への期待を示すようなさまを、爽やかな色合いと軽やかな動きのある形で表現しました。

編集委員会委員 (Editorial Board)

委員長 (Chief) ; 松野智宣 (Tomonori MATSUNO)

副委員長 (Sub-Chief) ; 大久保力廣 (Chikahiro OHKUBO)

委員 (Editor) ; 浅野正岳 (Masatake ASANO), 服部雅之 (Masayuki HATTORI), 富士谷盛興 (Morioki FUJITANI)

担当理事 (Director) ; 野本たかと (Takato NOMOTO), 吉成伸夫 (Nobuo YOSHINARI)

複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、公益社団法人日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、図書館や著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けてください。著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接本会へご連絡ください。

〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル一般社団法人学術著作権協会
TEL：03-3475-5618 FAX：03-3475-5619 E-mail:naka-atsu@muj.biglobe.ne.jp

アメリカ合衆国における複写については、次に連絡してください。

Copyright Clearance Center, Inc.
222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA
Phone：(978) 750-8400 FAX：(978) 750-4744

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission from the following organization which has been delegated for copyright for clearance by the copyright owner of this publication.

Except in the USA

Japan Academic Association for Copyright Clearance (JAACC)
6-41 Akasaka 9-chome, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan
TEL：81-3-3475-5618 FAX：81-3-3475-5619 E-mail:naka-atsu@mju.biglobe.ne.jp

In the USA

Copyright Clearance Center, Inc.
222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA
Phone: (978) 750-8400 FAX: (978) 750-4744

本誌は「日本歯科医学会研究等の利益相反に関する指針」に従って、
著者に利益相反（Conflict of Interest：COI）状態の申告を求めています。

日本歯科医学会誌（Vol. 41・2022年）

令和4年3月10日印刷
令和4年3月31日発行

（年1回発行）（非売品）

編集発行 〒102-0073
東京都千代田区九段北4-1-20
日本歯科医師会内
日本歯科医学会
TEL 03 (3262) 9214
<https://www.jads.jp/>
印刷所 〒161-8558
東京都新宿区下落合2-6-22
一世印刷株式会社

Saforide®

初期う蝕の進行抑制、 二次う蝕の抑制、象牙質知覚過敏症の抑制に

う蝕薬物塗布処置

乳歯・永久歯にかかわらず全年齢で算定できます
(う蝕に対して軟化象牙質等を除去して充填等を行わず、フッ化ジアンミン銀の塗布を行った場合)

**1口腔1回につき 3歯まで46(69)点
4歯以上56(84)点**

()内は6歳未満の乳幼児または著しく歯科診療が困難な者

根面う蝕への塗布で算定できます

口腔清掃の行き届かない要介護高齢者、放射線治療に伴う唾液腺障害や薬の副作用による口腔乾燥症での全顎的な根面う蝕の多発者への塗布でも算定できるようになりました。

医療用医薬品
劇薬
保険適用

う蝕抑制・象牙質知覚過敏鈍麻剤

サホライド®液歯科用38% (フッ化ジアンミン銀溶液)



効能・効果

初期う蝕の進行抑制、二次う蝕の抑制、象牙質知覚過敏症の抑制(象牙質鈍麻)

用法・用量

1. 歯面の清掃

歯牙沈着物完全に除去したのち、オキシドールで歯面を充分清掃する。

2. 防湿乾燥

塗布する歯を中心として巻綿花を用い歯を孤立させる。唾液の多い場合には排唾管を挿入する。綿球で唾液をぬぐった後、圧搾空気で歯面を乾燥する。(きわめて歯肉に近い部分に塗布する場合は、ラバーダムを用いるか、歯肉部分にワセリン等を塗布して薬液との接触を防ぐ。)

3. 薬剤の塗布

小綿球に薬液数滴(0.15~0.20ml)を浸ませ3~4分間塗布する。患歯数、症状により適宜増減する。

4. 塗布後の処置

- 1) 防湿除去 巻綿花を取除く。
- 2) 洗 □ 水又は希食塩水で洗口する。

5. 塗布の回数

通常3~4回上記の術式を数日間隔で行なう。

一般的使用方法

サホライド液歯科用38%の塗布方法は各種症状により多少異なることがある。

A. 乳歯う蝕の進行抑制

う蝕部の遊離エナメル質をスプーンエキスカベーター等を用いて除去し、通法により局所の清掃乾燥を行ったあと上記【用法・用量】に従って本剤を3~4分間作用させて第1回目の処置とする。この塗布を2~7日間隔で計3回繰り返し行う。以後3~6か月に1回宛経過を観察(たとえば硬さなど)することが望ましい。その際の状態により要すれば塗布を行う。とくに前歯部などにおいては、隣接面をスライスカットし自浄作用をよくして本剤を塗布するとより効果的である。時期を見て必要に応じて修復処置を行う。

B. 二次う蝕の抑制

窩洞形成または支台歯形成完了後【用法・用量】に従って1~2回本剤を塗布する。

C. 象牙質知覚過敏症の抑制(象牙質鈍麻)

2~3日間隔で【用法・用量】に従って本剤を塗布し経過を観察しつつ3~4回まで繰り返す。窩洞形成または支台歯形成の際【用法・用量】に従って本剤を塗布し知覚鈍麻をまって翌日または翌日以後軟化象牙質の除去、または形成を行う。

使用上の注意

1. 慎重投与(次の場合には慎重に適用すること)
深在性う蝕 深在性う蝕に塗布した場合、歯髄障害をおこすことがあるので、本剤をうすめて塗布するかあるいは塗布を避けること。

2. 重要な基本的注意

本剤の適用により、銀の沈着で象牙質が黒変するので、永久歯の前歯への適用は避けること。

3. 副作用

- (1) 副作用頻度報告を含む総調査症例58,615歯中の副作用は
一過性疼痛 0.11%(66歯)
持続性疼痛 0.05%(28歯)
歯髄障害 0.12%(69歯)であった。

(2) 歯髄への影響

本剤は歯質への浸透性があるので、う蝕の状態によって、一時的に歯髄に影響を与える場合がある。(塗布直後、痛みを覚えれば直ちに水、食塩水またはオキシドールで洗浄する。尚、痛みが持続する時は歯科用フェノール・カンフルを塗布する。)

4. 適用上の注意

本剤は誤って歯肉、口腔粘膜に付着すると腐蝕する。歯肉に近い部分に塗布する場合、歯肉への付着を防ぐために、ラバーダムを用いるか、用い得ぬ場合は歯肉にワセリン、またはコアパターを前以って塗布して薬液との接触を防ぐようにすること。(誤って付着したときは速やかに水または食塩水あるいはオキシドールで洗浄するか、洗口させること。)

効能・効果、用法・用量、警告、禁忌を含む
使用上の注意等については添付文書を参照してください。

資料請求先

(株)ビーブランド・メディコーデンタル

大阪市東淀川区西淡路 5-20-19 TEL:(06)6370-4182

製造販売元 / 東洋製薬化成株式会社 大阪市鶴見区鶴見2丁目5番4号

くすりに関するご相談は「医療情報推進部」まで。
☎(03)3295-6926 土・日・祝日を除く 9:00~17:00

フルオール液歯科用2%、フルオール・ゼリー歯科用2%は、フッ化物歯面塗布処置(F局)の算定が可能です。

フッ化物歯面塗布処置(1口腔につき)

う蝕多発傾向者

110点

在宅等療養患者

110点

エナメル質初期
う蝕罹患患者

130点

令和2年度診療報酬点数表による

※フッ化物歯面塗布に用いる局所応用フッ化物製剤は、2%フッ化ナトリウム溶液、酸性フッ化リン酸溶液をいう。
※請求にあたっては詳細な算定要件をご確認ください。

う蝕予防フッ化物歯面塗布剤

フルオール・ゼリー歯科用2%

FLUOR・JELLY



医療用医薬品
保険適用

う蝕予防フッ化物歯面塗布剤

フルオール液歯科用2%

FLUOR



医療用医薬品
保険適用

効能・効果

う蝕の予防

用法・用量

通常、歯面に対し年間1~2回次の方法により実施する。
(塗布方法)

1. 一般的方法

(1) 歯面の清掃

歯ブラシ等によって口腔内を十分に清掃してから、必要ある時は塗布面の歯石を除去し、ポリッシングブラシ又はポリッシングカップに研磨剤をつけて歯面から歯垢(苔)を除くようにする。

(2) 防湿・乾燥

巻綿花を用いて塗布する歯を孤立させ、綿球で唾液を拭いた後、圧縮空気で乾燥する。

(3) 薬液の塗布

薬液(2mL以下)に浸した脱脂綿、ガーゼ等で歯面をなるべく長く薬液に浸潤させる。塗布後約30分間は洗口させないで唾液を吐かせる程度にとどめる。

2. トレー法

(1) 歯面の清掃

一般的方法と同様に行う。

(2) トレーの選択及び適合

歯(列)弓に適合するトレーを選び、このトレーの大きさに合ったゴム袋及び塗布紙をセットする。

(3) 薬液の浸潤

塗布紙にスポイトで薬液(2mL以下)を浸み込ませる。

(4) トレーの装着

トレーを口腔内に挿入し、軽く歯列に圧接して約4分間かませる。

(5) トレーの除去

トレーをはずし、塗布紙を除去する。塗布後約30分間は洗口させないで唾液を吐かせる程度にとどめる。

使用上の注意

1. 重要な基本的注意

塗布薬液量は2mL以下とし、幼小児においては必要最小限度にとどめること。

2. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

	頻度不明
過敏症	過敏症状があらわれたとの報告があるので、そのような場合には、ただちに塗布を中止すること。

3. 適用上の注意

- 1) う蝕の予防(歯面塗布)のみに使用すること。
- 2) 腐蝕性があるので、できるだけ口腔粘膜に薬液が触れないよう注意すること。
- 3) 塗布後約30分間は洗口させないこと。ただし、薬液の残留する唾液は吐き出させ、飲み込まないように指示すること。
- 4) 誤って飲用し、嘔吐、腹痛、下痢等の急性中毒症状を起こした場合には、牛乳、グルコン酸カルシウム水和物等のカルシウム剤を応急的に服用させ、医師の診療を受けさせること。
- 5) 歯科医師又はその指導下で歯科衛生士が取扱うこと。

4. その他の注意

In vitro 試験において、本剤との接触により、チタン、チタン合金(Ti-6Al-4V)又はケイ素含有材料(歯科用グラスアイオノマーセメント、歯科用コンポジットレジン充填材等)が変色したり表面性状に影響を及ぼすとの報告がある。

効能・効果、用法・用量、警告、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書を参照してください。

資料請求先

(株)ビーブランド・メディコーデンタル

大阪市東淀川区西淡路 5-20-19 TEL:(06)6370-4182

製造販売元/東洋製薬化成株式会社 大阪市鶴見区鶴見2丁目5番4号

くすりに関するご相談は「医療情報推進部」まで。

☎(03)3295-6926 土・日・祝日を除く 9:00~17:00



手軽に、歯、よろこぶ。

むし歯の始まり*を抑制する
CPP-ACP配合のガム

RecALDENT
リカルデント



CPP-ACP (成分) が持つ**3つの効果**

- 1 脱灰抑制
- 2 再石灰化
- 3 耐酸性増強

※むし歯の始まりとは脱灰のこと。

■許可表示: むし歯の始まりである脱灰を抑制し、再石灰化及びその部位の耐酸性を増強するCPP-ACPを配合しているため、歯を丈夫で健康にするのに役立ちます。食生活は、主食、主菜、副菜を基本に、食事のバランスを。■発売中のリカルデントには特定保健用食品ではない製品もあります。

リカルデント



モンデリーズ・ジャパン株式会社

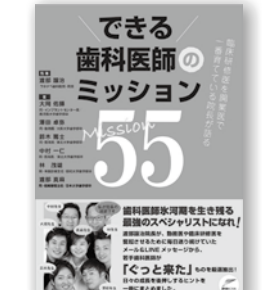
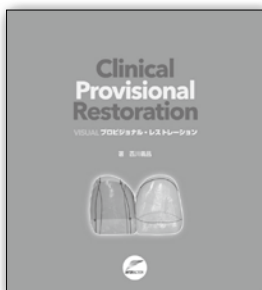
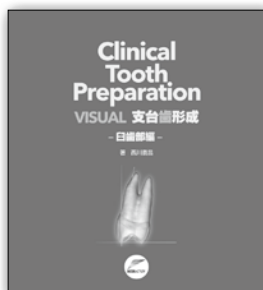
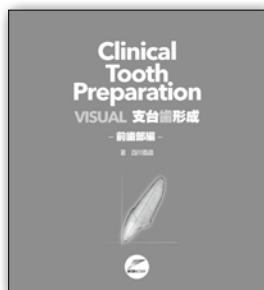
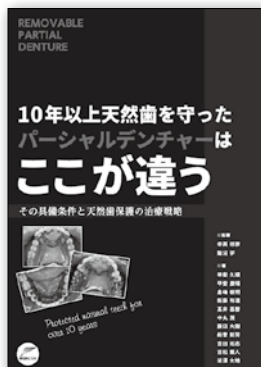
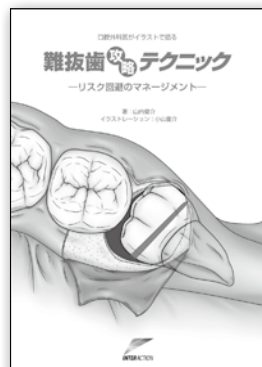




おかげさまで創業8周年

インターアクション株式会社

インターアクション ベストセラー書籍



**近刊
好評書籍**



【お求めは】

全国の歯科ディーラー様、シエン社様、Amazon、小社オリジナル EC サイトからインターアクションの EC サイトは、小売 EC サイトで実績のある Square の技術を活用しているため、安全です。



EPIOS

製品説明・口腔ケア実践セミナーを、定期開催しております。

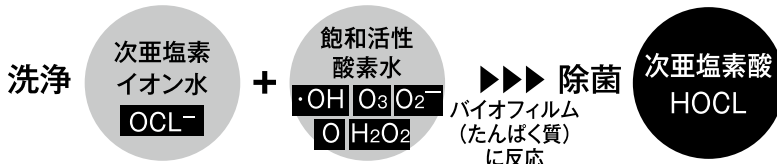
飛沫感染対策・口腔ケア製品シリーズ「三種の神器」

エピオスは、飛沫感染対策と口腔ケアを中心に、歯科医療を考えています。

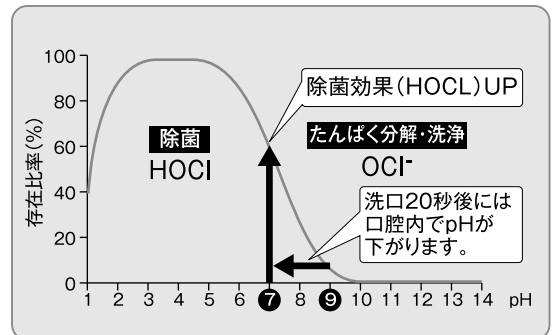
先生方は「飛沫感染対策」と「口腔ケア」に自信がありますか？

■「POIC®ウォーター」はこんな水。

口腔内の汚れ(たんぱく質)の除去を利用しながら、嫌気性菌である歯周病菌を活性酸素で死滅させ、最後に次亜塩素酸(HOCL)に口腔内で変化していく機能水です。



● 次亜塩素酸存在比率とpHの関係



1 POIC®ウォーター生成器 PLASMA POIC® WATER

たんぱく質、バイオフィルムを分解・洗浄し、除菌までを瞬時にを行います。治療からホームケアまで幅広く利用できます。

- 残留塩素濃度 / 500ppm (pH9.0~9.5)
- 生成量 / 電解水、約4L/回
- サイズ / W247×L280×H403mm
- 販売価格(1台) / 533,500円(税込)
- 電圧 / AC100V (50Hz:60Hz共用)

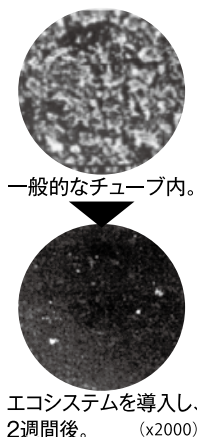
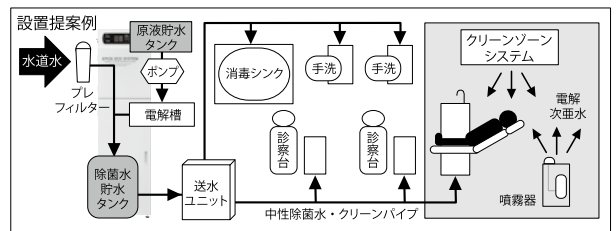
2 オリゴ糖カルシウム入り 三リン酸5Na口腔ジェル ORALOOP 4+ オーラループフォープラス

歯石の沈着を防ぎ、4つのチカラで大切な歯を守るジェル歯みがきです。

- サイズ / H約155×W約35mm
- 販売価格 / 3,300円(税込)

■「エピオスエコシステム」とは？

給水ユニット内、ユニット吐水の残留塩素濃度を正確に保ち、衛生的な歯科除菌水で連続除菌治療を可能にした装置です。生成される水は、高い殺菌力をもつと同時に、安全であることが知られています。



エピオスエコシステムを導入した歯科ユニット水質データ Water Quality Examination on Dental Offices in Japan

Before EPIOS					After EPIOS Installed			
pH	Bacterial Count (CFU/ml)	meet Water Quality Standard?	RCC (ppm) ^{※1}	Bacterial Count at AWS ^{※2} (CFU/ml)	pH	Bacterial Count (CFU/ml)	meet Water Quality Standard?	RCC (ppm)
7.1	>1,000	No	<0.1	7,024	6.8	0	Yes	8
6.9	>1,000	No	<0.1	10,560	6.4	0	Yes	5
7.4	>1,000	No	<0.1	2,344	7	0	Yes	4
6.8	0	Yes	<0.1	4,570	5.8	0	Yes	5
7.1	0	Yes	<0.1	12,800	6.7	0	Yes	5
7.4	>1,000	No	<0.1	6,171	6.4	0	Yes	10
6.9	>1,000	No	<0.1	2,904	6.3	0	Yes	10
6.6	>1,000	No	<0.1	6,920	6.3	0	Yes	3

※1:残留塩素濃度 ※2:エアウォーター・シリンジ

3 残留塩素濃度補正システム [スタンダードタイプ] エピオスエコシステム

高い除菌力を持っている電解機能水を、連続的に末端まで供給するシステム。

- 残留塩素濃度 / 1~40ppm (pH6.3~6.8)
- サイズ / W400×L300×H1450mm

ユニット3台の場合(一例) 2,948,000円(税込)
(チューブ交換工事・床下配管工事一式含む)
※ただし、病院現状により異なります。

お問い合わせ先

製造販売元 株式会社 **エピオス** 〒135-0047 東京都東区富岡1-26-15 飯田ビル3F

フリーダイヤル (全国通話料無料) **0120-65-6166**

EPIOS
MEDICAL REVOLUTION

KONAMI

「摂食・嚥下訓練器具のみこむトレーニング」

ラビリントレーナー®

「いつまでもおいしく口から食べる幸せ」

食事中にむせる、食物を飲み込みにくい、食べこぼす、ということはありませんか？そのような方は嚥下（えんげ）機能が衰えはじめています。いつまでもおいしく食事ができるようにラビリントレーナーで口腔トレーニングを行いましょ。



つるし穴
フックなどにつるして保管する時に
ご使用ください。

ラビリントレーナー

¥3,500

規格：材質：シリコンゴム／重量：約36g
耐熱温度：200℃（オートクレーブ滅菌可）
サイズ：長さ149mm×幅54mm×厚さ32mm
カラー：口腔色

ご家庭で使いやすいスタンド付！



大きい植毛部分は義歯床や人工歯
全体を磨くのに適しています。小さい
植毛部分は毛が固くクラスプ部分
や義歯の細かい溝などを磨くのに
適しています。

コンパクトヘッドタイプ
プラーク除去に優れたテーパー加工。

ドルフィン歯ブラシ

100本：¥10,000 25本：¥2,500
患者価格 ¥100



オリジナル歯ブラシとして名入れする
事が可能です。

規格：ソフト (S)
ミディアム (M)
カラー：ソフト (S)
パステルブルー
パステルイエロー
パステルグリーン
パステルピンク
ミディアム (M)
ブルー・イエロー
グリーン・ピンク

包装：100本入 (ASS)
25本入 (単色)

ホルダー部
親指を差し込んで、
支えるために使います。

リングル部
(舌のトレーニングに
使用します)舌を鍛え
るための部分。舌の上
に、ふせるようにして使
います。

ラビアル部
(唇のトレーニングに使用します)
唇を鍛えるための部分。歯と唇の
間にはさむようにして使います。

グリップ部
指にぎります。



置いたときでも口に入れる部分が接地し
ないので衛生的

ドルフィン義歯ブラシ(スタンド付)

¥4,800
患者価格 ¥1,000

規格：柄…ポリプロピレン製
毛…ナイロン
硬さ…かため
耐熱温度…80℃
スタンド…3色 (イエロー、レッド、ブルー)
材質…シリコンゴム
包装：6本入 (ASS・単色)

ドルフィン義歯ブラシ

¥2,400
患者価格 ¥500



規格：柄…ポリプロピレン製
毛…ナイロン
硬さ…かため
耐熱温度…80℃
包装：6本入

医院内でのご使用に最適!!

極細毛とラウンド毛の二段植毛で、歯肉の
奥まで優しくケアできます。

ドルフィン歯ブラシ DUO

¥1,440
患者価格 ¥120



カラー：ブルー イエロー グリーン ピンク
包装：12本入 ASS・単色

総合歯科医療商社

株式会社 **コサカ**

東京都練馬区豊玉中2-18-14

TEL:03-3557-4111 FAX:03-3557-4116

https://www.kosaka.co.jp E-mail:dental@kosaka.co.jp

全科実例による社会保険 歯科診療

令和4年4月版 **別冊付**

多数の新症例で改定内容をわかりやすく解説します。構成をリニューアル。好評の読みやすさはそのままに、より詳しく、より探しやすく生まれ変わります。

■ A4判 / 1008頁 / 2色 ■ 定価 11,000円 (本体 10,000円 + 税10%)

4月発刊予定!!

令和4年度改定を
徹底解説!

歯科保険研究会 編



手に取るようにわかる コンポジットレジン 修復のメソッド

保坂啓一・畑山貴志・米倉和秀 著

本書では、“なぜその器材を選ぶのか”“臨床で何を以てどう使うのか”を多くの写真や図を用いてわかりやすく解説しています。

■ A4判 / 176頁 / カラー ■ 定価 8,800円 (本体 8,000円 + 税10%)



臨床家のための床矯正治療

バイオフィUNCTIONALセラピーという新しいアプローチ

花田真也 著

臨床家を対象として床矯正治療の進め方を体系的に解説した一冊!

床矯正治療のメカニカルな治療だけでなく、機能を改善するためのバイオフィUNCTIONALセラピーについても詳細に解説しています。

■ A4判 / 112頁 / カラー ■ 定価 8,800円 (本体 8,000円 + 税10%)



コンポジットレジン修復 器材・材料の選択基準と有効活用法

田代浩史 著

コンポジットレジン修復の各臨床ステップで使用する器材・材料の選択基準とその有効活用法を臨床症例とともに解説。

豊富な症例をもとに解説し、実際どのように活用するかが一目わかります。これから勉強する方々も、すでに臨床に取り入れている方々にも、役立つ情報満載の一冊です。

■ A4判変型 / 196頁 / カラー ■ 定価 9,900円 (本体 9,000円 + 税10%)



Thinking ahead. Focused on life.



Spaceline EX

スペースライン EXが iFデザイン賞の金賞を受賞

ドイツのiFデザイン賞は、50年以上の歴史を有し、各国から選ばれた審査員によって厳正に選考される世界的に権威のあるデザイン賞です。世界中から6,400以上のエントリーがあった中、最優秀デザインとして75件に授与される金賞（iF GOLD AWARD）をスペースライン EXが受賞しました。人間工学に基づき緻密に計算されたデザインは、患者さんだけでなく術者にも理想的で洗練されたデザインであると評価されました。



発売

株式会社 **モリタ**

大阪本社 大阪府吹田市垂水町3-33-18
〒564-8650 T 06. 6380 2525

東京本社 東京都台東区上野2-11-15
〒110-8513 T 03. 3834 6161

お問合せ お客様相談センター 歯科医療従事者様専用
T 0800. 222 8020 (フリーコール)

製造販売・製造

株式会社 **モリタ製作所**

本社工場 京都府京都市伏見区東浜南町680
〒612-8533 TEL 075-611-2141

久御山工場 京都府久世郡久御山町市田新珠城190
〒613-0022 TEL 0774-43-7594

販売名: スペースライン
一般的名称: 歯科用ユニット
機器の分類: 管理医療機器(クラスII)
特定保守管理医療機器
医療機器認証番号: 228ACBZX00018000

www.dental-plaza.com

C O N T E N T S

特別企画

座談会 「第24回日本歯科医学会学術大会からみえてきた これからの歯科界」

..... 住友雅人, 松村英雄, 小林隆太郎, 松野智宣, 大久保力廣

学術研究

■平成31年度(令和元年度)採択プロジェクト研究

A. 人生100年時代を見据えた歯科治療指針に関する研究

..... 平野浩彦

B. オンラインシステム等を用いた新規診断法の確立

..... 藤澤政紀

オンラインフルカラー版

<https://www.jads.jp/>

読者アンケートはこちらから



日本歯科医学会